せて、唱名すゝめ申さんに、睡り給ひぬと思ふから、浮世の夢の覺め給ふも、見えず聞えず人はかく、老いては存命ふかひもなし。老少不定といひながら、老樹の刀自は朽ちもせで、若樹の花をこゝろなく、散らす無常の嵐山、歌によみ詩に作るとも、わがこの歎きは述べもつくさじ。況いて身まかり給ふ君の、息の内なる一言も、遺し給はねばいとゞなほ、口をしくこそおぼすらめ。たとひ命に限りありとも、などてわが身をかはらして、迎ひとりては給はらざる。朝な夕なに繰る數珠も、おもふに任せぬ玉の緒は、さてもつれなき世の中に、神も佛もなき事か。」と老のくり言くりかへす、片輪車のよるべなき、母の歎きを慰めかねて、正忠は鼻うちかみ、「今朝のみは八重垣の方の、おん顔の色もよくて、粥などすゝめ進らすれば、こゝろよく受け給ひしを、今さらおもへば燈の、消えなんとするときに、しばし光をますといふ、常言もあるものを、こゝろもつかで清水へ、詣でたるさへ悔しきに、葦戸が我を呼ぶとて、漫に出でて歸らぬは、いと淺はかなり。」と咳きて、思はず向上ぐる出居の柱に、一封の書翰を貼りて、書きおきの事と寫しつ。「こは訝し。」と亡語ち、身を起して引き剝がし、封押し切つて始め終りを讀みも果てず仰天し、「惜しむべし葦戸は、藥の價に身を賣りて、鎌倉へ赴くよ。」といふ聲のいと高きに、泣き沉みたる刀自も頭を擡げ、耳を側て、「正忠、そは何とかいふ。葦戸は主君の爲に身を賣つて、東地へ赴くとて、書き遺したるものありとか。あな痛まし、豫てより夫婦談合せし事ならば、我が身にも聞えしらし、告別して出で行かざる。忠義に捨つる身なりせば、それをわりなく留めはせじ。老いては事に僻めりとて、わが子も婦もかくまでに隔つるならめ。」と怨ずれば、正忠いとゞ本意なくて、「こは物體なし。なでふ母御をあしく思ひて匿したるにて候べき。しらし給ふ如く、八重垣の方のながき病著に貯祿竭きて、藥を進らするよすがもなく、わが妻にも乳はあれど、それも稚君は飲み給はず。所詮乳人に身を賣りて、些の金を調へばやと、葦戸がいふにまかして、夫婦しのび〳〵に給事すべき媒介をかたらひしが、八重垣の方はさらなり、始めよりわが母に、この件のことを告げざるは、しばしが程なりとも、物をおもはし奉らじとて、示しあはせし夫婦が誠も、みな仇となりて候ひし。」と聞えしらすれば、母親は袖もて見えぬ目を拭ひ、「人を恨むは老の愚癡。婦が忠義もいたづらに、その身價は調ひながら、今般の益にもたたざりし、と告げもやりなば葦戸は、悔しくもあらん歎きもせん。耳は疎くとその遺書の、聞かまほしきに讀み給ひね。とく〳〵。」といそがされ、又卷きかへす水莖の、迹も涙に見えわかねど、正忠聲を高やかに、

「心あわたゞしけれど、一筆遺し進らし侍り。扨も兎口婆々とやらん、たゞ今參りつること、鎌倉武士の威權あるが、この曉には故郷へとて旅だつに、乳母を將て下らんとて、それが家隷なりける男を鄕導して、直に談合せよとぞいふなる。とにもかくにも、御身の歸り給ふをまちて、事を定

めんとするに、束の間も許さず、もしそのいふにまかし侍らずば、忽地事の破れとなりなん。けふにしあらずば、一トたびは別れ奉りなんものを、愁ひに見もし見られもし侍らば、いとゞ名殘のをしかりなん。老いくだち給ふ母御のこと、なほいはけなき千江松がこと、胸くるしければ審にはまうさず。生まれ出でてより以來、わらはが懐ならでは睡らざりし、夜寒き今宵はいかにあかしやすらん。健かに見えても、あしき蟲ありと、醫師のいひつることを忘れ給はで、よろづのたうべものなんどに、心して勦り給へかし。灸は毎月に灼る侍りつるに、今より後は怠りがちにぞあるべき。ころは神無月なれど、彼はなほ給一ッに侍り。綿入れたるものを、綴りあはして被せんこゝろがまへに、さゝやかなる裂どもを搔きあつめて、戸張せしまゝに侍り。母のなき子と憐みて、もし縫刺てて得させんといふ人もあらば、ともかくもして被せ給へ。野干玉の夜の鶴、子を思ふ苦しさは、大堰川よりもなほ深く、夫に別るゝかなしさは、嵯峨野のおくの鹿よりも、なほやるせなく侍れど、何事も忠義に思ひかへて侍るかし。さて身價は十枚と定めて、殘りなく受け得て侍れば、千江松が腰に著けたる守袋に祕めおき侍り。」

と讀みくだすに、刀自はいよ〳〵耳をさし寄し、「あなおほつかな。今一遍その條を讀みかへし給へ。」といへば、正忠かさねて、

「身價は十枚と定めて、殘りなく受け得て侍れば、千江松が腰に著けたる守袋に祕めおき侍り。これをもて、八重垣のおん方に藥をまゐらし、もし餘りあらば、稚君には日來ほしがらせ給ふ鳩の車、母御には久しき願ひにておはする、黒谷の血脈を乞ひ得て進らせたまへかし、遠く東路へ赴きては、天とぶ鴈の翅ならで、信せんことはかりがたし、とおもへば八百日ゆく濱の眞砂、かぎりなくも物くるほしくて、筆のはこびもおほつかなきまでに、かくなん。」

と讀み果つれば、刀自は頻りにはふり落つる、涙と共に咳き入りて、噫と叫びつゝ轉輾べば、正忠慌てて扶け起し、「心持はいかに坐する。」と、問へども刀自は應へせず、とり携る樣にして搔い繰りながら正忠が、刀の鞆をしかと拿り、閃りと拔いて我とわが、吭へぐさと突きたつを、炎所は少し外れたれば、大事の深手に濆る、鮮血は泉の涌くがごとし。正忠は思ひかけず、母の自害に周章し、叶嗟と抱き留むれども、とゞめかねたる今般の苦痛、見るに忍びず聲をふるはし、「こは何故にか自殺し給ふ。物にや狂ひ給ふらん、淺ましや悲しや。」と叫びつ呼びつ身ひとつに、思ひ亂れて介抱も、屆かぬ孝子の哀傷に、なき疲れて瞻り居たる、鈴稚丸千江松も、この景迹に驚きまどひ、「あな。」と叫びて正忠が、左右の袂に携り著く。刀自は絶えなんとする息の下に、「やよ正忠。老耄れて物に狂ひ、自害すとな思ひ給ひそ、千江松が衣服の紐に括り著けたる守袋に葬戸の身價のありともしらず。河原へも

て出で、裾の汙れを浣はんとて、推し流されし十枚の金は、嫁が忠義も水の泡、あはれはかなき後室の、末期の益にたたずとも、むじんに捐ててはわが子と嫁に、再び向くべき面なさに、刀に伏して稚君の、介抱も後易く、わが子に忠義を盡させん、と思へばこそかくはなれ。されば葬戸がをらずなりて、君もその子も稚きに、男の手にて養育まば、母さへ絆となるならば、曾子とやらが孝ありとも、諸葛とやらんが忠ありとも兩つながらよくせんや。凡そいきとし活ける物、命惜しまざるはあらざめれど、長生すれば恥多しと、いにしへ人のいひけんも、今わが上に思ひしる。前世の惡業にや、死にたうても得死なれず、正忠夫婦が患難も、わが身なかりせばかくはあらじ。只速かに迎へとり給はれかし、と三年が程、讀み奉りし彌陀經の、功德なければ後の世も、思ひやられて悲しけれ。」とかき口說く言の葉も、常なき風に誘引はれて、絶えなんとする玉の緒を、繋ぎかねて正忠は、數回歎息し、「君家の艱みに身も瘠せて、思ふに任せぬ母の事、等閑なりし反哺の孝、賴むは死出の山烏、熊野の牛王は汙すとも、主親の爲とのみ、誓ひし事も徒らに、老少無常迅速の、理のみは僞りの、なき世なりけり。神無月いとゞ時雨れてわが袖の、朽ちぞ增る。」と打嘆けば、刀自は苦しき息を吻き、「稚君は何所に坐す、孫は何所。」と呼びかけて、見まくほしげに搔い探れど、見るも由なき盲目の、たどりかねつゝ闇きより、くらきに歸へる常世の旅、永き別れも過去未來と、わかつ袂に絆切れて、撲地と輾べばもろともに、よゝと泣く稚兒を、正忠左右に引きよして、六すぢの涙四ツの袖と、共に五臟を絞りけり。且くして目を押し拭ひ、「稚君も千江松も、わが身と共に一つ日に、三人の母に捨てらるゝ、生別死別とかはれども、かはらぬものは恩愛のみ。逝きにし人の迷ひ給はん、われも迷へり是れはさて、いかなる過世の惡報にて、忠義の爲に葬戸が、煎じ詰めたる身價は、延年不死の良藥とも、ならで流轉の海に入る、ゆくへも絶えてしら浪は、よすれど歸る時しなき、母の自殺もこれゆゑと、思へば金はわが爲に、讎敵にてありけり。」と悔いの八千たび百千たび、身の憂き限りかき口說く、いとゞ不覺の歎きなり。かくて正忠は、志を勵まして、母の脫ぎ捨てたる紙衣をとつて、千江松にうち被せ、鈴稚丸を勦り慰め、屛風引きめぐらして、八重垣の方と刀自が亡骸を匿し、さて近鄰き里人を語らひて、その夜二ツの棺を送り、心ばかりなる追善の佛事をいとなみて、初七日は過ぐしつ。さらぬだに慰むかたもなき宿に、幼き主從は母を慕ひて泣きくらし、泣きあかす程に、正忠いよゝせんすべなく、家をば人に售り與へて、些の路銀をとゝのへ、鈴稚丸を懷にし、千江松が手を引きて、東路へ旅だちけり。そのこゝろ、葬戸が往方もしるべく、光實の在所を索ねて、緣由を告げ、是彼に談合せば、若君を養育むたつきなからずやはと、俄に思ひたちけれど、洛を出でていく日もあらぬに、鈴稚の咽喉に物出で來て、飯粒も肚裏に納まらず、乳房ならではと思へど、貰ふべき便もなくて、日に

日によわりゆくに胸くるしく、藥餌に路銀を遣ひ失ひしかば、いよゝ救ふべき策もなく、いと口をしと思へども、千江松に乞兒さして、ながき冬の夜をあかしかねつゝ、山鳥の尾張路を過り、武士の矢矧の橋は渡れども、渡るにかたき世を潛びて、三河に鄰る遠江の、荒磯に狎れし友千鳥、なく聲細る鈴稚は、たのみすくなく見えにけり。寔に是れ苦中の苦、正忠が孤忠さらに比なかるべし。さればこの子を視ること親にしかず、臣を知ること君にあり、當初光隆、金の猫をもて彼を購ひたる、亦うべならずや。

第十五套

天龍川の上に忠臣節婦に逢ふ
富田の旅館に重忠竹川を賞す

葎戸は果敢なくも、十枚の金に身を賣りて、彼の武夫に誘引はれ、轎に扛き乘せられて、ゆきとゆく程に、堀川の邊なる衡門の内に到りつ。こゝなん重忠の宿所にて、件の武夫は家隷榛澤六郎なりけりとは、後にこれをしれり。このとき重忠の一子重稚は、年僅かに三ツなるに、乳母なるもの俄頃に病み臥し、剩へ鎌倉より御教書到來して「重忠速かに下向致すべき。」由を命ぜらる。よつて榛澤六郎は、兎口婆々を呼びて緣由を告げ「早く乳母を將てまゐらば、辛苦錢は乞ふに任すべし。」といふに、兎口婆々その心を得て、轎て葎戸を汲引す。しかるにその日、重忠の内室嫩子は、洛のなごりに清涼寺へ參詣せしかば、途にてそのことを聞き、渡月橋の邊にて、竊かに乳母に參るといふ女を見るに、いと寒しけれど、由緒あるものの妻なるべく見ゆるに、彼ならば重稚に冊けおくともよろしかりなんとて、直に榛澤に仰せて、葎戸を召し養へさしたるなり。されば重忠都に上りしこと、義高追討の爲なれば、敵に聞えん事を厭ひて、世に披露せざりけり。こゝをもて榛澤は、葎戸に主君を名告らず。さて堀川へ將て來りて、まづ彼のをうなに浴さし、髮を梳らし、新しき衣服一襲を與へて、綺羅やかに裝はし、この夕より重稚の乳母に參らせたり。元來葎戸は心ざま怜悧しく、信ある女なれば、重稚早く馴れ親しみ、嫩子もいと愛でたきものに覺えて、舊の乳母にも勝れりとす。憐むべし、葎戸は八重垣の方身まかり給ひて、わが身價は良藥に、換ふる由なく姑も、自殺して失せぬる事は夢にもしらざりし。その曉に旅だちて、蹈みもならはぬ東地へ、主の供して下り、月に洛の山を見返れば、嵯峨野の方へゆく鴈も、對に離れてわれぞ泣く、涙氷りて朝霜に、稚兒の寐覺を慰めつゝ、行轎に日數經て、道なほ遠江なる、天龍川のほとりまで來にけり。をりしも十一月の上浣にて、川々は涸るゝ頃なるに、思ひの外兩三日雨降り水高ければとて、左右なく船を出さず。重忠ぜひなく富田に駕を駐めて、天龍川のあくを待ちぬ。浩かる所に重稚俄頃に發熱して、次の日より痘瘡の氣

色見えしかば、重忠は心ならずも且く保養させんとて、なほ富田に逗留せし程に、痘瘡の日子も漸くにたちにけり。「さらば翌あさての頃は、必ず川を渡さん。」とて從者等にも、「その準備をせよ。」といふに、各旅宿の徒然を懶く思ふなれば、歡ぶ事大方ならず。大人すらかくの如し、況いて重稚は長き旅寢に倦きて、「彼處へゆかん。其所へ伴へ。」とてむづかるに、葹戸も嫌しかねたり。嫩子は、屢重稚の泣く聲するを聞きて、「さこそわが夫のいぶせく覺すらめ、婢どもゆきて慰めよ。」といふに、悉皆心得果てて、重稚の側へ參りつ。暫しこそありけれ、いひ慰むる事などもおなじ容なれば、ながく稚きを樂しまするに足らで、むづかる事ますゝ甚し。折しも一の婢慌しく走り來りていふやう、「目今外面に、をかしき物たべの參り侍り。その打扮親子かと覺しくて、編笠深くしたる男、行囊を脊負うて、その上に年三ッか四ッ許りなる稚兒をかき乘し、又同じ程なる稚子に烏帽子めきたる頭巾を被せ、鼓を打ちて舞はし侍るに、庭門に呼び入れて鱗さば、いと興ありなん。」といふを、葹戸聞きもあへず、「その者を呼び入れ給へ。」といへば、皆羣立ちて走り出で、庭の折戸を押し開き、招き寄すれば葹戸は、重稚をかき抱き、風あてさせじと細やかに、あくる障子のかみならぬ、身は只假初の闕窺に、冬の柞の一樹たつ、霜の柱を蹈みわきて、父が鼓に朗詠も、訛言なれど手振よく、

大底往時心總苦　就中腸斷是秋天

と白香山は口順めど、秋よりもなほ堪へがたき、北山下風烈しきに、霏々と降る雪は、鵞毛に似たり稚兒の、插頭す扇の手も龜み、閃りと飛んで散亂す。痛ましきかな鈴稚は、驛路に病みて竹川の、背にかゝる患難に、正忠は路費も盡きて、千江松に舞舞ひさし、露命をつなぐたつきとは、定めなき世のならひにて、ならはぬ旅も東路や、驛家に宿札打つたりける、秩父二郎重忠が旅館の庭に呼び入れられ、うたひつ舞ひつなか〳〵に、彼此人は慰むれど、慰めかねし親と子が、心ぞ思ひやられたる。葹戸は障子の隙より見れば、怪しや物たべの稚兒はわが子に似たり。こは訝しと思ふにぞ、胸まづ轟くを押し鎭めて、と見かう見れば千江松なり。笠にて面をかくせども、紛ふべくもあらぬ夫の背に、負はれ給ひし鈴稚は、いといたう憔悴へ、見しには變る面影は、故こそあらめ問はまほし、わが身のこゝにある事を、しらでや來つると悶えつゝ、心の中も舞の手も、ともに亂れをうち囃す、鼓の調べいとせめて、奏で果つれば婢等は、笑壺に入りて散動みたち、「世わたりにはあれど、雪天に寒きも厭はで、幼き者のよくこそしつれ、物とらせん。」といひかけて、皆裏に入りにければ、葹戸は押し拭ふ、涙見せじと微笑みて、「稚兒が舞の手に慰められ、重稚丸は目睡み給ひぬ、潛かに臥房へ入れ奉らんに驚かし給ふな。」といふに、衆皆點頭きて、閒毎の襖開け閉てに、心してなほ奥の閒へ、入相告ぐる鐘の聲、諸行無常をわが上と、いさしら雪の降りはえて、頃あはぬ風を寒み、庭に立在む千江松

は、潸々と泣きて父を見かへり、「爹さまいたう寒く侍り。しろきものの降るになぞ、いつまでかこゝに居給ふ、とくゆき給へ。」と引く袖を、わが子の頭にうち被けて、「疾勞もせめ、寒くもあらん。只今御達の物給はるに、しばし待てかし。」といひ諭せば、背にも又ひとり、鈴稚丸は雪より先へ、消えるがごとき泣聲に、ゆり賺せどもをやみなき、吹雪は襟に吹き入れて、鳥肌となる主從親子が、蹲ほしけに待ちわぶる、雀色時過ぎがてに、暮れなんとすれどなほ明き、庭白妙になりにけり。浩かる所に葎戸は、菓子積みたる折敷を携へ、さらりと開く障子の音に、正忠おもはずうち仰ぐ、笠の内より面をあはし、こは吾妹子ともいひかねて、籬笆の陰に躲ひつ。さすがに羞づる襤褸の袖に、拂へど解けぬ六ッの花、四ッになる子は眼はやく、「あな母御よ。」と走りより、のぼらんとすれど緣側に、つかへる胸と胸くるしき、葎戸は外々しく、「さてもうたてき稚兒や。いかに物のほしきとて、わらはを母とはなめげなり。鎌倉殿のおん覺えめでたく、北條、和田にも劣り給はぬ、重忠ぬしの嫡男重稚丸の乳母なるに、その子に乞食さすべきか、由なき事をいふものかな。」と叱り退くるは傍輩に、聞かせじと思ふ親の慈悲、とは知らずして千江松は、伸び上りつゝ引き留むる、衣の褄に發と薫る、留奇南もたえて聞きわけぬ、いはけなければ有理と、思ふに母は心よわくて、引かれし隨に揮りも放さず、「やよ幼きもののよく聞けかし。舞の褒美に賜はする、この菓子はほしからずや。花もあり紅葉もあり、いと美しきにたうべよ。」といひつゝ、折敷をさしつくれば、千江松は頭をうち揮り、「菓子も餅もほしう侍らず、母御よ乳を飲ましてたべ。」といふ聲高しと葎戸が、心をおくに人や聞く、洩らさじとすれど袖にさへ、漏るゝはおのが涙なり。さればとて愁ひに、心よわくてはと思ひかへし、涙紛らす聲をふり立て、「憐愍かくれば馴れ〳〵しく、物いひ態のけにくさよ。汗れ垢つくその手もて、寄りな著きそ。」と引き拂へば、拳放して仰様に、撲地と輾びて泣く聲も、たたまくほしき雪の松、半ばは雪に埋れたり。葎戸吐嗟と走り下りて、扶け起し抱き寄し、吹き溫むる手の甲は、熟柿に似たる霜瘡に、剪らぬ爪さへ幼稚くて、劬勞するよと搔き揚ぐる、産毛のまゝの項髮も、むすばぬ夢の心持して、我を忘るる恩愛に、思ひ迫りて泣き沉む、その一聲ぞ誠なる。正忠も忍びかねて、編笠脫ぎ捨てつゝ、笆の陰をたち出でて、葎戸にいふやう、「はからざる再會、歡ぶに堪へたれど、身の宴しきを省みれば、迭の恥なり。名告りあはんも面ぶせなれど、爰にて遇ふは若君の命竭きさせ給はぬなるべし。元來夫婦離別の事は、主君の爲なれば歎くに足らねど、そなたの遺せし身價は、箇樣々々の事によつて、わが母誤つて大堰川へとり落し、剩へ八重垣の方は、その日はかなくなり給ひしが、母も又自殺してうせ給へり。首尾は如此々々なり。」と綷審かに說きしらし、又いふやう、「かかりしかばわが身ひとつにて、稚君と千江松を養育みては、嵯峨野に住みも果てがたく、そなたの行方、光實のおん在所を

しらんとて、坐に彼の地を旅だちたれど、生得質弱き鈴稚君、乳ばなれにて疳の蟲出で、道路病み患ひ給ふ程に、さらぬだに貯へ薄き路銀もすでに遣ひ果し、わが兒に乞食さしながら、日に歩み夜に宿り、爰までは來つれども、稚君は口中に物出で來給ふから、飯を押し潰しなどして進らすれど、それさへ咳き入りて受け給はず、乳汁あらばと思へども、こは貰ふべきよすがもなし。八重垣の方世にいまそかりし日は、そなたの乳さへ飲み給はざりし稚君も、餓ゑては人を選み給はず、往來の婦を見かへりて、その懐へ指さし給ふ飢渇の責に、介抱の術も竭きて死を待つのみ。夥の金に身を賣らし、人の乳母となしぬれば、わがものならぬ乳なりとも、いまの危窮は忍びがたし。義理を捨てて義理に稱ふ、夫婦が信は神ぞしる。とく〳〵その乳を、稚君に進らせ給へ。」と一五一十綜をわきてぞかき口說く。葎戸は聞く事毎に思ひかけざる憂き數の、丈夫の物がたりに、いとゞ胸のみ塞がりつゝ、手の放たれぬ痞にて、涙も拭ひあへざりしが、やうやく頭を擡げ、「わがうへには月日も照らしたまはず。守袋に遺し置く、金さへ夫婦が仇となりて、母御に自害さしましたる、身の罪こそいとふかけれ。男の手して幼き、主君とその子を介抱し、憂き旅をし給へば、百折千磨の患難を、さこそと推量して侍り。今の主君重忠ぬしは、理非明斷の良將にて、善を擧げ惡を退け、慈悲ふかくおはすれば、折をうかゞひて名告りしらし、古主と夫の上を告げて、親み聞えなば猫間の家、再興の便宜も爰にありなん、と思ひながら給事して、いく日もあらねば、思ふのみにていひも出さず。宣ふ如く、十枚の金にこの乳を賣りては、わが子なりとも私には飲ましがたければ、生死の際におはします、鈴稚君には何事も、思ひかふる恩義はなし、そを憎しとて韃たれ、罪なはるゝとも厭ふべきかは。いざ葎戸が懐にて溫めて進らしなん。あな痛ましや。」と鈴稚をやをら抱きとり、襟かきわき、乳房を口に銜ますれば、千江松はこれを見て、媚しと母に縋り著き、「などて松には飲まし給はぬ。わが物なるに。」とむづかりて、抱かれ給ふ鈴稚の、附紐拿つて引き除くるを、「そはせぬものぞ。」と言ひ諭せど、善惡もしらぬ稚兒は、猶縁はりて泣き叫ぶ。「左も右もはる乳を、一ッはわきてわが子にも、飲まさるゝ事ならば、この煩惱はせぬぞかし。聞きわきて、彼の菓子をたうべよ。」と嫌せども、只いな〳〵と蹉跎し、搔い遣れば又携り著くを正忠あらやかに抱き除け、「こは嗚呼なる愚者かな、汝幼くとも侍の子なり、君臣上下の禮儀をしらずや。常言に一寸の蟲にも、なほ五分の魂ありといへり。我儘すればとてさすべきか。」といきまきて威しの拳ふり揚ぐれば、なほ聲高く泣き叫ぶ、親はこれにも心おかれて、屢見返る障子の内より、「葎戸々々。」と呼びたつるは、傍輩の聲音なり。「をい。」とはいへど立ちかねて、心せく程鈴稚は、乳のひゞきに頃日の、餓ゑを忘れて餘念なく、絞り寄して飲み給へば、千江松はいよゝ悶えて走り寄りつゝ、鈴稚の襟上飛んで仰樣に、引きかへせば鈴稚は、乳房放してわ

つと泣く。これや冥土の阿鼻叫喚、餓鬼道の苦しみも、かくやと許り正忠も、とゞめかねてせんすべなく、わが子を捉つて膝に引き布き、刀引き拔き胸前を、ぐさとつらぬく一トゑぐり、叫苦と魂銷る幼兒より、母はわが身を刺さるゝおもひ。庭の白雪忽地に、鮮血に染みて時ならず、散り布く紅葉に彷彿たり。折しもあれ障子の内にけはひして、「猫間の忠臣竹川因幡介正忠、怨敵義高が妖鼠の術を破るべき奇藥を投れるこそ神妙なれ、秩父重忠對面せん。」と呼ばはれば、一度に乘す銀燭の、障子にうつりて白晝の如し。葦戸あはやと立たまくせしが、思ひ定めて走りも退かず。正忠はなほわろびれたる氣色なく、徐かに刀を拭ひ納め、緣頰に進み寄りて、前面を佶と瞻望ぐれば、裏より障子をさと開かし、二郎重忠野袴に行縢して、黄金作の太刀を佩き、威風凛然として端ちかく立ち出づれば、右に嫩子ありて、重稚を舊の乳母に抱かし、左に榛澤六郎ありて、手に銀の壺と稚兒の破衣をもてり。そのとき重忠は、正忠に對つていふやう、「姓名豫て聞き及べど、おもふに勝る夫婦が忠信、綷の顚末は彼所にありて審に聞けり。しかるに正忠鯁忠にして一子を殺せし事、人情にあらずといふ、後世の議論もあるべけれど、こは已むことを得ざるにこそ。易牙が桓公に佞媚して、其の子の肉を食ましめたると、年を同じうして語るべからず。嗚呼この夫にしてこの妻あり、されば千江松があへなくも命を隕せしこと、いと憐むべく惜しむべしといへども、時に當つては亦是れ家邦の忠死なり。われ近曾洛にあつて、義高退治の計畧をめぐらし、江家の博士に就いて、密かに彼の術を破る奇方をしれり。その方七歳未滿なる男子の痘瘡の痂を取り、又七歳未滿の男子、その心の臓の血をとつてこれに合はし、猫間の重寶たる金の猫の眼を塗りて、彼に進むれば、その術忽地やぶれて再び行ふ事を得ず。かくはあれ、いと得がたき藥劑なれば、遂に望みを絶ちたるに、時なるかな、わが子重稚、近曾痘瘡を患みて將に愈えなんとす。こゝに漸くその一藥を得たれども、生きながら幼兒の心の臓とらんこと、不仁これより甚しきはなし。絶えてこの奇藥調ひがたしと思ひつるに、思ひきや、正忠今その子を殺して、破鼠の良藥成就せんとは。且金の猫は曩に爲久が鎌倉殿に獻りしを、光實に返し與へ給へり。抑、重忠不意くも、深く猫間光實に賴まれて、わが家に養ふこと久し。且重忠が竊かに洛に上りしも今又俄頃に鎌倉へ立ち歸るも、義高退治の事に預るを以てなり。さるにても、年寒うして松柏の操を知り、家衰へて忠臣の志を守るとは、御邊夫婦が事ぞかし。彼重稚が痘瘡の痂は、藏めてその壺にあり。それ〳〵。」といふに心を得て、榛澤六郎進み寄り、件の壺をさし出せば、正忠これを取つて莞然とうち咲み、「はからざりき。光實主は、重忠どのの庇みを受けて鎌倉にいまし、葦戸又その家に給事いたさんとは。設し千江松が心血をもて、義高が幻術を破らば、孩兒が忠義は父に勝れり。歡びさふらへ葦戸。」と勇む良人に勵まされ、泣かじと袖を嚙み締むる、妻の歎きは有理と、おもふ心

を鬼にして、正忠はかひ〳〵しく、袖搔きあげて千江松が、疵口より手をさし入れ、絞り入れたる壺の中に、ありと聞くなる天地の、雨にはあらぬ血の涙「かかれとてしも産まざりし、親の手自子を殺し、その血を取つて忠臣と、稱めらるゝ身の薄命、これも過世の惡業か。」と、夫婦目と目を見あはして、緣頰に置く壺を、榛澤六郎受け捧げて進らすれば、重忠夥數回押し戴き、「小を以て大に易ふ。千江松が非命の死は、猫間の家再興の礎なり。義高を退治せん事、今は實に難からず。その績を賞せん爲に、葎戸は今日より身の暇をとらするなり。鈴稚の乳母となりて、夫婦忠義を竭されよ。」と仁あり義ある暇の賜。葎戸聞きて膝をすゝめ、「仰せ歡ばしく侍れども、參り仕へていく程も侍らず。身價を返しまゐらする、便なきをいかにせん。」と推辭むけしきに嫩子は、向よりたもちかねたりし涙を、やゝ拭ひ納め、「否々、その事は心易かれ。いぬる日わが身淸涼寺の賽に、具したる下部が、『大堰の邊にて、拾ひたる物あり。』と告げしかば、堀川へ歸りて後、これを見れば稚兒の衣にして、紐に著けたる守袋に十枚の金あり。『ぬしあらば返せかし。』といひしらして、榛澤六郎に預けおきたりしが、向に夫婦の物語にて、そは葎戸が身價なりと猜したり。彼の金既にわが手にあれば、露ばかりも施したる恩義はあらず。しかれば頃日重稚を養育ましたる報いには、千江松が像見の衣に、添へてとらする十枚の金、逃懇に弔ひてよ。」と說き示せば、榛澤軈て葎戸が返す袖に、亡骸を裹むにあまる袖の露、守袋もけふは又、佛を賴む母親の、その身價は六道錢、四ツになる子をひとり遣る、死出の山吹色見えて、移れば變る死顏も、是れ見果めかと、逆緣ながら、親の廻向も阿彌陀佛、導き給へと念じけり。濕り勝なる夜の雪の、深き惑ひを解かんとて、重忠はつと身を起し、「破邪の良藥手に入りたれば、鎌倉へ走せくだり、なほ光實と事を議りて、義高を討ちとるべし。正忠夫婦は鈴稚丸を介抱して、我が從者に打雜り、潛びて彼の地へ來られよ。心得たりや。」と勵ませば、正忠は、「阿。」と應へつゝ、葎戸に注目し、禁むる涙の玉の屑、雪にも瘠せる庭の梅に、春を契るや開運の、天龍川に時を得し、實に不思議の陽報なり。

評に云く。この卷殊に忠臣節婦、義士孝子の上を述べて人情を竭せり。但動もすれば、文辭戲曲に類すること多し。こゝをもて、その語路野なりといへども、おのづから雅致、讀む者をして倦かざらしむ。且貧家の身賣、花街に趣かずして乳母とす。奇にしてます〳〵妙なり。

賴豪阿闍梨怪鼠傳卷之七後編中冊　終

賴豪阿闍梨怪鼠傳　卷之八（後編下冊）

東京　曲亭主人著述
門人　魁蕾癡叟批評

第十六套

丐兒月下に各志をいふ
榛澤營中に潛かに客を迎ふ

文治三年の二月も、まだ三日四日といふころ、殘んの雪も解けそめて、梅ほころぶる野末の藪に、白きはすがれ紅は、二三輪にして開きもそろはず、山は遠く聳えて日の沒ること遲く、水は近く流れて柳まづ暮れなんとす。林に歸る烏は、月を戴きて友を呼び、北へとてゆく鴈は、霞の網に罹るかと危まる。日沒り果てては、寒さ冬よりも堪へ難く、風はなほ地を吹きて、馬蹄の迹ふたゝび氷るなるべし。相模國に諸越と呼ぶ原はふるき名所にて、歌どもあまたあり。こゝにをる野臥の乞兒等は、晝は彼此人の側に携りて錢を乞ひ、あるは金門さし覗きて、飯のあまれるを乞ひ、夜は樹の陰、草の上を臥所として、いかなる夢をか結ぶ。主ある犬には劣りたる身も、命はなほ惜しきものにて、荒薦

におく霜を防けども、孫晨が高き志には似ず。脇を枕けて枕とはすれど、顏回が樂しみはしらず。飯桶といふものに、飯の饐して餲せる、魚の餒れて肉の破れたる、何くれとなく受納め、飽くときは懈り、餓うれば求食り、彼の寒苦といふ鳥の、夜も明けば巢を造らんと鳴くものから、明くればはや忘るゝに似たり。されば片岡山の旅人、臥見野の老翁がたぐひ、その後は聞えず。世に棄てられて羞をしもしらぬものどもなれば、かくても一生をおくり果つべう思ふにや、いと愚かなり。こゝに少許引き入りたる小松の間に、怪しげなる草舍あり。竹をもて柱とし、薦を垂れて壁として、僅かにひとりを容れつべき末黑の萩を折り敷きて、臥猪の牀とも見ゆるかな。さは蝸の住家得たり顏なるぞ、この徒が中にては、頭だちたる者なるべし。甲夜の程は、おの〳〵野火を燒きて餘寒を凌ぎ、圓居して來しかたを問ひ慰め、彼所の乳母が物をしみなる、人のうへわがうへ、心のゆく隨なる物がたりして、果ては魚屋の門に引き捨てたる、鰣目黑といふ魚の、頭つき合はしたるが如く、打臥したる薦の隙を漏る月影は、いぶせくもあらぬにや。鼾の聲は時ならぬ蟇の鳴く音に似たるもをかし。浩かる所に、桐の葉の紋著けたる提灯を、夥の奴隸に乘さし、野袴に長き兩刀を帶びたる武士、南の方より出で來れり。この人は是れ別人にあらず、重忠が郎黨榛澤六郎なり。當下榛澤は、臥したる丐兒をと見かう見て、そと注目すれば從者等、主の意を得て、矢庭に乞兒を引

き起し、提灯をさし寄せて、「出でよ〳〵。」と急がせば、丐兒等は大いに驚き、「こは何事ぞ。」といふ聲も、寐惚れて夢の心持せり。榛澤六郎微笑みて丐兒等にいふやう、「汝等ふかくな駭き恐れそ。秩父殿の仰せを稟け、潛かに問ふことありて來れり。原是れ私の趣意ならねば、等閑におもふべからず。そも汝等が名は何とかいふ、亦何によつて野臥とはなりたる、審かに告りしらせよ。時宜によりて不意き幸あるべきぞ。」と說き示せば、衆皆畏みてついゐたり。時にひとりの丐兒、年紀は二十四五なるが、土埃に面ぐろみして、海松の如くかき垂れたる破衣に、藁の索を帶として、頤の下胸の上に瘡毒ふき出でて、尖胸國の夷めきたるが、おそる〳〵這ひ出でて申すやう、「僕は鼻聲の布賀八と呼ばれて、元來鎌倉米町の商人、某が愛子なり。一子なれば父母の寵愛世に勝れ、鳩の車、竹の馬、よろづの翫弄物なんど、いへばさらなり。仙餅、團子、砂糖餅、一聲泣く時は前に列なり、二聲泣けば四鄰を騷がし、いふこと每に成らざるはなし。かく甘やかに養育まれて、米は飯櫃より生くものとおもひ、錢は錢筩より生くものと思ひ、四恩のおふけなきをしらず、三綱の鴻いなるをもしらず、學ばすれども學ばず、讀ますれども讀まず。商人の家に生まれて賣買の事に疎く、おのが儘に生育つ程に、忠孝の道を蹈み違へて、大磯通ひに親の身代を飾ひはたし、親族の強意見も、馬の耳に吹く風と聞きながし、色と酒とに身をもち崩すを、なほ憎しとも思はぬにや、二親ながらゆく末を思ひくして身も細り、はかなくなりては、一周忌も問はぬ間に、早生まれたる鄕に得住まずなりて、家さへ人に賣り、うかれ出でたる不孝の天罰、忽地報いし難病は、足ることしらぬ樽酒の、むかしの榮華は夢と覺めて、正銘打つたる薦被り、貰ふ陶の糙粉汁も、身はなきものと思へども、物を食はねば脾だゆくも、あるにかひなき懶さを、憐み給へ。」とかき口說く、涙に涕を啜りまぜて、いと長やかに物語れば、榛澤聞きて嘆息し、「子を養ひて敎へざるは、これ親の悞ちなり、敎へてこれを學ばざるは、その身を愛せざるなりと、司馬溫公のいへるぞうべなる。世の人多くは愛に溺れ、子に敎へずして孝を求む。これ愛するに似て愛するにあらず、實はその子を棄つるなり。然はあれ、父子の道は天性なり。縱ひその父、父たらずとも、子はもて子たらずばあらじ。不賀八が不孝の罪、かくこそあるべけれ。」といひ懲らす。その次なるは法師なり。剃りて再び伸びたる頭の毛、枝栗に似て斑なる、髯は野老に異ならず。こは色中の餓鬼大將、梵妻ぐるひ、般若湯に、師父の遺物の檀那の布施も遣ひ果せし伽藍堂。更に五戒はたもたずして、只一蓋の傘に、三界无安と悟りを開きし、上守の鄕隨得寺の角鄰坊とぞ名告りける。これらを宗徒の草野物として、手長の愚念太、色狂人の拔太郎、空拜の四九次郎、股火の阿太郎、橋の本の川太郎、掃留搜の犬總太、虱拾の爪之介と、おの〳〵名告る來し方の、懺悔にいとゞ小夜深けたり。榛澤は丐兒等が、長物語をつく〴〵聞きて、奴隸にもたせし提灯の、火光

にそれか是れかとて、見れども索ぬるその人に、似たるは絶えてなかりしかば、呵々とうち笑ひ、「揃ひも揃ひし痩犬ども、汝等に所用はなし、活けるかひなき身を啣たば、近曾求めし新刃の刀、試して見ん。」と云ひもあへず、鯉口四五寸拔きかくれば、「呵呀。」と叫びてもろ共に、掌を摺り、蹇へたる足を曳き、崩れ立つたる周章は、八聲の鷄に駭きて、夜行の百鬼忽地に、銷えて迹なくなる如く、右往左往に逃げ失せたり。なほ臥したるもあらんかとて、榛澤は彼此を見かへりつゝ、樹がくれたる草舍に佶と目を著けて、ひとりの奴隷を招きよし、密語けば心を得て、次第に耳をとりかはし、點頭きあうて窺ひ寄れば、梢を渉る鐘の音に、月沒り果てて松風の、調べも春の聲ながら、寒さは更に冱えまさる、草木も今を睡り端、驚かさばやと席戸搖り、跳り入る奴隷等を、内より丁と搔い爬み、撲地と投ぐるを飛び踰えて、組み伏せんとて競ひ懸るを、内にては寄せたてじと、或は搏り退け衝き倒し、涙りうたする人礫、盆の飛びに異ならず。この勇力に辟易して、後方なるはすゝみ得ず、色めき立つたる折しもあれ、薦簾をかき揚げて、ゆるぎ出でたる乞兒が打扮、身には襤褸を被たれども、目に錦繡を羨ます、旦暮飢渴に迫れども、壯裏三畧に富みたりけん、實に不敵の面魂、手に一條の棍頭槍を掌つて、奴隷等を睨まへ廻らし、「乞兒の小屋にも門戸あり。薦一枚もこの身の城郭、呼門ひもせず狼藉せば、高き卑きの敵手はえらまず、逆緣ながら丐兒が手の中、目に物見せん。」と罵つたり。時に榛澤す、み對ひて、まづ懷中より一枚の骨相書をとり出し、うち開きつゝ、左見右見て、やがて奴隷を退かし、さて丐兒にいへりけるは、「天晴力量聞きしにたがはず。緣故を告げざれば、訝しく思ふは理なり。我は秩父殿の郎黨に、榛澤六郎と呼ばるゝもの是れなり。密かに主君の命を受けて、こゝに來れるは、望むところあればなり、承引かんや、いなや。」といふ。丐兒聞きて冷咲ひ、「こは思ひもかけぬ。在鎌倉の縉紳多かる中に、牛打つ童もよくしつたる、重忠ぬしより野臥の、丐兒に所望を宣はするは、そは問ふにも及ばず。新刃を試す二ツ胴、命の所望にこそあらめ。とてもこの身は野ざらしの、果ては餓ゑたる犬を肥す、惜しくもあらぬ五尺の軀、一寸試しは腕なりとも、二寸試しは膝なりとも、天地へ返す命の入物、切柄注めて用意あれ。」と、應へも果てず破と坐し、騷ぐ氣色はなかりけり。榛澤六郎は、この形勢を見てます〳〵感嘆し、「否々、わが望みはさる筋ならず。聞きも及びつらん、先年江州粟津にて討死ありし、木曾義仲の嫡男、美妙水冠者義高君は、正しく右幕下の壻がねにて、大姫君に妻はし給ふべかりしに、義仲滅亡のころ、御曹司は鎌倉を脫れ出で、武藏なる入間川の上にて、石田太郎爲久が家隷たる、堀江藤二光澄に擊たれ給ひき。さるによつて大姫君の愁傷大かたならず、哀慕の涙に御身もほそり、長き病著に臥し給ひて、今ははや三年あまり、四年のはるは歸れども、歸らぬ人を思ひつゞけて、近曾は、病いよ〳〵重やかに見え給ふ。原是れ想ひ病みの事なれ

ば、良醫の匙にもすくひがたく、補瀉鍼灸の術もよしなし。こゝをもて母君政子御前いといたう歎き給ひ、『もし義高に似たるあらば、良賤を擇ばず將て參れ。そを義高なりといひこしらへて、大姫を慰めなん。彼の人存命へ給ひぬと聞かば、姫が病痾の、なでふおこたり果てざらんや。』とて、竊び〳〵にその人を索ねさし給ふ。その事はすべて重忠がうけたまはりなるに、『この諸越が原なる乞兒に、年の齡はさらなり、その面影さへ、彼の御曹司によくにたるあり。』と告ぐる者あるによつて、今夜その徒を驚かし、今亦汝を熟視れば、御曹司の骨相書に露ばかりも錯はず。汝假に、『木曾の御曹司なり。』と稱へ、鎌倉に參らば、こよなき忠節ならん。聞きわきたりや。」と密めき告ぐれば、丐兒聞きてうち笑ひ、「乞食の小屋にも富とはいへど、これは又餘りの事なり、寐て待つかひに果報はありとも、鎌倉殿の壻がねに、はかる丐兒は鳶を鷹、かかる僥倖は夢にだも見がたし。よしや面影の似たればとて、ひとつ館に住み給ひし良人を、いかでか見忘れ給はん。こは實事とも覺えず。」と回答へ果て入らんとするを、榛澤忙はしく呼び留め、「世にも稀なる身の幸を、思ひ惑ふは愚かなり。義高久しく鎌倉にいませしかど、終に一度も大姫君と面をあはし給はざりし。加旃、汝が言行を見るに、すべて丐兒の模樣に似ず。これを木曾の御曹司なりといふとも、誰か贋物と思ふべき。狐疑なせそ、とく參れ。」と言語を竭していひ諭せば、乞兒はしぶ〳〵承引きて、「こは面ぶせなる雇人かな。かくまでいはるれば脫れがたし、しからば仰せに從ふべし。いざ給へ。」とて身を起すに、榛澤ふかく歡びて、手を揚げてさし招けば、準備やしたりけん、ほとり近き木陰より、鞍置馬を牽き出し、奴隸が負うたる柳匣に、のしてさし出す狩衣は、路次の人目をしのぶ摺、うち被せてかき乘すれば、馬上ゆらりと諸手綱、拳短にかいくり毛、向驅蹴出す從者が、臺傘、建傘、鉾、太刀持、前驅、後從の行列を揃へて、七種蹈ます春の駒、足掻もよしや義高を、義高にする僞りは、僞りならぬ元の枝の、杖もて夜の露拂ひ、乘し連れたる提灯も、これや燈の花壻君、榮枯反覆面のあたり、かかる例は日本にも、韓にもあらぬもろこしが、原を眞直にねりゆきぬ。

第十七套

重忠大いに義高を款待す
光實進んで唐絲を鞠問す

さても鎌倉には、大姫君ふかく義高の横死を哀悼し、晝は終日、夜は通宵、思ひ忘るゝ隙もなく、鴛鴦の衾は涙に氷りて、相思枕上の塵、拂ふに由なく、けふと暮し翌と明して、すでに三周の忌日も過ぐし給ひしかば、「只願に尼となりて、彼の君の後の世を弔はまほし。」とて、父君にも母君にも、をりをり申さし給へども、「いまだ盛りにも至らざるわが女兒を、いかでか尼になすべきか。」とて許し給

はず。さればにや、此のはるは、姫の病著、いよゝ重やかに見え給へば、政子御前は、ます〳〵心安からず、秩父二郎重忠は、機に臨みて謀畧ある人なればとて、竊かにこれを召さして、仰せあはされたる事ありけり。さる程に二月はじめの五日の日に、重忠營中に參りてまうすやう、「清妙水冠者義高君は、なほ存命へてこの世に坐するなり。曩に石田が郎黨、堀江藤二が擊ち奉りしは、眞の義高にあらず。それは唐絲が子に大太郎といふもの、主の身代りに死して、爲久主從を欺きたるなるべし。さるによつて、御曹司は今なほ恙なくて、諸越が原なる丐兒の隊に入りていませしを、重忠が家隸榛澤六郎辛うじて伴ひ參りつ。」と聞えあげしかば、政子御前ふかく歡び給ひて、重忠には夥の引出物を賜はり、軈て緣由を大姫君に聞えしらし給ふに、姫は只、枯れたる枝に春の花を見、海月の骨にあふ心持して、氣色淸々しくなり給ふ程に、傅きの女房達これを祝し、兩三日の後浴み、櫛らし進らするに、御身の瘦りこそ、初めの如くにはあらね、立居などは平生に異なる事なかりしかば、政子御前ふかく歡びおほして、鎌倉殿にかくと聞えたまへば、賴朝卿うち點頭き、「さらば重忠に仰せて、義高を饗應さすべきなり。」と宣ひける。かくて重忠は、饗應使を承りて、俄頃に山海の珍味をつらね、椀、皿、折敷なども萬新しきを旨とし、夥の女房を給侍とし、件の丐兒を上座なる、錦の褥に引き上し、嫩子をもて、「衣服を更へ給へ。」といはすれども、丐兒はこれをうけ引かず。「我は平生路傍に睡り、橋下に臥し、蔽れ垢つきたる衣のみ被なれたるに、かく綺羅やかなるを被せられては、中々に龐寒かるべし、錦を被ても丐兒は丐兒なり。また藁衾を被ぎても大姫の夫なれば、誰かは侮り卑しむべき。あな結氣や。」と回答へつゝ、裥の上に足蹈み反らし、蔽衣の裏引き反して、蝨を拾ふ傍若無人、餘念なき爲體に、嫩子は只呆れ果て、再びいふよしなかりけり。浩かる所に女房達は、手に〳〵椀飯珍膳をもてまゐりつ、所せきまで丐兒のほとりに居ゐたり。寔にこれ飯は精を厭はず、膾は細きを厭はず、相模に名だたる秦野の蘿蔔、鎌倉鰕は更なり、武藏なる芝浦の長辛螺、牡蠣、淡菜貝、伊豆の浦の打蚫、柄川酒、上野には刀根川の鯉、下野には稻葉の牛房、常陸の楂魚、上總なる大瀧浦の鯛、下總の浪子、紐苔、眼黑鰹、すべて關の八州の野菜、海味を調理しつ。あるは十盛の飯器に盛り、或は九曲の酒地に湛へ、美を盡さずといふ事なし。そのとき秩父重忠は、烏帽子の掛緒結びあげて、長袴の裾引垂らし、廊より繞り入り、小太刀を脫ぎて出居の方に蹲踞し、「いぬる元曆の始め、木曾殿討たれ給ひしところ、御曹司は不覺に營中を潛び出でて、行方もしられずなり給ひき。されば木曾殿朝敵となりて討たれ給ふとも、御曹司は鎌倉に在して、その事に與り給はず。將壻君にて坐するなれば、鎌倉殿にもいとゞ不便におぼせしかど、往方定かならざれば、索ね出しまゐらせん事、總追捕使の威勢にもすべなくて默止し給へり。よりて重忠仰せを受けて、しのび〳〵に御在所を索ね奉り、

かく恙なくて歸り入らせ給ふ事、こよなき僥倖なり。加之重忠饗應使をうけ給はり、荆婦にて候嫩子は、婚姻の介添をうけたまはり、今日黄道吉日なれば、大姫君を妻はしたまふべしとて、專らその用意あり。重忠夫婦が面目、これにます事やある。豫て定められたる婚姻の時刻は、酉の刻なるに暮るゝには程あるべし。まづおん箸をとり給へかし。」といと恭しく申すにぞ、丐兒聞きて冷笑ひ、「父義仲が武功を媚み、閒者をもて行ひを亂さし、朝敵の名を負はして、討滅ぼしたる賴朝がはらきたなさ。錦の囊に毒石を裹める如き、梟雄老奸の主に仕へる重忠が賢がほは、一ッ穴なる老狐、王莽が謀師阿滿が股肱に勝れり。打揃うたる主從が穢れたる饗應は、えこそ受けじ。」と罵りもあへず、忽地礎と蹶ちらせば、飯は座中に散亂し、轉び碎くる磁器の、反ねかへりて重忠が、額をはつしと打ち破れば、あなやと驚く嫩子と、もろともに立ち騷ぐ、女房たちを重忠は、尻目にかけておし留め、懷なる紙をもて、徐かに額を押し拭ひつゝいふやう、「鎌倉殿豫て重忠に宣ひつる事あり。『義高を丐兒の隊に入れて、いくその艱苦を受けさしたるは、賴朝が悞ちなり。何にまれ彼が意に悖らず、よく款待せよ。』と仰せしに、衣服を進らすれども脫ぎ更へ給はず。椀飯を進らすれども箸をだにとり給はず。かくまで不興を被る事いとも畏し。女房達も驚くべからず、わが妻もいと不覺なり。」といひ懲らすにぞ嫩子は猶口をしく思へども、夫の言語重やかなるに頭を低れて默然たり。かかりしかば女房達は、

缺けたる折敷を拾ひとり、廊上を掃きさよめ、是彼運びかへして、次の間へ退出しかば、重忠かさねて嫩子にいふやう、「一旦不興を被るとも、兎もかくもして慰めまゐらせずば、仰せを寞けたるかひもなし。近來わが家に交加する何がしが子の、いと稚くてよく舞ふものあり、豫ていひしらしたる事もあれば、今ははや參るべき比なり。」といふ。その言いまだ終らず、取次の武士、慌しく廊の方に來りて重忠に對ひ、「呼ばし給ひたる者共の參りて候に、召さるべうもや。」といふ。重忠聞きて、「そのもの呼び入れ給へ。」といそがせば、こゝろ得果てて走りさる。去る程に、竹川因幡介正忠は、その妻葎戸と共に、風流びたる打扮し、鈴稚丸には頭巾戴らし、項に山猫舞はす箱を懸けさして、廊よりねり出でつゝ、廣緣に居ならびて、夫婦は拍子をとり、聲をあはし、

女三の宮の翠簾をもり出でては、戀する人の媒やすらん。馬の命婦の膝の上にねぶりては、翁丸も遠く追はれけん。五つの德を備へては、千々の鼠の穴に躲るゝ、王氏がうらみ、濮陽が悲しみ、こゝに傳へて山猫の、山めぐりするを見給へ。

と唄へば、舞はす鈴稚の、手ぶり稚くいと興あり。丐兒はこれを佶と見て、「あな忌はしき傀儡師や。とく退出よ。」と焦燥てば、重忠莞然として正忠等に對ひ、「傳へ聞く、義仲朝臣はその性猫を諱み給ひしとぞ。かかれば、いま汝達の御曹司に憎まるゝも故なきにあらず。これを又重忠が心つきなきなれ

ば、怪しむべからず。とく〳〵退き候へ。」といふに、正忠夫婦はふかく望みを失ひ、「推辭み奉るにはあらねど、これなる小兒は久しく病みわづらひて、漸くにおこたり果てたれど、氣力いまだとゝのはず。しかるに鎌倉殿の壻君を慰め進らせんとて召さるゝ事、こよなき面目なれば、稚きを嫌しこしらへて參りつるに、舞はしも果てず退出よと、宣はするはいと本意なし。」と呟けば、丐兒これを聞きて呵々とうち笑ひ、「實にたま〳〵來つるものを、無下に歸さんは不便なり。物とらせんに近くまゐれ。」と呼びかけられ、望む所と正忠夫婦は、鈴稚丸を扶け引き、義高をにらまへつめ、臆したる氣色もなく、前み寄るを丐兒はなほほとり近く呼びよしつゝ、足を飛ばして鈴稚の胸さか丁と蹴たふせば、「あな。」と叫びて仰様に、撲地と倒るゝ幼子の、項に掛けたる箱の中より、閃き落つる兜の鍬形。丐兒が足は忽地に、痿れて暫し忙然たり。正忠夫婦は、鈴稚の倒るゝを見て、且怒り、且痛ましみ、連忙てつゝ扶け起し、葎戸これを抱きあぐれば、正忠は累なる恨みに堪へも忍ばず、丐兒に打ちて蒐らんとするを、重忠忙はしく押し止め、「こは無禮なり。」と叱り退くれば、正忠は齒を切り、腕を擦りてひらき居つ。そのとき重忠は、落ちたる兜の鍬形を把つて、丐兒のほとりにさし寄し、「御曹司見給はずや、是れなん御父義仲朝臣、討たれたまひしその日まで、插頭し給へる鍬形なるが、石田爲久に射落され、久しく深田に埋もれて泥の中にありけるを、近曾粟津の農夫等不憶く掘り出し、「こは疑ふべうもあらぬ木曾殿の像見なり。」とて、鑢て鎌倉へ進らせたるを、山猫の櫃に藏めて、密かにこれを試みたるは、人の疑念を解かんとて、重忠が寸志なり。さればこそ圖るに差はぬ御曹司、足をもてこの鍬形を蹴給へば、不孝を責めてその足痲れ、爭ひがたき矩度尊重、かく寥〳〵しく在すとも、かかる不思議を見つるから、今は假物ならんかと疑ふものもあるべからず。さはおぼさすや。」といふを、丐兒聞きもあへず大いに驚き、「そはわが父の像見なりとか、物體なし。」と信だちて取らんとする鍬形を、重忠はやく懐に挾め、「豈此の鍬形のみならんや、兜とともに鎌倉殿より、壻引出にこそ進らし給はめ。父子の親しきも禮節あり、衣服を更め拜見あれ。それ〳〵嫩子、はやく衣服を進らせよ。」といふに、嫩子立ちよりて、衣紋揃へて更へさする、襤褸の袖も忽地に、錦色ます下襲、薄紅梅の花の兄、弟枝はあらぬ木曾殿の、一子と見えて意氣揚々、衆皆ふたゝび怪しみけり。その時重忠は、正忠夫婦を見返りて、「幼きが思ひもかけず、からき目を見て懼れけん。されど御曹司に衣服を更へさし進らしたるは、汝達が績なり。祿賜はらんに、遠侍へ退り候へ、長居は畏かるべし。」と心ありげにしらすれば、正忠やうやく氣色をやはらげ、「貴人のほとり近く召されし事、願ふに稀なる僥倖なり。よしやうち懲らし給ふとも、幼きは罪ゆるし給ふべし。見參の本意とげて候へば、歡びありて恨みなし。」と、口にはいへどやる方なき、遺恨の涙見せじとて、葎戸に注目し、鈴稚を劬りて、夫婦杉戸を

引き開けて、墨畫の松に木がくれたり。さる程に重忠が、壻君を慰めかね、思ひくしたるおももちにて、嫩子にいへりけるは、「御曹司はとにかくに、樂しからず見え給ふに、興をそへんとして興をさます、山猫廻しが悞ちの高名、衣服は更へさし進らせたれど、椀飯もめされず。かかる事には得も馴れぬ、夫婦が徒らに心を盡さんより、大姫君の琴の調べに、年來の心操をしらし給はば、猛き御曹司の御こゝろも、いかでか和ぎ給はざらん。『婚姻の席に臨み給ふまで、對面は許されずとも、翠簾を隔て玉琴を擽捋らし給はずや。』と、まうしすゝめ候へよ。われ又用意の俳優あり、とく〳〵。」といそがせば、嫩子聞きて訝しみ、夫のこゝろ得がたけれど、問はまほしさも問ひかねて、軈て奥へぞまゐりける。且しありて、垂れこめたる几帳の内にけはひしつ、はや擽捋らす琴の音に、重忠はつと身を起し、端近う立ち出でて、「ものどもおそし。」と呼びかけつゝ、舊の所にかへり居れば、庭の樹陰に人ありて、「うけたまはりぬ。」と回答へけり。さる程に猫間光實は、榛澤六郎とともに、鐵の鎖もて唐絲をいたく縛め、諸折戸の方より引き立て來て、紅梅ふかき高緣の、あなたへ撲地とおし居ゑたり。この肸響に驚かされ、爪音に心をすませし丐兒は、閉ぢたる眼を開けば、無慙なり唐絲は、土の牢より引き出され、去年見しまゝの日の影も、我より暮るゝ黑髮の、亂れて顏へふりかゝる、眼おちいり頰骨出で、手足はさながら麻殺の、あさましきまで瘦せ饒ひ、命つれなき囚徒の、けふを限りと思ふに

ぞ、わろびれもせずついゐたるを、大姫はるかに闚窺みたまひて、「あな痛ましし。唐絲が身より出せる鏽なれば、鏃も今に解けやらず、見しには變る面影の、いとおどろ〳〵し。」とて、調べも亂れうち曇る、唱歌を聞きて唐絲は、耳なれたりと頭を傾け、「此の爪音は、わが手づから敎へ參らしたる彼の姫ならん。心にくし。」と打仰ぎ、丐兒と面をあはしつゝ、「こは若君か。」と許りに迭に驚き驚かれ、よらまくすれど縛めの、鏃に引かれて挫と坐す。重忠はこれを見て、「恩義もおのが身の鉗や。」と口順みて丐兒に對ひ、「御曹司は彼の老女を、よく認りてぞ坐するならん。彼は木曾殿の御内にて、四天王と呼ばれたる兼平が妹、光盛が妻なりとぞ。然るに彼のもの石田爲久を誑りて、營中に給事し、鎌倉殿を擊ち奉らんと謀りたるが、忽地に事發覺れて、去年の秋より、釋迦堂谷なる土の牢に籠めおかる。もし反逆の犯人ならずば、今宵婚姻の祝儀に申し宥めて、命ばかりは助け得さすべきに、和親とゝのひては、御曹司もまた舅君の爲に、這奴を責め伏せて、謀反の淵源を問ひ極め、うしろやすくし給はずは、何をもてか播揚の好みを結び給へりと申さん。然ればいよゝ放し難き癖者なり。こゝをもて、重忠豫て家隸等に命じ、這奴を眼前に引きするゑたり。光實、榛澤は琴の一曲をはるまで、唐絲を拷問せよ。」と、言語猛にあらたまる。主の指揮に光實は、怨みも春の庭もせに、咲き匂ふ梅も時を得顏なる、枝へし折りてさし翳す、舞樂にあらぬ呵責の笞。榛澤も立ちならび、枝ふりあげて丁と打てば、

花紅にちりかゝる、軒の松風吹きかよふ、琴の調べも玉の緒も、絶えよとて右左より、又丁々と打つ程に、苦痛さこそと思ひやり、丐兒が唱ふる呪文とともに、光實も榛澤も、引き留めらるゝやうにおぼえて、ふり揚げたるまゝ腕動かず。こは怪しやと面をあはし、われにもあらで持つたる枝を、雙方一度にとり落せば、唐絲しづかに見かへりて、「殿たちなどて打ち給はぬ。壻君の款待にうたずや、撃て。」と身を寄すれど、幻術に遮り留められ、光實はさらなり、榛澤もいと口をしと焦燥ちつ、遂にせん術なかりけり。丐兒これをみてうち笑ひ、「いひがひなきものどもかな。いで義高が首伏さするをみよや。」とて、臂ちかなる刀を拿つて前みよる。後方に聞ゆる漏刻の、數かぞふれば暮六ツなり。七ツをまして十あまり、三すぢの絲も音を絶ゆれど、丐兒はなほ刀を拔きかけて、緣頰に歩みよるを、重忠急に押しとゞめ、「こは佻々しく見え給ふ。はや婚姻の時刻になりぬ。鎌倉殿へ心やりに、自親手を下さんとし給ふは、よしあるに似たれど、鷄を擊くに牛の刀を用ゐるべからず。努思ひ止まり給へかし。」とこれを諫め、さて光實、榛澤にいふやう、「汝等は唐絲を老樹の梅の幹に繫ぎ、すべり出でて休足せよ。とくゆきね。」といふに、光實は仇に氣色を曉得られじと、勇む意の駒をさへ、繫ぎ留むる樹の下に、唐絲を殘しおき、榛澤六郎もろともに、外面へ退出せしかば、重忠は緣由を、鎌倉殿へ申さんとて、やをら蒸襖の内に入りぬ。

第十八套

假を弄して大姫初めて眞を認る
明を失して義高さらに空に歸す

扨も美妙水冠者義高は、頼朝卿を狙ひ撃たんために、諸越が原に到りて、丐兒の隊に入り、かくては重忠もわれをしらじと思ひたるに、はからずも榛澤六郎に誘引はれて、鎌倉に立ち歸り、唐絲に環會ひて、こゝろの中密かに歡び、やゝ傍に人なきをみて、ふたゝび呪文を唱ふれば、奇なるかな、夥の鼠忽然とあらはれ出で、唐絲を縛めたる、鐵の鎖を嚙み斷りしかば、唐絲は久しく居縮みたる手足さへ舊のごとくなりつ。こは怪しやと思へども、わが身をかへりみる遑なくて、忙はしく緣頰に這ひ登り、言葉はなくてまづ不覺に目を押し拭ひ、しばらくしていふやう、「頼朝が命運高ければ、計策りながら打ちもらし、いひがひなくも生拘られて、土の牢に押し籠められ、とても沾くべくは思はねど、御曹司の事のみ、とにかく心にかゝりつるに、今宵恙なき御顏を拜し奉る歡ばしさを察し給へ。君今鎌倉に歸り入らせ給ふ事、何とも思ひわきまへ難し。その故をしらし給へかし。」と密やかにいふも、なほ人や聞かんとて、義高は首をめぐらし、彼此をみかへりつゝいふやう、「曩に汝に別れし後、千苦萬苦を厭はず、一味の兵士を招き集めんとするに、勢ひ微にして事ならず。あるときは粟

津が原に旅寐して、猫間の族に怪しめられ、又あるときは鎌倉を徘徊して、重忠に認らるゝといへども、頼豪阿闍梨の神靈に妖鼠の術を授けられ、出沒自在なれば、彼等が爲に謀られず。爲久等をば去年の秋、箱根山にて首を刎ね、近曾丐兒となりて、頼朝が潛行きせんときに、狙ひ擊たんと計較みたるに、重忠昨夕、その家隷に命じて、われを營中に誘引ひし、却つてしらずがほなるも、そのこゝろに物ありとおぼし。遮莫、頼朝が首を擊たんこと今宵にあり。歡び候へ。」と密語く折しも、瑳然として人の來る音するにぞ、義高は目をもてこれをしらすれば、唐絲はうち點頭き、杉戸の影へ躱れけり。浩かる所に女房たち五七人、手に〳〵燭を乘り、或は銚子、土器を捧げもちて前にたち、嫩子は大姫の手を引きて、おの〳〵義高のほとり近くまゐりつ。さて嫩子がまうすやう、「産靈は今もおはして、姫君今宵御曹司にまみえ給ふといへども、未だ晴れなるおんはからひには侍らず。おん命の程もおぼつかなきまでに、いといたうおもひほそり給ふが痛ましければ、竊びやかに婦夫の杯をとり結ばし進らせ、かさねて在鎌倉の武士に令れしらし給はんとなり。よりて嫩子仰せをうけて、姫君を誘引ひ奉りぬ。」と述べしかば、女房たちおの〳〵、「千秋萬歳。」と唱へて、土器を勸め、三三九獻の式も果てたり。大姫は名のみにて、今宵初めて良人の貌を、見もし見らるゝ恥かはしさに、いふべき事はなか〳〵に、眉の間に月出でて、夜を爭ふかと疑はれ、頰の上に花開きて、春を含むに似たりけり。蟬の羽のごとき鬢の、黑くて匂やかなるに、錦の袿、綾の帶、留奇南の薫衣をもりて、沉魚落鴈の容止、羞花閉月の粧飾、かかる美人はいと稀なるべく見ゆるに、義高また將帥の氣象あらはれて、面色白く、髭鬚青く、眼秀でて身丈高し。寔にこれ花の山に月を嚐め、金の盤に玉を盛るが如く、劣らず勝らず坐するとて、みな愛敬づきて、興ずるも風情あり。春の夜なれば短くて、寐よとの鐘聞ゆる程に、嫩子は耳を側てつゝ、莞やかにうち笑み、「あな心なし。いつまでかかくてあらん、誘女房たち、臥戸の用意し侍りなん。姫君はなほ暫し坐して、年來の心盡しを語り慰め給ひね。」と信だちて、みなもろともに奥へ退りぬ。大姫は姨捨山に、照る月を見るこゝちしつ、さし對ひてはうひ〳〵しくて、いひ慰むるよすがもなく、面ぼてりして打掩ふ、長き袂も綾錦、たたまくをしき風情にて、やうやくに膝を進め、「君はあへなくも武藏なる、入間川とやらんにて、擊たれ給ひぬと聞えしかば、その悲しみの數まして、存命ふべくも思はねど、おん容止をも認り侍らず。被ぎも果てぬ涙の磯に、弘誓の船を待ちながら、なからん後も冥土にて、何をたつきに名告りあはん。と思へば、いとゞ形なき身を、うち歎くにもあまりあり。然るにけふしも不意く、ふたゝび締ぶ婦夫の緣は、神と親との惠みにてありけるものを、四年が程恨み奉りぬるこそ恐けれ。昔の懶さ今の歡しさ、思ひやり給ひなば、玉椿の八千代までもと、言の葉ずゑに露ばかりも、聞えしらし給へかし。」とかき口說けばうち點頭き、

「寔に御身が心操を、いかでか仇に思ふべき。その誠心に愛でて、憑み聞ゆる密事あり。承引き給はんや。」と問へば、大姫は聞きもあへず、「こは問ひ給ふまでも侍らず。百年の苦樂をともにする、君のためには火にも入り、水に沒るとも、八百萬の神をかけて、仰せに戻り侍らじ。」と聞き果てて莞然とし、「さは誓ひ給ふから僞りはあらじ。案内して擊たし給へ。」「とは又誰を。」「おん身が父頼朝を、今宵臥戸へ案内して擊たしたまへ。」と密語くにぞ、胸うち騷ぐ當惑に、そは何ゆゑとも問ひかねて、さし俯きて坐せしかば、義高いよゝ聲を低うし、「驚き給ふは理なり。緣由は委細に告げずとも、御身が父は、わが爲に父の仇なる事は、よく知りてぞおはすらめ。亦曩に頼朝の需めに應じて、鎌倉に來り、次の年の五月、入間川のほとりにて討たれたるは、眞の義高ならず、唐絲が孩兒に大太郎と呼べるもの、我に代りて命を殞せり。綽長やかなれば、今全く聞えしらするに及ばず。義高年來、灰を呑み、身に漆するの志を移さず、只顧頼朝を狙ひ擊たんとはかれども、彼人るときは城郭あり、出づるときは從兵多し。孤獨の身にしては、そのほとりへも近づき難く、徒らに年月を過ぐしたり。しかるに御身に哀慕せられ、こゝに來りて、優曇花の新郎と呼ばるゝ事、方に是れ時あり命あり。父の讎には共に天を戴かず。況いて彼とひとつにをりて、この夜を他に過ぐさんや。こゝろ夫にあるならば、案内してわが宿志をはたさし給へ。」とうちあけて、いはるゝ程なほ淺ましく、はふり落つる涙を拭ひ、「仰せはさることなるべけれど、子として父を擊たしては、こゝろ獸に劣り侍り。この事のみは許し給へ。」といはせも果てず眼を瞪らし、「しからば只今誓ひ給ひし言の葉は、何とか聞かん、かくいひがひなき心ざまならんとはしらず、大事を聞えしらしたる悔しさよ、夫婦の緣は是れまでなり。とくゆきて父に告げよ。」といひかけて、つと身を起す良人の裾を、引きとゞめつゝ目を拭ひ、「親子の恩義重ければ、一トたびは推辭み侍りしが、婦の上には天に誓へし、夫に思ひかふるものなし。今宵案内し侍らんが、わが身を輔くるものなくば、いと危かりなん。」といはせも果てず杉戸の陰より、「その事は心安かれ、わらは附き副ひ侍るべし。」と應へするに、大姫はうち驚きつゝ、そは誰もやと見かへり給ふに、思ひがけなき、これ唐絲なりしかば、「あな何の程より其處にはありし、假そめならぬ縛めの、輒く解けたるも訝し。」と宣ふ間に唐絲は、そのほとりに參りつ。「鐵の鎖だに輒く解かし給ひぬる、御曹司の奇術もて、鎌倉殿を擊ち給はんに、誰か當るものの侍るべき。然るを姫君、綽を兩端になして脫れんとしたまふとも、唐絲かくて侍るから、案内はよくしつたり。いざ給へ。」といそがすにぞ、大姫は遂に脫るゝに言葉なく、漸くに立ち給へば、義高欣然として唐絲にいふやう、「汝その形容にて竊び入らば、直寐の武士に怪しめらるゝ事もあらん。人目の關を踰えんには、姫が袿衣にしくものなし。大姫それ脫ぎてとらし給へ。とく〳〵。」といそがされ、涙まだ乾ぬ袖かいとりて、唐絲に被

せ給へは、義高呪文を唱へつゝ、燈燭一度に弗と打ち滅し、主從三人密語きあひ、身をかすまして潛びゆく。その夜も既に更闌けて、櫓、廊、室、助鋪、間毎々々の寂として、宿直の近臣熟睡せり。大姫遙かに指さして、「彼處なる几帳の内こそ、わが父の臥房なれ。」と潛めきて告げ給へば、義高聞きて莞爾とし、「然らば唐絲は、大姫と共に臥房の後方にたち廻り、もし脱れ出づる事もあらば、擊ちとめよ。」と密語けば、唐絲は、「こゝろ得侍り。」と應へつゝ、姫を誘引ひ雄手なる、廊をうち繞り、房の彼方へ潛び入る。大姫は今さらに、是れをかぎりと見かへり給へど、睛さへ胸さへうち曇り、涙にしかと見えわかぬ、鐵行燈の下に立ち、良人のうへもわがうへも、風の前なる燈花なり。孰れか先へ滅えなんと、こゝろ一ッにおきかねて、進まぬ足をやう〳〵に、裳結り蒸襖を、そと引き開けて入り給へば、義高しばし目送りて、「今は心安し。」と亡語ち、やをら走り前みて、几帳の内へ打ち入らんとする折から、朦朧として立在むものあり。義高是れに猶豫して、熟視れば行氏夫婦なり。そのとき行氏は、棧橋と共に、義高の左右に蹲踞し、「御曹司いまだ曉得り給はずや。鎌倉殿の時運高大にして、宿志を遂げ給ひがたし。たゞ速かに志を轉して、先君のおん菩提を弔ひ給へかし。」と諫むれば、義高勃然として大いに怒り、「汝等生ける日は、我と志を同じくし、わが會稽の怨みを雪むるを、草の原より見つべしと、誓ひつるには似げなく、しば〳〵敵の時運を稱して、諫むるはいかにぞや。われ今仇を報いん事瞬きの中にあり。其處退かずや。」と焦燥てば、行氏重ねて申すやう、「君が言過て り。纓には平家なほ西海にあり、宇内擾亂の時にして、仇を擊つによろし。今や四海靖治に及んで、人の心鎌倉に歸降す。彼は德を布きて民を安附し、君は邪法をもて人を眩惑す。彼には智勇の士卒多く、君は一臂の援けなし。加之、大姫君に逼つて、本意を遂げんとし給ふは、いともこゝろ得ね。父の仇を擊つものは、孝なりや將不孝なりや。もし果して孝ならば、その事道理に稱はず。大姫君今夜復讎の案内し給ふときは、君その妻を虐げて、父を殺すの大罪を犯さし給ふならずや。かくては神も衞り給はず、佛も愍みたまはず。神明佛陀にみはなされても、本意を遂げ給ふよしありや」と憚るところもなく、理を述ぶるに、義高頭をうち揮つて、「謂れなき諫言かな。爲義保元に敗走して、義朝は父を殺すの罪あり。安德帝西海に沒み給ひて、賴朝また君を弑するの罪あり。今順をもて逆を討つ、何の妨げあるべき。」と敦圍きて裾蹈み反し行かんとするを、行氏、棧橋は、猶緣はりて引き留むれば、「こは嗚呼なり。」と焦噪ちつゝ、刀を拔いて切り拂ふに形は消えてなかりけり。義高は、「さもこそ。」と冷笑ひ、拔きたる刀を掌り直して、几帳の邊に走り寄り、「起きよ起きよ賴朝。父の仇を報いん爲に、義高來つて枕方にあり。起きよ〳〵。」と呼び覺し、几帳をさらりと切り落せば、内には臥したる人もなく、薫籠に掛けし麻衣に、一首の歌を書きたりける。義高はこの影迹に、忽地望みを失ひ、原來敵

にも防禦の術あり。やうこそあらめと立ちよりて、彼の麻衣の歌をみれば、

夏來れば伏屋が下にやすらひて清水の里にすみつきぬべし

と讀みもをはらず、大いに驚き、「われ重忠に謀られて、漫に深入りしつるかな。遮莫、何程の事かあらん。もの〳〵しや。」と罵りて、薫籠の眞中礙と砍れば、顯はれ出づる金の猫、赫奕と光を發ち、餘光散徹して、義高を射るとみえし、奇なるかな義高は、さながら酒に醉ひたる如く、踉々として尻居に坐し、一道の白氣その懐よりたち冲り、忽地夥多の鼠と化し、西を指して飛び去りぬ。されば義高は、妖鼠の術破れて未だ覺めず。時に宿寢の武士十人餘り、ばら〳〵と押取り卷き、「や。」と聲かけて組まんとせしかば、義高是れに驚き覺め、太刀閃かして丁と砍れば、間ちかかりし兵士兩三人、首遙かに轉び墮ち、軀倒れて血に塗る。殘る兵士等はこれにも怕れず、屍を跳りこえて打ちてかゝるを、義高は縱横に飛び繞り、前後に當り、或は眞甲を砍り割り、或は腕をうち落し、猛勢然として、その勇敢に當る者なく、血は流れて潺々と、屍は横たはりて累々たり。さる程に義高は、拄ふる兵士を鏖しにして、なほ奥ふかく前み入れば、西面なる綟障子の内に、人のけはひするあり。是れなん賴朝なるべしとて、しばしも擬議せず、血刀引提げて走り蒐れば、忽地内に聲高く、

昔見し野中の清水かはらねどわが影をもや思ひ出づらむ

とうち吟じ、障子をさと開くもの、亦これ斥す仇にはあらで、ひとりの行僧、梭への行囊を背負ひ、手に一條の杖を突き立て、欣然として立在みたるが、義高をさし招き、「御曹司われを忘れ給へりや。前に近江なる粟津が原に庵を締び、しばし住みけるころ、御身猫間光實ぬしと、猫鼠を論じたる夜、端なく面をあはしたる、憲清入道西行なり。貧僧奥州よりのかへさ、はからずもこゝに來りて、ふたたび見ゆる事を得たり。御身復讎の志はさることながら、木曾殿朝敵となりて討たれ給へば、仇を報ふによしなし。ゆめ〳〵思ひ留まり給ひね。」といはせも果てず、「慈悲忍辱を旨とする出家人は、勇士の志を知るべきにあらず。汝成敗に就きて、是非を論ずる、その心ざま俗子に劣れり。いでその頸切り放ちて、息の根止めん。」と、詈りつゝ、刃をうち振りて砍らんとすれば、「光實、正忠これにあり。」と名告りかけて、左右より走り出で、西行を推し隔つれば、葺戸も一刀を腰にして鈴稚丸をかき抱き、夫の後方に引きそうたり。そのとき光實は、刀の鞆を握りもちて、義高にたち對ひ、「汝往に粟津野にて、妖術をもて形を隱し、その後、由井濱にてわが刀尖を脱るゝと雖も、家臣竹川正忠が孩兒、千江松が忠死によつて、家の重寶たる金の猫の睛に、千江松が鮮血を塗り、こゝに軋く妖鼠の術を破りぬ。抑〻わが兄光隆は、義仲が爲に罪を得て憤りに世を逝り、家命遂に凋落せり。義仲既に誅伏すといへども、わが怨みなほ竭きず、汝を擊つて復讎の志をはたさんとす。恨みの刃うけよ。」

と呼ばはり、刀を閃りと引き拔けば、義高叫々と冷笑ひ、「こはもの〳〵しき光實が廣言。いぬる年、由井濱にて反擊ちにすべかりしに、その志の切なるに放しおきつ。敵手は嫌はず、とく來れ。」と太刀さし插頭して立つたりける。憎さも憎しと光實主從、扨みて擊たんとす。浩かる處に、東面なる正廳の内より、「雙方ともに健り給ふな。鎌倉殿の御座近し、重忠仰せを受けて申すべきことあり。」と呼びかけつゝ、翠簾さら〳〵と卷き上ぐれば、夥の燈燭晃きわたりて白晝の如く、上座には前右大將賴朝卿、裝束して立ち給へば、政子、嫩子、左右に侍り、重忠その傍にあり。光實主從は、この光景に怒りを壓へ、少し引き退きて、緣由を問はんとするに、義高は、すは賴朝ごさんなれと、會釋もせず跳り蒐るを、重忠はやく身を起して遮り留め、「御曹司既に石田を討ちて、復讎の本意遂げ給へるに、今又鎌倉殿を討たんと謀り給ふこと、更に道理に稱はず。又光實ぬしは、木曾殿滅亡の後、その子なりとも討ちて、怨みを雪めんとし給ふ事、大いなる惑ひなり。これ併しながら、無名の鬪戰、私の宿意によつて、父母の遺體を傷ふべき事かは。しかりと雖も、無下に志を折きがたし。こゝをもて義高ぬしには、鎌倉殿の狩衣を進らせ、光實ぬしには木曾殿の兜を進らせ、是彼豫讓が故事に倣ひて、夙志をはたさし給ふにこそ。みなこれ幕府の寛仁大度、勇士を惜しみ給ふにあんなれ。おのおのこれを刺して、心やりともし給へかし。」と述べ終り、携へたる狩衣を義高のほとりにさしおき、兜を光實に遞與しけり。義高これをみて怒れる聲をふり立て、「卑怯なり賴朝。みづから撫恤に倣つて脫れんとするとも、われ決して放さず。この狩衣何かはせん。」と罵りもあへず、投げ返すとて引きあぐれば、裏より轉び出づるもの、これ大姫の首なり。光實もこの爲體にこゝろ怪しみ、伏したる兜をとり起せば、又これ裏に唐絲が首級あり。是に至りて光實はさらなり、義高も心ありげなる贈りものに、默然として、猛勢始めには似ず。重忠莞爾として、件の二人に對ひ、「大姫君は孝と貞とに身をおきかね、自害して失せ給ひしかば、唐絲も事の成らざるを見て、自ら刃に伏したり。さるによつて、大姫君のおん首級は義高ぬしに進らし、唐絲が首は光實ぬしへ贈り、その子をもて父に代らし、その臣をもて君に換ふ。かかれば彼の豫讓が空衣を刺したるに勝れり。今は迭に復讎の志を絕ち給へかし。」と說き諭すにぞ、賴朝卿宣ふやう、「われ往に範賴、義經をもて、義仲を討たしたるは、敕諚によつて、都下の悤劇を鎭めんとするにあり。豈その己に勝れるを諱みて、親族を殺すべき。然るに義仲は、却つて賴朝を疑ひ、唐絲が子大太郎とやらんを、『義高なり。』と僞り爲へ、鎌倉へ來せし事、われ之を猜したり。是をもて石田爲久が請ひに任し、義高を擊たしたるは、眞の義高ならざればなり。義高頻りに賴朝を仇として擊たんとすれども、我は是れ禁廷の御衞り、天子の武將なり。いかで私の怨みに當らん。又光實の愁訴寔によしあり。今度義高が妖鼠の術を破りたる功をもて奏問し、鈴稚

丸に猫間の家を繼がし、官祿舊のごとく安堵せらるべし。鈴稚成長までは、光實これが後見を致し、正忠夫婦、いよゝ忠節を勵むべし。」といと信やかに宣ふにぞ、政子御前は忍ぶにあまる涙を袖に裏みかね、「大姫が命を隕して命乞ひせし心操を憐み給はば、義高早く志を轉して、一家の親しみを竭し給へ。光實も又唐絲が忠死に愛でて、怨みを散らし給へかし。」といひかけて、又泣き沉み給へば、嫩子も目を瞬き、「大姫君をはりに臨みて、『只恥かはしきは、四年が程、實の良人をしらずして戀ひ慕ひぬるは、唐絲が子に大太郎といふものなりと、今將聞きては、年來の節操も仇になりけるよ。』と宣はせし御こゝろさへ、推測られて痛まし。」とかき口説けば、西行も又言葉をつくして、是彼を諫めけり。義高は、つく〴〵とうち聞きて嘆息し、「我が心石にあらず、絶えて轉ばすべからずと雖も、仁義に敵する刃はなし。光實の意如何にぞや。」と問ふに、光實も又嗟嘆し、「げにいはるゝところ理あり。いざもろともに。」と應へつゝ、刀を拔いて兜の鍪を、ばらりずんと切りはなち、鉢を刀尖につらぬきて高くさしあげ、「敵の首をかくぞ得し、今は恨みも散れたり。」とて、正忠夫婦を見かへれば、正忠、葦戸聲をあはして、三たび凱歌を揭げたりける。その時義高も、刀をもて狩衣を數巳刺し徹し、刀尖をとり直して、兩つの目子をくり出し、流るゝ血を狩衣にて押し拭ひつゝ、聲を勵ましていふやう、「始めありて終りなきは、大丈夫にあらず。わが眼あればこそ頼朝を見るなれ。耳目は煩惱の奴、今脫離して象教に歸す。われ入間川の上にありしころ、唐絲が子大太郎と呼ばれ、假目暗となりたるをおもへば、緒のこゝにおよぶ、前象にてありけんかし。されば今より、無絃法師と名を更め、唐絲に習ひ得たる琵琶、和琴を寐覺の友とし、琵琶湖の上に住み果つべし。棄恩入無爲報恩者、行氏夫婦が死後の諫めも、こゝに迷ひの門をひらく、善知識にてありけるなり。南無阿彌陀佛。」と唱ふれば、西行法師進み對ひて、「義高ぬしの發心に、導師といはんも嗚呼なれど、大姫はいふもさらなり。唐絲行氏夫婦が爲に、ながく廻向し進らすべし。」とて、掛けたる袈裟を脫ぎて、二ツの首級を裹み、終に義高を扶け引きて、近江なる粟津原に赴き、義仲の墳のほとりに兩つの首を埋葬し、舊住みける草庵を義高入道に與へしかば、義高はこゝに行ひすまして、絶えて交はらず。光實は鈴稚丸と共に、正忠夫婦を將て、洛に歸りのぼりしが、頼朝卿緣由を奏聞ありければ、すなはち敕免あつて、鈴稚丸を猫間の家督と定められ、光實は無位より四位の少將に昇進して、その家永く繁昌せり。かくて頼朝卿は、頼豪阿闍梨の靈を伊豆國下田の近鄕、中の瀨村といふ處に祝ひ祀り、一社の禾倉を建てて、子聖權現と稱へ、北條時政に仰せて、春秋の祭禮怠ることなく、執行ひ給ひければ、彼の惡靈遂に祟りをなさず。却つて源家の守護神とならんとて、祝が夢に見えたりとぞ。今現に豆州中ノ瀨の鎭守たる、子聖の神これなり。この神餅を忌み嫌ひ給ふとて、中ノ瀨一鄕は、年のをはりに餅を搗かず、元日に

は燒飯に青菘をとりあはし、羹として雜煮に代ふ、いまだその緣由をしらず。

評に云く、世に傳ふ、惡七兵衞景淸、賴朝卿を狙ひ擊たんとするに事成らず。賴朝卿その精忠を憐み、これに狩衣を賜はりて、晉の豫讓が故事に擬す。景淸空衣を刺し、目子をくり出し、日向國に退きて住みぬ。世にこゝを日向勾當と號する由いへり。然れども、その事何れの書にも見えず。

按ずるに、東鑑に、建久三年正月二十一日、平家の侍上總五郎兵衞忠光、魚鱗を眼上に覆ひ左の眼盲ひたるごとくにして、前幕府賴朝を狙ひ擊たんとす。事あらはれて、これを六連の海邊に梟首すといふ事見えたり。景淸が事は、これに因つて作り設けたる根なし言なり。義高の事も、亦これに準へて見るべからん。

亦いふ、この書、すべて雜劇の趣を寫して、方に遊戲三昧の筆力を振へり。設しその有無を問ひ、不經を笑ふ人は、史傳を讀むに過ぎず。何ぞ小說とするに足らんや。

賴豪阿闍梨怪鼠傳卷之八後編下冊　大尾

賴豪阿闍梨怪鼠傳增補引用羣書要語

〔猫五德〕（揮塵新譚）萬壽寺ニ有ニ彬師ト稱フ者一。善謔ス。嘗テ對レ客ニ。猫踞ニ其旁一ニ。彬謂テ客ニ曰ク。人言フ雞ニ有ルコトヲ五德一。今吾ガ此ノ猫モ亦有レ之。客問フ其說ヲ一。曰ク。見テ鼠ヲ不レハ捕ラ仁也。鼠奪ヒテ其食ヲ而讓レハ之義也。客至テ設ルトキ饌ヲ則出ルハ禮也。藏スコト物ヲ雖レ密ナリト。能ク竊ミテ食フハ之ヲ智也。每ニ冬月一入レハ竈ニ信也ト。客聞テ之ヲ。爲レ之絕倒ス。明麻城王兆雲元禎筆記

〔女三宮猫〕（源氏物語若菜上）御几帳どもしどけなくひきやりつる、人けぢかくよつきてぞ見ゆる。からねこのいとちひさく、をかしげなるを、少しおほきなるねこ、おひつゞきて、にはかにみすのつまよりはしりいづるに、人々おびえ騷ぎて、そよ〳〵と見じろぎさまよふけはひども、きぬのおとなひみゝかしがましき心ちす。ねこはまたよく人にもなつかぬにや、つないとながくつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、にげむとひこじろふほどに、みすのそばいとあらはにひきあげられたるを、とみにひきなほす人もなし。右衞門督が宮をけさうし奉る段なり　又（若菜下）うちの御ねこのあまたひきつれたりける。はらからどもの所々にあかれて、此の宮にもまゐれるが、いとをかしげにて、ありくを見るに、まづ思ひ出でらるれば、六條院のひめ宮の御かたに侍るねこぞ、いと見えぬやうなるかほしてをかしうはべりしが、はつかになむ見たまひし、とけいし給

へば、ねこわざとらうたくせさせ給ふ御こゝろにて、くはしくとはせ給ふ。からねこのこゝのにたがへるさましてなむ侍りし。云々○又女宮の御もとにもまうで給はで、大殿へぞ忍びておはしぬる。うちふしたれどめもあはず、見つる夢のさだかにあはむ事も難きをさへ思ふに、かのねこのありしさま、いとこひしと思ひいでらる。

〔猫牝牡〕（本草綱目）時珍曰ク。俗傳ニ牝猫無レ牡。但以ニ竹帚ヲ擊ツ斗ヲ。祝ニ竈神ニ而求レバ之。亦孕ス。此レ與下以ニ鷄子ヲ一祝レ竈ヲ。而抱ク鷄ヲ者上相同ジ。俱ニ理之不レ可レ推ス者也。

〔猫肉〕（時珍曰）易簡方ニ云ク。凡ソ預メ防ニ蟲毒ニ自少ク食フトキハ猫肉ヲ則蠱不レ能ハ害スルコト。此レ亦隋書ニ所レ謂猫鬼野道之蠱乎。肘后治ニ鼠瘻核腫ヲ。或ハ已ニ潰テ出ニ膿血ヲ者。取リ猫ノ肉ヲ如ク常ノ作リ羹ニ。空心食フト之云フ。不傳之法也。

〔咆哮〕（五雜俎）咆ハ哮ハ。猫互ニ相戰フ之聲ナリ。

〔銀猫〕（東鑑）文治二年八月十六日午ノ刻。西行上人退リ出ヅ。頻ニ雖ニ抑留セラル、ト敢テ不レ拘ラ之ニ。二品頼朝以ニ銀ノ作リ猫ヲ一被レ充テ贈リ物ニ。上人乍レ拜ニ傾シ之ヲ。於ニ門外ニ與ニ放遊ノ嬰兒ニ。是請テ重源上人ノ約諾。東大寺ノ料ニ爲レ勸ニ進セシガ沙金ヲ一赴ニ奥州ニ。以テ此ノ便路ヲ巡ニ禮ス鶴岳ヲ。云々　陸奥ノ守秀衡入道者。上人ノ一族也。

〔山猫〕（徒然草）奥山に猫またといふものありて、人をくらふなると人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人とることはあなる物を、といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊にありけるが、聞きて、ひとりありかむ身は、心すべきことにこそ、と思ひける頃しも。云々。

〔倉廚鼠〕（史記李斯傳）太倉之鼠ハ。飽レ食ニ而不レ驚カ。廚下之鼠ハ。穢ニ食シテ而畏レル人ヲ。

〔社鼠〕（爾雅翼）管子曰ク。社ニ束レテ木ヲ而塗ルレ之ヲ。鼠因テ往テ託ス焉。燻スルトキハ之ヲ恐レル敗ラシコトヲ其木ヲ。灌ガバ之ヲ恐レル敗ラシコトヲ其塗ヲ。此ノ鼠所ニ以ノ不レ可ニ得テ殺ス者ハ以テ恐レバ社ヲ也。

〔鼬鼪〕（前漢書東方朔傳）譬バ猶ニ鼬鼪之襲フガ狗ヲ〔今按〕本草綱目ニ。時珍曰ク。鼬鼪ハ音劬青。似テ鼠ニ而小。卽チ今ノ地鼠也。○又爾雅說文ニ。有ニ鼸。鼪。鼱。鼩。鼷。鼫。鼨。鼠八鼠ニ。皆無シ考證。

〔鼷鼠〕（三輔決錄）漢ノ光武。得テ寶攸ヲ。曰フ鼷鼠ト〔今按〕鼷鼠ハ小鼠也。我俗呼テ爲ス波通可禰須微ト者ハ是ナリ。

〔鼠量〕（書言故事）飲ニ酒辭スルヲ量窄ニヲ稱ス鼠量ト。

〔鼠牙〕（詩行露）誰カ謂フ鼠無シ牙。何ヲ以テカ穿ツ我ガ墉ヲ。又（相鼠篇）相レバ鼠ヲ有レ齒。人トシテ而無シ止。不レ死セ何ヲカ俟ン。人トシテ而無シ止。

〔鼠腹〕（莊子逍遙篇）鷦鷯巢於深林に。不レ過ぎ一枝に。偃鼠飲レ河に。不レ過ぎ滿腹に。

〔鼠膽〕（酉陽雜俎）鼠膽ハ在リレ肝ニ。活ナガラ取レバ則チ有リ。

〔聚鼠〕（五雜俎）安息香能ク聚ム鼠ヲ。其煙白色ニシテ如レ縷ノ。直ニ上テ不レ散ラ。又狼糞ノ煙モ。亦直ニ上ル。故烽ノ燧ニ用ヰル之ヲ。

〔投鼠〕（賈誼策）諺ニ曰。欲スルニ投ゼントレ鼠ニ而忌レム器ヲ。鼠近ケレバ於器ニ尚憚テ不レ投ゼ。恐ルレバナリ傷ンコトヲ其器ニ。況ヤ貴臣之近キヲヤ主ニ乎。

〔鼯鼠〕（荀子）鼯鼠五技ニシテ而窮ス。舊註技ハ才能也。五技ハ謂フ能ク飛ベドモ不レ能ハ上ルコトレ屋ニ。能ク緣レドモ不レ能ハ窮ルコトレ樹ヲ。能ク遊ベドモ不レ能ハ渡ルコトレ谷ヲ。能ク穴ホレドモ不レ能ハ掩フコトレ身ヲ。能ク走レドモ不レ能ハ先ダツコト人ニ。

〔鼠祠〕（太平記）白川ノ御宇ニ、江ノ帥匡房ノ兄ニ、三井寺ノ賴豪僧都トテ、貴キ人有リケルヲ被レ召、皇子御誕生ノ御禱リヲゾ被ニ仰付一。賴豪敕ヲ奉ツテ、肝膽ヲ碎キテ祈請シケルニ、承保元年十二月十六日皇子御誕生有リテケリ。帝叡感ノ餘リニ、御祈リノ勸賞宜ク依レ請ト被ニ宣下一。賴豪年來ノ所望ナリケレバ、他ノ官祿一向ニ是レヲ閣キテ、園城寺ノ三摩耶戒壇造立ノ敕許ヲゾ申シ賜ハリケルニ、山門又是レヲ聽キテ、款狀ヲ捧ゲテ禁庭ヘ訴ヘ、先例ヲ引イテ、停廢セラレント奏シケレバ、無ク力三摩耶戒壇造立ノ敕裁ヲ被ニ召返一ケル。賴豪是レヲ怒ツテ、百日ノ間髮ヲモ不レ剃ラ、爪ヲモ不レ切、爐壇ノ煙ニフスボリ、嗔恚ノ炎ニ骨ヲ焦シテ、我レ願ハクハ、卽身ニ大魔緣ト成ツテ、玉體ヲ惱マシ奉リ、山門ノ佛法ヲ滅サント云フ惡念ヲ發シテ、遂ニ三七日ガ中ニ壇上ニシテ死ニケリ。其ノ怨靈果シテ邪毒ヲナシケレバ、賴豪ガ祈リ出シ奉リシ皇子、未ダ御母后ノ御膝ノ上ヲ離レサセ給ハデ、忽ニ御隱レ有リケリ。其ノ後賴豪ガ亡靈、忽ニ鐵ノ牙、石ノ身ナル、八萬四千ノ鼠ト成ツテ、比叡山ニ登リ、佛像經卷ヲ嚙ミ破リケル間、コレヲ防グニ無ク術シテ、賴豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ其ノ怨念ヲ鎭ム。鼠ノ禿倉是レ也。盛衰記亦之ニ同ジウシテイヨ〳〵クハシ

〔一竹塚〕（盛衰記）清盛、左衞門佐タリシ時、大內ニテ鵠ノ聲ヲナス化鳥ヲトル。是レ毛シユウト云フモノ也。毛シユウハ鼠ノ唐名也。博士ノ占ニ、清盛取止ムルコト吉祥也トイフ。南臺ノ竹ヲ召シテ、中ニ籠メテ清水寺ノ岡ニ埋メラレタリ。御惱ノ時、敕使立ツテ、宣命ヲ含メル時、毛シユウ一竹ガ塚ト云フ是レ也。摘レ要

〔鼠賦〕去來が鼠ノ賦に、どこの乙子を七郎とは申す。新左衞門とつけたるは、さかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら、云々　前編の卷端に、この鼠の賦を出せり。しかるに傭書あやまつて、新左衞門云々の一條を脫落す。〇又「月令」に、「田鼠」化シテ爲レ鶉ト。前編鶉を鷹に似ルものは悞リ也。

鼠ノ種一類最モ多シ。「鼷鼠」又「田鼠」「鼢鼠」(隱鼠)並ニ同ジ。「偃鼠」又「鼠母」(鼴)並ニ同ジ。此餘有ニ「鼫鼠」「竹鼠」「土撥鼠」「黃鼠」「貂鼠」「鼬鼠」「食蛇鼠」「蟹鼠」一今不レ能ニ悉ク注スルコトヲ一焉。書肆豪奪シテ之綉梓太タ急ナレバ也。

文化五年戊辰正月

著作堂主人再錄

三七全傳南柯夢　附南柯後記

淳于棼家二廣陵一。宅南有二古槐一。生豪二飲其下一。因醉致レ疾。二友扶レ生歸。夢二二玄衣使者一。曰。槐安國王奉レ邀。生隨二二使一上レ車。指二古槐一入二一穴中一。大城朱門。題曰二大槐安國一。有二一騎一。傳呼曰駙馬遠降。引レ生升二廣殿一。見下一人衣二素練服一朱華冠上。令二生拜レ王。王曰。前賢尊レ命。許二令女瑤芳奉二事君子一。有二僊姬數十一。奉レ樂執レ燭引導。金翠步障。珍瓏不レ斷。至二一門一。號二金儀宮一。一女子號二金枝公主一。儼若二神僊一。交驩成レ禮。情禮日洽。王曰。吾南柯郡。政事不レ理。屈レ卿爲レ守。敕二有司一。出二金玉錦綉。僕妾車馬一。施列二廣衢一。餞二公主行一。夫人戒レ子曰。淳于郎性剛好レ酒。爲レ婦之道。貴レ在二柔順一。爾善事レ之。生累レ日至レ郡。有官吏僧道。音樂來迎。下レ車省二風俗一察二疾苦一。郡中大理。凡二十載。百姓立二生祠一。王賜レ爵錫レ邑。位居二台輔一。生三五男二女一。榮盛莫レ比。公主遇レ疾而薨。生請護レ喪赴レ國。王與二夫人一素服。慟二哭於郊一。備二儀羽一。葬二主於盤龍岡一。生以二貴戚一威福日盛。有レ人。上表云。玄象謫見。國有二大恐一。都邑遷徙宗廟崩壞。事生二蕭墻一。時議以二生僭侈之應一。王因命レ生曰。卿可下暫歸二本里一。一見丙親族。諸孫無乙以爲甲レ念。復令二二使者送出二一穴一。遂寤。見下家僮擁二彗于庭一。二客濯中足于榻上。斜日未レ隱二西垣一。餘尊尚湛二東牖一。因與二二客一。尋二古槐下穴一。洞然明朗。可レ容二一榻一。上二土壤一。

爲二城廟臺殿之狀一。有レ蟻數斛。二大蟻素翼朱首乃槐安國王。又窮二一穴一。直上二南枝一。羣蟻亦處二其中一。卽南柯郡也。又一穴盤屈。若二龍蛇狀一。有二小墳一高尺餘。卽盤龍山岡也。生追想感歎。遽遣二掩塞一。是夕風雨暴發。旦視二其穴一遂失。羣蟻莫レ知レ所レ之。國記有二大恐一。都邑遷徙。此其驗矣。右陳翰槐宮記

槐宮記は淳于棼が故事なり。陳翰嘗て棼が夢に嫁して、榮枯得喪の理を推すこと、沉既濟が枕中記に一般。皆是れ寓言といへども、蒙昧を醒すに足れり。予も亦取る事あつて、三勝半七が奇耦を述べ、名づけて三七全傳南柯夢と謂ふ。事は米谷山の楠南柯に起つて、千日寺の南无佛に畢る。文辭荒唐にして、君子の一噱を惹くに似たり。然れども艷曲淫奔の脚色を借らずして、勸懲の微意毎卷に存す。閱者の利害、彼と此と如何。因つて數行を卷端に題すと云ふ。

文化四年丁卯夏孟

飯台蓑笠隱居

三七全傳南柯夢總目錄

卷の一　深山路の楠　木精の怪異　丹波都が傳

卷の二　稚兒の婦夫　楢坂の佞人　大柏の權輿

卷の三　臥房の胡越　華洛の僑居　夜轎の驟雨

卷の四　眞葛の朝風　百度の願事　夜半の月魄

卷の五　羈旅の宿の上　羈旅の宿の下　主なき園の花

卷の六　橋下の歇船　長町の五味　千日寺の柾

姓氏

世家

續井順昭　　續井吉稚

列傳

厚倉友春　蟻松典膳　今市全八郎

布施蝶九郎　赤根半六　赤根半七郎

丹波市　笠松平三　蟻松曾太郎

笠屋三勝　篠籠　敷浪

園花　阿通

三七全傳南柯夢　卷之一

東都　曲亭馬琴編次

深山路の楠

永正年中の事かとよ、奈良の都に、續井順昭なんいへる、やんごとなき人いまそかりけり。その先祖を尋ぬれば、佛門より出でて武家に交らひ、法筵清衆の五戒を棄てて、兵家鬪戰の六具を事とし、建武の播亂に、軍功拔羣なりしかば、忽地に家を興し、大和半國を領してより、累世武威をうしなはず、文を備へ武を備へたる家隷ども多かり。順昭かく家富み昌へて、薪には桂を科り、米には珠を科り、身に錦綉を襲ね、口美味に飽きて、只管閑雅の遊興に耽り、このごろ世に弄ぶ茶法を好して、京師の北山なる金閣に倣ひ、新たに茶亭を造らんとて、名だたる番匠等を召しつどへ、龍門の瀧、岩下の水、蓮池、鏡湖池、九山八海石、春日の社、夕佳亭、すべて寸分も違はず繪圖に寫さし、既に吉日をえらみ、作事を興さんと議せられたり。抑金閣と聞えしは、應永年中の建立にして、鹿苑院義滿公の別莊なり。閣は三重にして、七間の露盤に、二尺八寸の鳳凰を戴かし、第一重を究竟頂と名づ

けて、廣さ三間四尺八寸、第二重は潮音洞と稱へて、東西七間、南北五間半、岩窟に觀世音と、四天王を安置し、第三重は、法水院と呼びて、廣さ第二重に等しく、こゝにも又觀音勢至を安置せり。これらを摸して、作り出さんこと、なしがたきにあらねど、潮音洞の天井は、楠の一枚板をもて造られたれば、唯この良材にのみ事缺きて、思はずも日を經る程に、順昭頻りに焦燥ちて、ある日老鷲を集會へ、「扨も此度茶亭の天井に用ゐるなる楠は、得難きに似たれども、當國は連山波濤の如く聳え累なりて、樹木森然たり。されば往昔より、杣木樵る山兒等が、斧を入れざる日はなけれど、山のあらはになりぬとも見えず。人も通はぬ谷陰などに、生ひたちたらん楠の、わが求むるほどなるも、究めてなしとはいひがたし。翌より夥の樵夫をもて、殘る隈なく索ねさせよかし。」と仰せけり。そのとき蟻松典膳豐度と呼ばるゝ老臣、列を出でてまうすやう、「當國添上郡、米谷の山間は、伊賀より通ふ順路なるが、彼の山の半腹より、街道を南のかたへ木垂れたる楠の大木あり。その枝東南へさし出でたること、大約八九十丈に餘り、樹の下常に闇くして、旅客晝も路に惑へり。もしこの楠を挽かし給はば、四面七五間なる板となすべし。」と申すにぞ、順昭ふかく歡びて、「筑紫潟か陸奥の果てなどにありといはば、思ふに任せぬ事もあらんに、かかる良材の、わが知る山より出づる事は、はからざる幸ひなり。なほて襄には聞えざりし、とく〳〵その楠を伐らすべし。」と仰するに、乳母子なりける、厚倉二郎太夫友春、すゝみ出でて諫めけるは、「怒特祠の梓樹を伐り、陸亭の古木を倒して、怪異に遇へりし事は、唐山の書籍に記して、君もよくしりてぞ坐すべき。千載を經る樹には、かならず木精あり。これを伐る者祟りをうけし事は、枚擧ぐるに遑あらず。是れ併しながら、樹の人に殃するにはあらで、天その驕奢を憎み給ふかと思し。彼の米谷なる楠も、山兒等が斧を脫れ、既に千載の大木となりて、その木下闇、旅客の煩ひとなるを、枝だに伐り透かさざるは深き故ありぬべし。かかる事は、いく度も思ひかへし給はば、後の患へなからんか。」と、いはせもあへず、順昭忽地氣色かはり、「やをれ友春、かばかりの事を汝にいはるべきか。物の祟りなどとて怕れ惑ふは、婦女子のうへにあるべし。わが采地に生きとし活けるもの、おのれ〳〵が世を經るは、みな是れ誰が庇みぞや。既にその澤を蒙り、その恩をしることあらば、物の用にたたまくこそ思ふらめ。まいて草木は非情なり。汝由なき事を申して、衆人をなまどはしそ。翌はつとめて彼の山に赴き、みづから下知して楠を伐らすべければ、典膳は樵夫等に令れしらして、用意せよ。」と急がしつゝ、衝と座を立ちて奥に入れば、厚倉ふたゝび諫むることを得ず、みな諸ともに退出けり。かくて順昭は、次の日の早旦に厚倉二郎太夫以下夥の從者を將て、米谷山に到るに、蟻松典膳は先だちて、樵夫等を集へて伺候せり。その時順昭馬より下りて、牀几に尻をかけ、件の楠を向上ぐれば、枝葉參差と入りちがひて半天を覆

ひ、幹の太さは十歩にして、なほ繞り果つべうもあらざれば、莞爾として左右を見返り、「物は求むるによつて集まるといへど、得ると得ざるとは、その人の德にあり。われ又今茶亭を造らんとするに、天この良材を與ふ。これわが德なり。時をうつさず伐らせよ。」と下知するに、いと老い髐ちたる樵夫二三人、おそる〳〵領主のほとり近う出でて申すやう、「畏けれど、面のあたり聞え奉るべきことあり。殿の御威德をもて、『この樹を伐れ。』と宣はするを、固辭み奉るにはあらねど、この楠は昔より、神とし崇めて、枏木樵る男も立ちよらず、落葉搔く童も近づかず。見そなはする如く、周りには注連を引きまとひて、人の憩ふことだに許さざるを、無下に伐らし給はんには、かならず大きやかなる祟りあるべし。加旃、幹は石よりも堅やかに見えて、輒く斧もたち候はじ。廣き大和の山々を索ねんに、この樹に劣らざる楠の、なきこともあるまじければ、けふより百日を限りて放べ給へ。わかきものどもを伴ひて、外を索ね候べし。」とまうすにぞ、夥の樵夫等も、三人の翁が後方につきて、もろともにかき口說けば、順昭聞きもあへず、かや〳〵とうち笑ひ、「汝等草鞋大王の故事を聞かずや。腐ちたる草鞋も崇め祀れば靈驗あり。愚民これを悟らず。この樹の歳經たるを奇として、遂に神とし崇むればこそ、鬼魅罔兩の栖とはなるなれ。汝等伐らばとく伐れ。もしわが命に從はずは、かかるべきぞ。」といきまきつゝ、刀をすらりと引き拔いて、注連を丁と切れば、左右へふつとわかれ飛んで、鮒もはらりと散亂せり。樵夫等はこの形勢を見て戰れ慄き、「さらばまづ枝をおろし候はん。」とて、五七人楠の梢に攀ぢ上り、枝より枝へ長やかなる麻索を結び著けて、八方へ引き渡し、おのおの斧をふり揚げて、一二の枝を丁と打てば、斧は閃りと反ねかへり、少し删られたる木皮の間より、鮮血さつと濆りて、樵夫等が面上にふりかゝると見えし、上なる七人瞑眩きて、しばしもたまらず撞と墮つれば、下なるものは壓しに打たれ、或は斧にて手足を傷られ、半死半生なるもの十餘人、墮ちたるものは卽死せり。さすがに勇き順昭も、この爲體に舌を振ひ、思ひたゆたふ氣色なるを、二郎太夫早く曉得つて聲を低うし、「かくあるべしと思ひつるをもて、きのふ申せしを用ゐたまはず、罪なき樵夫を殺し給へり。過つて改むるに憚ることなかれとか、今は是れまでなり、努思ひとゞまり給ひね。」と諫むるに、順昭は一言の回答もなくて、只顧に歎息し、やがて馬にうち乘りて、既に歸らんとしたりしが、蟻松典膳を近く招き、「樵夫等がこと、その妻子の嘆きも不便なり。死したる者には棺を與へ、傷きたるものには、藥をとらせよ。」と聞えおきて、轡づらを引きかへせば、從者等列を整へ、草葉の露を拂ひつゝ、奈良を望していそぎぬ。領主さへかくのごとくなれば、樵夫等はしばしもこゝにあらんことのおそろしくて、或はその友の屍を扛き、或は病めるを扶け掖きて、おのが家にぞ歸りける。こゝに城下郡、佐保莊なる柴賣に、赤根半六といふものありけり。先祖は楠正勝譜代恩顧

の家隸なりしが、明德三年二月のころ、正勝千早の城を落ちて、十津川に漂流せし後は、大和なる親族をたよりて、佐保莊に住家求めしより、今の半六に及びて既に五代、久しく片山里に零落し、柴を賣りて活業とすれば、文學に疎き身も、朱買臣が青雲の志を羨み、いかにもして舊の武士にならばやと思ひながら、家貧しければ、發跡づるよすがもなく、妻を娶りしより十年に餘りて、その名を籌篠と呼べるが、これも由緒ある武士の浪人、何がしが女兒にて、はやくより孤となり、いくその艱苦に人となりたれば、物の哀れをもよくしりて、心ざまの正しき事は、富めるかたにもたち勝り、夫を諫め、子に教ふるなど、女子にはいと稀にて、一子半七も、今玆はや、十才になりつ。この兒母に似たりけん、その性の怜悧しきはさらなり、容止端正にて、ふり亂したる髫髮も、なんとなく匂やかに、垢つきたる針目衣も、おのづから鄙びず、「柴賣の兒にはいとほし。」とて、親しきも疎きも、稱めざるはなかりけり。然るに赤根半六は、この日樵夫に驅り催されて、米谷山に到り、はからずも杪より落ちたる者に蹴仆され、株にて膳を打ちしかば、二三間轉びゆきて、篁竹の中に臥したるを、樵夫どもは只一足もはやく歸らんとて、慌忙きし程に、半六が篁竹に、覆ひ躱されて臥したるをしらずして歸りにければ、遂に半日あまり昏絶りて、物の善惡をわきまへず。日も暮れ夜も深けゆくまに、稍を過ぐる山風に楠の葉末の露吹きはらひ、はら〳〵と降りかゝれば、一滴の白露、半六が

喉嚨に入りて、俄頃に甦生し、こはそも爰はいづ地なるらんと、まどふ心を推し鎭めて、つら〳〵けふの事を思へば、打たれし時に昏絶りたるを、樵夫等が情なく、うち捨てて歸りけん、「さても危き命拾ひぬ。」と獨語ちて、やをら身を起せば、耳に馴れたる溪水も、何となく凄まじく月さへ入りて路もわかねば、ます〳〵呆れて茫然たる折しも、誰とはしらず、楠の下にうち相語ふ聲すれど、野干玉の闇なれば、咫尺の間もたえて見えず。あやしや、彼處にもわれに等しく、捨てられたる人ありけんとて、既に呼びかけんとせしが、なほ疑ひて、その相語ふを聞くに、一人がいふやう、「いかにわが神力を見たりや。たとひ領主、この國中の人を竭して來るとも、何程の事をしいだすべき。」と、誇りかに聞ゆれば、一人答へて、「いな〳〵さはいひそ。もし知れるものありて、墓目して足下を蟄らせ、その根に鹿尾菜の烹汁を沃ぎかけ、しかして後斧を入れなば、今の廣言もかひなからん。」といふに、はじめの一人、いたく驚ける聲音にて、「やよみわそぎ、忌むことはいはぬものぞ。事のその期に及ばんには、天なり命なり。もし緣故をしりて、われを斫るものあらば、終には活けみ殺しみ思ひしらせてん。」といふを、一人聞きもあへず、呵々と冷咲ひ、「しふねきことをいふものかな。みづから天命なりとしらば、怨みずとも止みねかし。」と回答へて、その後は音もせず。半六これを聞きて思ふやう、三輪出の神木に、千歳經る杉ありとは、世の人のしる所にして、今みわそぎと呼びかけしは、三輪の

杉にて、彼處の木精、この楠が殃せらるゝを訪へるなるべし。こはよき事聞きぬと歡び、その夜の明くるをまちて山を下るに、思ひのほか健かにて、足の運びも常にかはらねば、只管に路をいそぎて、佐保の莊へ歸りけるとぞ。

木精の怪異

半六が妻篠は、「米谷山にて、人夥死したり。」と傳へ聞きて、安き心もあらざるに、日は暮るゝに夫は立ちも歸らざれば、いよゝあやしみて、一子半七を走らし、彼此と問はすれども、定かにしれるものもなし。あまりに思ひかねて、通宵門方に立望みつゝ、明けゆくころより、里人を鄕導とし、彼處に索ねゆくべしとて、飯も常よりははやく炊ぎ、その準備してありけるに、半六恙なく歸りしかば、嵐の後に花をながめ、雨夜に月を見る心地して、やゝ痞を撫でおろし、半七とともに、夜べよりの心づくしをかたり出でて、歡ぶこと限りなく、「いづ地にか宿りたまひたる。歸らじとならば、人に言傳てても聞え給ふべきに、寢よというても半七が、共に目睡まで明し侍り。安堵て後はなか〳〵に恨むも心やりなるを、あしうな聞き給ひそ。」といふ。半六は只莞然とうち咲みつゝ、草鞋脫ぎすてて地炕の邊に座を占め、「きのふ直に歸らざりしは、如此々々の故なり。」とて、墮ちたる人に蹴仆され、息絶えてありし事、一伍一什を物がたり、さていふやう、「常言に過ちの功名といへるがごとく、われはからずも、身を立て家を興すべき時を得たり。その故は、昨夕米篠山なる篁竹の中に臥して、楠の木精と杉の木精がうち相語ふを聞くに、彼の楠を伐らんには、『臺目をもて木精を蟄らせ、鹿尾榮の烹汁をその根に沃ぎかくる時は、斧を入るゝに容易し。』といへり、わが先祖は、弓馬の達人なりと聞けるが、鳴弦臺目の射法、家に傳へて今に喪はず。われ彼の楠を斫つて、領主の所感に遇はば、絶えたる家をも興すべし。この事人にもらしたまふな。」と密語くにぞ、半七は父の怪談に膝を進めて、顏うち瞻りたるに、篠しばし深念して、「木精のみづから滅ぶべきよしを聞かせしは、いと怪しくも侍るかな。しかはあれ、領主の威勢をもて、伐ることのかなはざるを、おほつかなき言をたのみて、爲損じ給はば、世の胡盧となるのみならず、罪得がましき所爲ならずや。又爲課せたまふとも、その祟りあらんには、わが身はさらなり、半七がゆくするも不便なり。又祟りなきにもせよ、『先祖は楠殿に仕へて譜代相傳の家隷なりし。』と、日來いひ出でたまひながら、心きたなく榮利を計りて、さすがに古主の名にし負ふ、楠を伐りたまはんは、名詮自性の理とやらん、末榮ふべくも思はれず。智惠才學にも及びがたきは、世の人の貧福なりと思ひたえ、時を待ちたまはんこそ、遙かに心安からめ。まけて思ひ止まりたまへ。」と、いと賢くも聞ゆるを、半六聞きも果てず頭をうち掉り、「物を思ひ過すは、婦女子の生平なり。いにしへの人も、天の與ふるを取らざれば、却つて禍を受くとこそい

へ。尋常にして彼の樹を伐らば、祟りを稟くることもあらん。法をもてする時は、怕るゝに足らず。又楠は古主の名氏なれば、伐らじといふことといと愚かなり。世に久米氏に仕ふる人は、主の名氏なりとて、米を食はでやはある。かくいふもわが身ひとつの爲にはあらず。御身こゝに嫁りてより、既に夥多の春秋は經れど、身には襤褸、口には粮、それを懶しと思ふ氣色も見せ給はねど、わが子乍ら人竝に勝れたる半七を、世にもしられぬ深山木となし果てん事、いとほしからずや。婦怜悧しくて、牛賣りそこなふとぞいふなる。かからん筋は、御身がしるべきにあらず、何事も打ちまかせ給へ。」と回答へて、聽き納るべうは見えざりし。實にや信言美ならず、美言信ならず。愚かなるは良藥の苦きを憎み、才あるもの亦人の諫めを阻む事多し。鑰篠は、日來より思ふ事をば思ふがごとく、よくもあしくもなし果つる、夫を今も諫めかねて、袖に露漏る言の葉も、たらはぬ此の身とばかりに、強ひてはふたゝびいはざりけり。かかりしかば半六は、次の日奈良に赴きて、蟻松典膳が宿所に呼門ひ、「これは佐保の莊なる、赤根半六と呼ばるゝものなり。密かに聞え奉るべきことありて參れり。願はくは對面を許させたまへ。」といはせければ、典膳やがて呼び入れて、その故を問ふに、半六は膝行頓首し、「領主近曾、米谷の楠を伐らせんとし給ふに、怪異ありて果し給はずと、風聞するは實なりや。僕輒く、彼の輒を伐つて進らすべし。この事申さん爲に、推參いたせし。」といふ。典膳これを聞きて冷笑ひ、「汝いかばかり膽の太くて、かかる戯言をまうすぞ。彼の樹を伐らんとしつるものは、並地に命を隕せり。是れ木精の祟りなり。博士の說に、木の精を彭侯といふよし白澤の圖に見えたりとぞ。もし命に缺替あらば許すべし。」と回答へするに、半六容をあらためて、「扨は僕が身の賤しきをもて食言とし給ふか。いかで貴人に對ひて、故なき事をまうすべき。千載經る樹には、木精ある事をしり給へども、これを伐るに法ある事をしり給はねば、勞して功なきのみならず、夥の人を傷ひ給へり。しかるにわが家、不思議に木を伐る法を相傳す。領主の御威勢は、肩を比ぶるものなく、百萬の強敵といへども、屑とし給はざる御身をもて、唯一株の楠を斫り果さず、世の胡盧となり給はんは傍痛し。僕世々この國の民として、妻子を養ふこと、みな領主の賜なりと思へばこそ、命を的にして、寸忠を竭さんとするに、用ゐられざるは不遇ならめ。ぜひに及ばず。」と呟きつゝ、いと本意なげに出でんとするを、典膳忙はしく呼びとゞめ、「もし汝がいふ如くならば、莫大の忠節なり。しかれども究めてなしがたき事なれば、佻々しくも信ぜざりし。いよゝ爲課すべきや。」と問へば、半六莞爾として座に復り、「生きとし活ける者、誰か命の惜しからざらん。もし木精の祟りを惹かば爲課すといふとも、僕立所に死すべし。又爲課せずば罪せられん。かく危きをしりつゝ申すをもて、虛實を察し給ひね。」と、憚る氣色なく答へしかば、典膳やうやくに納得し、まづ緣由を聞えあげんとて、

半六を退かし、直に出仕して、首尾を述べしかば、順昭大いに歡びて、「我も愁ひにして已みなん事を、口をしくは思ひながら、眼のあたりなる祟りに怕れ、重ねて、『彼の樹を斫れ。』といふとも、衆人承引かじとて默止せしが、半六とやらんが訴訟へ、聞くもいと潔し。まづ彼が隨意計らはして、成る成らざるを試み、いよゝ爲果せたらんには、一廉の賞錢をとらすべし。とく〳〵。」といそがせば、典膳うけたまはりて宿所に退き、ふたゝび半六を呼び出して、領主の仰せを說きしらし、「汝が一世の浮沉こゝにあり、思ひ侮りて爲損ずる事なかれ。事成就せば賞錢は、望みの隨なるべし。」といふ。半六額づきてこれを聞き、「僕元來賞錢を願はず、先祖は河内の正勝に仕へて、數代武夫なりしかど、楠家沒落の後は、いと寒々しくなりて、祖父のときより柴を賣り、活業といたせども、さらに武士の志を失はず。あはれ此の度の恩賞に、舊の武士となし給はば、先祖への孝、身の面目、これにますこと候はじ。もしその期に至りなば、よきに執し給はれかし。」と希へば、典膳點頭きて、「その事は仔細なし。汝いづれの日に、かの樹を伐るべき。」と問へば、半六答へて、「明日より七日が間は、齋して法を行ひ、第八日に至らば事成るべし。しかれども、件の大木を、僕一己にて伐らば、徒らに日を費さんか、既に斧を入れて、その祟りなきをしらせ進らする後は、樵夫等に仰せて斫らせ給へ。」といふに、典膳しばし傳へて、「さらば第九日めに、われ樵夫等を將て彼の山に到るべし。かならず時日を違へな。」と、互に固く約束し、半六は暇賜はりて、己が家路に歸りけり。さる程に赤根半六は、次の日より齋して、墓目の射法を修し、第七日めに至りて、鹿尾菜の烹汁を桶に汲み入れ、米谷山に擔ひゆきて、楠の根に沃ぎかけ、さて詰旦、斧麻索などを用意して、ふたゝび彼の樹の下に到れば、奇なるかな、さしもの大木、一夜の中に凋みて落葉堆高く散り積り、株の閒に、大きやかなる穴出で來て、蟬に等しき蟻ども、數限りもなく、その穴を跂ひ出でて、皆悉く死してあり。半六はこの形勢を見て、且怪しみ且歡び、扨はこの楠の木精は蟻なりけり。楠の古木には樟腦を生じて、蟲の著くことなしといへるは、虛言にてありけるなり。今は心易しとひとりごち、落葉を搔き集めつつ、用意の火繩をさし著けて、死したる蟻を燒くに、殊さら大なる蟻一匹、なほ死にもやらでありければ、前の夜、三輪杉と相語へるは這奴なるべしとて、斧もて額を打ち碎き、もろ共に灰となせば、煙高くたち昇りて、西北を斥して空引きつゝ、半天にして消え失せたり。正に是れ、蟻の思ひも天に昇りて、寃みを天帝に訟ふると、世の常言も故あるかな。むかし董昭之は、蟻を助けて福を稟け、又桓譙といふものは、蟻を殺して禍にあへるよし、載せて搜神記に審なり。輪廻應報の理は、蟻といへども漏るゝことなし。されば半六、この樹を伐つて、一旦身を立つるに似たれど、終に南柯の夢と覺めて、その兒半七憂苦に迫り、父よ母よと鳴く蓑蟲の、蓑屋が軒の木がらしに、花も紅葉も難

波なる、身のよしあしを諭はるゝ、これその緣起なり。

丹波都が傳

そのとき半六は、只管雀躍に堪へず、「翌は約束の日限なるに、われまづ一枝をおろしおきて、この奇特を示さずば、この功他人に奪はれなん。しかなり〳〵。」とひとりごちて、さら〳〵と攀ぢ上り、街道の方へさし出でたる枝に索を著けて、木の上に身を固め、腰なる斧を脫き出して、ちやう〳〵はつしと斫る程に、思はず斧の柄を脫けて、麓へ碾と落つる折しも、伊賀路より大和を經て、山城へ出づるにやあらん、背に裹の袱も、小妻木綿のやゝ破れし、檜の笠に竹の杖、木立いぶせき山路を、たどる〳〵來る盲人ありけり。親子と見えて只二人、年まだ七つか八つばかりなる、小女兒に手を引かれ、谷より木垂れし楠の下を過らんとする處に、半六がとり落せし斧、彼の盲人が笠の上に閃き懸り、項をさつくと砍り拆かれ、「叫苦。」と一聲叫びもあへず俛しに仆れしかば、女兒は周章きつゝ、「爹樣なう。」と呼び活くる、涙に聲も立ちつ居つ、せん術もなく見えたりけり。浩かる處に籌篠は、猛き夫を諫めかね、わきてこのことの覺束なく、午飯運ぶに假託けて、三里の路をはる〳〵と、半七を伴ひて、はしなく麓に望しかゝり、叶嗟と走りよるべなき、旅客が血に塗れて、生死も定かならざるを、いかにせんとて泣き叫ぶ、稚き人の心の中、思へば見れば痛ましく、彼の三峽の夜の猿、腸を斷つ許りにて、共に濡らせる袖の隙より、持てる割籠をとり落せば、半七もかひ〳〵しく、左右に立ち繞り、濟はんとするに藥はなし、心づきなく籌篠が向上ぐる峯の樹の上にて、枝をおろすは夫なり。さてはと曉ればいとゞなほ、淺ましくも悲しくて、此首の二人は聲を揚げ、「わが夫なう、爹々なう、とく下り立ちて旅客を、救ひたまへ。」と呼びかくる、聲は谺に響きあひて、手にとるごとく聞えしかば、半六ます〳〵心驚き、件の索にとりすがりて、杪ながらに下り來り、この爲體を見て色をうしなひ、やをら盲人を抱きおこして、腰に著けたる吉野捲より、用意の定心丹をとり出し、その口に含ますれば、籌篠はもて來りし、土瓶の溫茶を飲ませなどし、さま〴〵に介抱せしほどに、盲人やうやく息ふきかへせば、女兒は涙をかき拂ひ、「やよ爹さま、心地はいかにおはする。」と、いふをしるべに撈り寄せ、「おさんは恙なかりしか。誰人ともわきまへねど、人里遠き山路にて、かかる介抱を受くること、世に有りがたき庇みなり。」と、いふ言毎に息きれて、苦痛に堪へず見えければ、半六はその耳に口をさし著け、「いかに旅客、われは佐保の莊にて、赤根半六と呼ばるゝものなり。しかるに領主の仰せによつて、この峯なる楠の枝を、目今おろさんとするに、思はずも、斧の柄脫けて傷けし事、過ちなれば勸解ぶるに由なし。心つよく思ひ給へ。わが宿に伴ひ歸り、療治して進らせなん。何國の人ぞ名告り給へ。」と、問ふも面なき風情なり。盲人苦しき息の下に、潸々と落涙し、「しらぬ大和

路にたどり來て、仇にもあらず恨みもなき、人の手斧に命を隕すも、みな前世の惡業ならめ。わが身はもと鎌倉の管領家、扇谷殿に仕へて、丹波太郎孝基といひしものなるが、故あつて退糧し、世わたる效のなきまゝに、夫婦竊かに談合して、ふりにし跡をつぎねふの、大和物語にあらねども、難波の浦の蘆刈が、あしかる緣と思ひたえ、女兒おさんが三歲のとき、飽かぬわかれに妻を去り、富貴の家に給事へ、發跡づる日もあらば、ふたゝび環會はんとて、華洛へ上せし次の年、わが身はからず眼病を患へ、つひに瞽者となりしかば、稚き女兒を養育むに便著なければ、髮を剃り、わかかりしときの嗜みたる、四筋の絲に繫ぎとむる、命かひなき琵琶法師、丹波氏をその儘に、丹波都と名告りて伊勢に赴き、北昌家の城下に足を駐め、侘住居すること五年あまり、六年の今におよべども、別れし妻はいかにかしけん、音耗なきも理なり。わが相模より移り住みて、伊勢にありともしらざるべし。しらせんとおもへど彼も又、いづ地にかあるやらん。華洛といひしを心あてに、女兒おさんに手を披かし、引折りて短き旅衣、妻に逢はんと思ひたちて、竹の都をまどひ出でし、只一すぢの竹杖も、折れては死出のやまと路に、露と消えなんはかなさよ。とてもかくてもこの瘍にて、存命ふべくも思はねど、恩愛のやるかたなさ、泣かじとすれば、聲蟬の息の内より惑ひぬるは、只この女兒があればなり。八歲とはいへど年弱にて、十一月七日の出生、丹波太郎孝基が女兒おさんと、父が手づから書いつけたる、臍は今もなほ、女兒が項に掛けさして、護身囊の中にあり。又わが背負ひし、袱包は、異國渡來の樂器にて、その形阮に似たれど阮ならず、三條の線をかけて彈くに、千萬無量の音を發す、鄭聲なれど味ひあれば、たゞ私に三味線と名づけ、年來祕藏するといへども、世に稀なれば人もしらず。されば夫婦が別れし時、この三味線の撥を拆き、再會の記念とせし、その片割はこゝにあり。親のなき子と憐まれ、人の情に生育たば、戀しゆかしと思ひ子の、おさんが母と名告りあふ、割符ともなるべければ、これは女兒にとらせたし。望みがましき事ながら、この三味線はわが骸と、共に瘞めてたび給へ。もし後の世にこの樂器の、行はるゝ日もあらば、朽ちぬ名のみを呼ばれん。」と、いひ遺す言の葉は、今も大和の城下郡、三味田の里に佐保の莊、丹波市と呼ぶ三の鄕を、三條の線に象りしは、是れこの緣故なるべし。篠聞くも痛ましくて、「世に形なきものの限り、我に增すことなからめと、思ひしより、げにはかなきは、人樣々の浮世ぞかし。過ちとはいひながら、盲ひし人をあやにくに、斧もて殺すは仙人の、棊に見惚れつゝ幾世經し、故事とは逆にて、これも木精の祟りかと、思へば人の上ならず、よしやこの儘果て給ふとも、女兒御は吾儕が子とも嫁とも守育てて、亡父の跡世にしある、母御に環會はし侍らん。寥々しけれどわが夫も、由緒ある人にて侍るなるに、一子の半七も、今茲は十歲になりぬれば、わが子の愛に人の子を、思ひ比べて痛ましや。これも過世の因緣な

りせば、成長る後半七に、おさんどのとやらんを妻はして、この過ちを償ひてん。寃みを散れて成佛あれ。」と、聲も涙にかきくれて、いひ慰むれば半六も、瞼を瞬き〳〵、「籌篠いしくもいひつるよ。我このおさんを養育みて、半七が妻とせずば、この身も終に刃に伏し、汙名を路頭に遺すべし。」と、思ひ定めし誓言に、丹波都はいと賴もしく、思ふ心をいへばえに、岩間の石滂澗れ〳〵に、溢れし鮮血はとゞまれど、留めかねたるこの世の名殘、おさんはよゝと泣き沉み、「目も見え給はぬ爹さまの、一人はさこそ便なからめ。わが身諸共冥土とやらんへ、伴ひ給へ。」とかき口說く、聲のみ聞けど今般にも、見ること難き女兒の貌、胸苦しさを思ひやりて、引き退くる籌篠が、勸むる念佛に半七も、うら悲しさに堪へかねて、親子々々が掌と、聲とを合はして、「彌陀佛。」と、唱ふる中に睡るが如く、丹波都は締斷れてけり。けにや世路は旅に似て、ゆくも歸るも別れては、しるもしらぬも終の友、後るゝも先だつも、夕の煙とたたぬはなし。儚なきものは命なり。さる程に籌篠は、おさんを賺しこしらへて、半七と共に伴ひ歸れば、半六は日の暮るゝを待ちて、密かに丹波都が屍を扛きもてゆき、佐保の願成寺に葬りつ、彼が遺言に任して、三味線を其の處に埋め、跡丁寧に弔ひけるとなん。

三七全傳南柯夢卷之一　終

三七全傳南柯夢　卷之二

東都　曲亭馬琴編次

稚兒の婦夫

蟻松典膳豐度は、曩に赤根半六が、米谷の楠を斫らんといひしこと、なほ覺つかなくはあれど、既に約束の日子にもなりしかば、夥の樵夫を將て彼の山に赴けば、半六は先だちて、山の半腹にこれを待ちうけ、軈く爲謀せたるよしを聞えしらして、もろともに樹の下に到るに、さしもの大木、俄頃に凋然と落葉したるを、一二の枝を斫りおとして、幹にもところ〴〵斧の刃を入れたりけり。典膳はこの形勢を見て、且怪しみ且歡び、半六を見かへりて、「人の才あると才なきとは、貴賤をもて論じがたし。野夫にも功者ありとは其許の事なり。曩の廣言空しからずして、領主も本意遂げ給ふ事、吹擧せしわが身に于て、こよなき面目なり。」とて、只管嘆賞して已まず。半六聞きて、聊かも誇りたる氣色なく、「こはみな領主の御威福によつて、思ひし隨に成就せり。なほこの上の庇みには、はじめ願ぎまうせし事を忘れ給はで、よろしく聞えあげ給はるべし。」といふに、典膳點頭きて、「そはこゝろ安か

れ。ともかくもして、其許の夙願を果させんこと、わが胸中にあり。」と應へしかば、半六ます〳〵阿り諛ひ、さて樵夫に對ひて、「見らるゝごとく、己既に法をもて木精を滅却し、その枝をおろし、その幹に傷けて、祟りなきをしらしたれば、おの〳〵力を戮はして挽き給へかし。」といふ。樵夫等は面のあたりに、この奇特を見し事なれば、皆もろ共にこゝろ安堵て、しばしが程は、稱讃して鳴りも已まず。この日を手斧始めとして、件の楠を挽くに、七間四面の版二枚、五間四面の版四枚を得たり。その餘材、梁とし棟とすべきものは、枚擧ぐるに遑あらず。順昭緣故を聞きて感悅斜ならず。只この一木をもて茶亭を造らし、これを審雨堂となづく。その號、南柯の蟻の故事に、稱へるぞ不思議なる。蟻王の宮殿に額あり。審雨堂の三字有在閒に典膳は、頻りに半六を吹擧し、「彼が先祖を尋ぬるに、楠正勝の老黨たりしとぞ。『子孫凋落れて五世に及ぶといへども、今に武士の志を喪はず。弓馬の奥義も、をさ〳〵家に傳へ、舊の武士にならまくほしうはあれど、家貧しくて、さるよすがもなし。縱ひ家に巨萬の財を積むとも、金銀は失ひ易し。此の度の恩賞には、一握りの米にもあれ、領主の祿を賜はりて、家臣の數にも入る事あらば、本望なるべし。』といへり。げにその面魂物の用に立ちかねまじう見え候に、あはれ莫大の御庇みをもて、戟を執り、鐮を牽かし給はばや。」と、信だちて申すにぞ、順昭氣色よく諾ひて、「能を擧げ士を薦むるは汝が職なり。功あるものをいかで賞せざらん。事の序あらば召し出すべきに、まづ當座の賞錢をとらせよ。」と仰せける。然るに、「嫡男吉稚丸、今茲十歳になり給へば、鎧の被初めあるべし。」とて、專らその用意をせらるゝに、年果の上旬に及びて、茶亭も成就したりしかば、順昭これ彼慶賀の折をもて、赤根半六を召し出し、五十貫の新地を賜はりて、郡山の北方なる、五條の村主を命ぜらる。かくて半六は年來の宿志を遂げて領主に拜謁し、丹波郡が女兒おさんを、「妻の姪なり。」と稱へ、籌篠半七と共に將て、五條の宿所に移り住み、手馴れし斧を刀に換へて、一鄕の成敗を管り、秣の運送など點檢するを身の務めとし、日毎に奈良へ出仕する程に、いと下ざまなる司なれど、その鄕にしては威勢あり。この爲體に、佐保の鄕人等は更なり、親しきも疎きも、「こよなき立身なり。」とて羨みぬ。夫れ渴するもの水を求むるに、水を得て飽く時は、更に湯を求め、湯を得て飽くときは酒をおもふ。是れ人慾の愼み難き所なれば、半六既に望み足りて、領主の家臣となると雖も、その職役の卑きを厭ひ、いかにもして近臣の列に入り、なほ時を得て、政事に與る事もやとて、暇ある日は親しく典膳が家に交加ひ、彼の人の爲に志を運びて、冬は障子の隙を張り更へて、寒夜に爐の火を吹き、夏は屋裏なる蜘網を搔きはらひて、炎天に井を曝し、奴僕の如く奔走して、その寵に媚びたりければ、典膳ふかく歡びて、二なき人にぞ思ひける。この典膳が妻の名を敷浪と呼びて、冢子曾太郎は九歳、女兒園花四歳にぞなりぬ。凡そ人、子をもつ時は、その愛

他の子にも及ぼすが、人情の常なれば、典膳夫婦も、半六が兒子半七が薦闌けて心ざまいと怜悧しきを傳へ聞きて、折々それが安否を問ふに、半六は既に便宜を得たりと歡び、信だちて答へけるは、「しらせ給ふ如く、某原艱苦の中に養育みたれば、子を敎ふる事も心に任せず。今の身になりては、子どもによき事を見も習はし、君の爲身の爲に、文學武藝も、その心がけなくてはと思ひながら、師を擇ぶことの容易からねば、猶おのがまゝに生育てば、久後とてもおぼつかなし。男の童は、走りまはりも健輕にて、召仕ひたまふには、老いたるかたに勝ることもあるべし。折ふしは半七を呼ばし給ひて、茶のかよひなどつかまつらせ給ひなば、彼が爲には大なる僥倖なり」と、只管媚びていひこしらへ、次の日半七を將て、典膳が第に到るに、曾太郎はよき陪侍得たりとうれしみて、そのほとりを離さねば、典膳夫婦も、又憎からずもてなしつ、食事なども曾太郎ともろともにさして、わが子のごとく慈しみぬ。しかるに籌篠はその志夫に似ず、半七がしば〳〵奈良へ行きて、典膳が家に止宿するを、傍痛く思ひて、ある日夫にいへりけるは、「わが身幼かりしとき、父がわかき人にもの敎へ給ひしを聞き侍りたるに、君に仕ふるもの公事にあらざれば、執權の門に到らずとなん。然るに蟻松ぬしは、一の老臣にておはするを、日來親しく交加ひ給ふすら、心あるものは、『なめげなり。』とて爪彈し、僻める人は猶しとぞおもふめる。何事も新參にておはすれば、木にも附かず草にも附かず、只信やかに、その職分を守りてこそ在すべきに、年齒ゆかざる半七さへ、彼處へ立ち入らし給ふはいかにぞや。稚きものは心つきなくて、人の怒りを惹き出す事も多かり。かかる筋は、御佛に對ひて經を說くがごとく、わらはが申すまでにはあらねど、おほつかなさに聞ゆなる、恐惶みづからこゝろし給ひね。」といふ。そのいふところ理あれば、半六は少しはぢらひたるおももちにて、その後は半七を奈良へ將てゆかず。典膳夫婦はかかる事をしらで、彼方より迎への人を遣はしなどすれば、籌篠はよきに回答へて、「けふは灸し侍れば參りがたし。翌よりは、手習讀書の入門さしはべれば。」と、いひこしらへて奈良へ遣らず、またおさんにも、半七と共に手習させ、わが子人の子の分別なく、慈愛しむほどに、おさんは半六夫婦を、主のごとく親のごとくに敬ひ仕へて、孝順更にたぐひなし。籌篠は、この擧止を見てふかく歡び、言の敍あるときは、半七おさんにいふやう、「御身二人、かくひとつに生育つこと、過世よりの緣にやあらん。日來いひ聞かしつるごとく、久後はかならず夫婦とすべし。しからば半七は彼が孤なるを憐み、おさんは又わが夫なりとおもひて侮らず、互に睦まじうし給へ。」といひ諭すに、二人の童はよくそのこゝろを得て、あらそひ逆らふことなく、出居も諸共にして、外の童とは遊ばず。只一つの果を得ても、割きて二つにせざればたうべず。こゝをもて近鄰の人も、その故をしりて、「けに容姿の端正なると、心狀の怜悧しきと、何れ劣りも勝りもせず、こはよき一對

の夫婦なり。」と稱むる毎に、二人は顏を赧うして、物の陰に躲れけり。かくてその次の年の秋の頃、籌篠が左右の腕、俄頃に腫れて苦痛に堪へず、病みてより七日が間湯も水も咽喉に下らず、心持死ぬべく覺えしかば、枕方後方にありける、夫と二人の童を見かへり、さて半六にいへりけるは、「わが身此度の病著は、癒ゆべうもおほえ侍らず。つら〳〵來しかたを思ひつゞくるに、病みつきたりしは去年の秋、御身が米谷の楠を伐らんとて、蓼目の法を修しはじめ給ひたる日にて侍り。これやこの身に報いけん、左右の腕の疼めるは、一二の枝を斫りおとせし、祟りをわが身一つに稟けて、夫兒のうへに恙なくば、是れにます僥倖なし。しかはあれ、なからん後の心がゝりは、半七おさんが事ぞかし。願はくば籌篠が生きの中に、妹脊の緣を結ばして、儀式は整はずと、面のあたり杯さしてたびね。」といふ。半六聞きてうち點頭き、「楠の祟りならんと思へるは、究めて御身が惑ひなれど、半七におさんを妻はすることは仔細なし。しかれども、おさんはまだ十歳にだも足らず、半七もやゝ十一歳の童なれば、ゆくすゑ遙けき事なれど、御身が心やりともならば、そはともかくもすべし。折しもあれ今日は黃道吉日なり。目今彼等に杯させなば、おさんが父の亡魂も、よろこばしうこそ思ふらめ。しからば御身が命を延ぶる功德、是れにます事なし。」と應へて、俄頃に半七に袴著せ、おさんに衣被更へさして、籌篠が枕方ゝ左右に對ひ坐らし、焚婢に土器の用意さし、熨蚍に銚子とりそへて二人が閨にするゑたり。そのとき籌篠は、やゝ身を起してわが子とおさんをと見かう見、淚を潸然と落したるが、又莞爾とうち笑みて、「寔に似つかはしき夫婦なり。玉椿の八千代までも、昵みかたらひて、子孫夥儲け給ふべし。言あらためていふにしもあらねど、過ちにもせよいぬる秋、丹波都どのはわが夫の、斧をもて命を隕さしたれば、おさんが爲には寃家なれど、その過ちを償はんとて、貧しきときより養ひとり、今半七に妻はすれば、半六どのは丈翁なり、將養育の恩高きを省みて、等閑にな思ひ給ひそ。半七は亦義理ある妻といふを忘れず、久後いかなる事ありとも、生涯おさんを見捨て給ふな。かくいひしらするとも成長りて、思ひ忘るゝ事もありなん、互に忘れ忘られざる、誓ともなるべければ、今おさんが護身囊と、半七がとを交易へて、膚離さずば妹と夫の、誠を神も憐み給はめ。殊におさんは半七が、年歳とその名に象りし、十一月七日の誕生と、爹々の手づから寫し給へる、臍帶もその裏にあり。半七は又おさんが、名にし負ひたる三月の、しかも三日の誕生にて、わが書きつけたる臍帶は、護身囊に納れてあり。時にとりては是れも又、奇しくも故ありげなり。女の妒みごゝろなきは、百の拙きをかくすとぞ。貞女義男の故事は、賢き人の記しおける書見てもしり給へ。他し人に心を移して、母が遺言に悖るものは、不孝の子不義の婦なり。よく臍帶の臍をかためて思ひ悞ち給ふべからず。是れは是れ夫婦が上の誡めぞかし。おさんはまた三歳の時に、別れし母御ありと聞けば、神

佛に祈念して、ひかれよるべは三味線の、撥を割符に環會ひ親子の名告りし給へよ。半七も力を戮はして華洛へ上る序あらば、外ながら彼の人の、往方をより〳〵聞き定め、その夙願を果さし給へ。忠孝の道はいふも更なり、聞ゆべきは只是れのみ。命長くて諸共に、五十年忌の季までも、わがなき後を弔ひ給はば、草の原にていかばかり、うれしからめと思ふにも、名殘をしや。」とばかりに、掩ふに餘る恩愛の、涙に袖はそぼぬれて、項に掛けたる子どもらが、護身囊をとりかへさし、夫のかたへ會釋すれば、半六やがて土器を、おさんが側にさしつくる、三々九度の勸杯も、今ぞ戴く親の恩、半七も諸ともに、母の教訓身に入みて、涙に濁す味酒の三輪の苧環くりかへす、婚姻の式果てにけり。かくて後鶯篠は一言ものいふことなく、みづから臨終を待ちたるが、その嚥吞に、彌陀の寶號十扁ばかり唱へつゝ、卒然として綽斷れぬ。思ひ設けし事ながら、今更に淺ましくて、半六が愁傷はさらなり。半七おさんは、天に叫び地に倒れて哀しみ悼み、紅涙空しく枕を浸せり。さてもあるべきにあらざれば、半六は次の夜に、妻の送葬かたのごとく營むに、丹波都が一周忌もこの日に當るをもて、共に經誦まして、追薦の佛事を執り行ひ、よろづ寂寥しくぞ日をおくりぬ。

なら坂の佞人

待つとはなしに半六は、妻の忌果てしかば、舊のごとく出仕して、典膳が宿所に交加ひする事、はじめより親しかりけり。しかれども半七は、往に鶯篠が阻めて後は、奈良へゆくことなかりし程に、ある日典膳夫婦半六にいふやう、「何事の意に稱はざるやらん、久しく半七を見ず。わが子どもらも徒然がちなるに、曾太郎園花と諸共に、南圓堂へ參らして、遊山させばやと思ふなり。母のなき子は、衣服何くれの事も便なからめ。翌はかならず半七を將て來給へ。五七日こゝに留むるとも、何か苦しかるべき。」といふ。半六聞きて、「今にはじめず、かく懇切に聞え給ふ事親子が僥倖なり。亡妻はその性遠慮ある者なりければ、『稚きものの親しく參ること、罪得がましき所行なり。』とて、呼ばし給ふを固辭み候ひし。宣ふ由を聞えしらせんには、半七もさこそ歡び候はめ。近きに將て參り候べし。」とて、五條へ歸ると軈て、半七に緣由を物語りて、「奈良へゆけ。」といふ。半七は母の遺言を守りて、「出づるにも入るにも、おさんと諸共にせん。」と契りしかば、ひとり奈良へ行くことを歡ばず。おさんも又彼を放ちて遣ることを喜ばず。いたくいひ懲らせば、潸然と泣きしをれて、立ちもあがらざりける程に、半六ほと〳〵もてあまし、半七を曾太郎が武藝の師に入門さして、日毎に奈良へかよはし、それを假記に、典膳が方へ遣はしけり。かくてぞおさんも留むることを得ず、半七も推辭みがたくて、努めて奈良へ赴き、稽古果てて後、曾太郎に伴はれ典膳が家に日を暮す事も多かり。元來怜悧しき童なれば、あるじの夫婦その動止を見て、只顧に稱讃し、ある日典膳は妻の敷波にいふ樣、「女兒園花は

僅かに五歳なれど、女の童は大人めくも早ければ、孫はまづ彼よりぞ見るべき。然らば今より壻を擇みて、生涯を安らかに過ぐさせんは、親の慈悲なり。我日來半七が擧止を見るに、その才の長けたること、廣き奈良の藩中に、二人とあるべうも覺えず。彼が父半六は、新參にて五條一村の吏なれば、わが女兒を遣嫁すべきものならねど、かかる筋は期に及びて、ともかくもなりなん。人は得がたくて喪ひ易ければ、まづ半六に情由をしらせて、彼が回答を聞かばやとおもふなり。御身がこゝろいかにぞや。」と問ふに、敷浪しばし尋思して、「半七が事は、わが身もさおもはざるにあらねど、近屬人のいふを聞きはべるに、半六が妻世にありし時、それが姉の女兒とやらんを養育み、久後はわが子に妻はせんとて、假に婚姻の杯さへ、事濟ましたりとぞ。もしこの言實にて侍るならば、相語ひ給ふともかひなからん。よしや彼の人、御身が祿高くて、威權あるを羨み、異議なく承引く事ありとも、幼きよりいひなづけし、妹脊の中を引き裂きて、園花を遣嫁せんは、譏りを惹くの媒ならめ。よくよく思ひ廻らし給ひね。」と回答すれば、典膳聞きて冷咲ひ、「半七はなほ總角にてあるに、婚姻をとり締べるといふ事その謂れなし。こはとまれかくまれ、面のあたり半六に問ひてこそ。」といふ折しも、若黨何がし、外面より障子を細やかに押し開きて、「赤根氏の詣來給へり。」と告ぐるにぞ、典膳聞きもあへず、「それ此方へ。」といへば、若黨は障子を舊の如くにして退出で、敷浪も次の間に入りぬ。浩かる

處に、咳三つ四つして、半六は書院の緣頰傳ひに入り來りて、その安否を訊問ひ、扨いふやう、「このごろは、木の葉落しとやらん申して、師走よりも却つて寒けし。これをめさるべくは、某毛を引きて進らすべし。」といひかけて、携へ來れる袱包をうち開きつゝ、さし出すものを見れば、鴨一番を青き目籠に入れたり。典膳はその志の淺からざるを歡び聞え、ちかく爐のほとりに招きて、四表八表の話の序に、半七が怜悧しきを稱めていふやう、「我久後は女兒園花を半七に妻はせんと思ふ、心がまへありといへども、其許の内室世にありしとき、姪女とやらんにいひ名づけて、半七が妻と定めおきたる由、風聞あるをもて、深く望みを失へり、その事實言なりや。」と問ふ。半六はこれを聞きて、滿面に笑みを含み、「こは思ひもかけぬ事をうけたまはるものかな、新參の半六が兒子に、一の老臣の息女を、『妻はし給はん。』と宣はするは、それこそ實言ともきこえ候はねど、亡妻が姉の子の、孤なるを養育むこと、これは人となる後に、壻を招りて、その家を繼がすべきものなれば、半七が妻にはしがたし。しかるを彼等が年紀も似つかはしくて、諸共に生育つを見て、さる風聞をするものありとも、みな推量の說なれば、論ずるに足らず。」とて、誠しやかに陳ずれば、典膳忽地膝をすゝめ、「しかるときはこの婚緣整ふべし。さはいへこの事、今は人にしらしがたし。半七も齡二十を越え、園花が二八の春を迎ふるまではなほ遙けし。そのころには、其許も一等をすゝみ、半七も新たに仕へて、秩

祿父にまさせんとも、又親子もろともに、舊の柴賣になさんとも、わが心一つにあれば、よも僞りは宣はじ。いよ〳〵其許に異議なくば、けふは事のはじめなり、めでたく一獻酌むべし。」といふに、半六深く歡びて、「もしこの婚緣を破ることあらば、意の隨に罪なはし給へ、たえて恨みなし。」といふ。そのとき敷浪は、屛風の後より出でて半六に挨拶し、女兒が婚緣とゝのひて、歡ばしきよしを聞え、やがて彼の鴨を烹さし、なほ種々の殽を添へて、賓主三人酒もり遊び、終日相語ひ樂しみけり。かかりければ半六は、はからずも立身の便宜を得て、はや老臣にも昇進りたるこゝちしつ、遂に籌篠が遺言を用ゐず。慾には義をも誓をも打忘れて、ます〳〵典膳夫婦に媚び佞ひ、只願わが兒の成長るを待ちわびて、引きも伸ばさまほしきにつけても、つら〳〵と深念するに、由なき義理に絆されて、籌篠が臨終に、おさんを半七が妻と定めおきたれば、彼等童ごゝろにも、母の遺言なりとて、いと睦ましく物すなるに、年闌けてはいよゝ引き離すに便なからん。その時この故障によりて、蟻松氏の婚緣、いたづら事となることあらば、わが親子いかなるからきめ見んも量りがたし。しからば今よりともかくもして、密かにおさんを追ひ失ひ、後の患へを絶つにはしかじと、心一つに思ひ定めてしが、事は漏るゝに易しとて、かる〴〵しく手を動かさず、專らその便宜を窺ひぬ。こゝに亦、近曾奈良の大佛のほとりに、笠松平三といふ藥商人ありけり。この平三はもと浪速人にて、旅芝居の俳優を興行し、伊勢の古市、泉州堺、尾張の年魚知、美濃の稻葉山はさらなり、關防の山口、長門の下關、すべて都會繁華の地は、到らざる曲もなかりしが、去年の十月、五七人の俳優を將て、西國へ赴く折しも、難風にその船を覆され、俳優等みな大魚の腹に葬られたるに、その身は辛うじて、筑紫船に助け乘せられ、奇しくも活き殘れども、遺らぬものは行李路銀にて、忽地生活の本錢をうしなひ、いかにともせん術なさに、とかくして奈良まで立ち歸り、川上の南にかすけき旅宿を求め、日毎に大佛のほとりに出でて、あら筵布きまはし、皸龜皸の膏藥をひさぐ。その打扮いかにとなれば、前には首尾具足したる熊の皮を置いて、熊膏藥といふ三個の文字を、筆黑に寫したる、紙の幟をおし立て、枾染の頭巾を戴りて、丹田山木綿の古布子に、でんちうの袖なしをはおり、あるは貝に入れ、或は紙に押し舒べたる膏藥を處せきまでにならべおき、鳥獸の聲音を似せて、往來の老弱を集合へしかば、人みな彼を口順みて、熊の平三郎とぞ稱へける。折しもあれ赤根半六は、高天神のほとりに所用ありて、大佛の門前を過るに、件の平三いと暖氣なる日南方に座を卜め、彼此人に對ひて、高やかにいふやう、「世に皸皸の藥は夥あれど、僕が製するところは、見たまふ如く熊の脂に、家傳の藥種を煉りあはしたれば、衣服に附かず又痒觸せず。一たび用ゐる人は、一切腫物の根を斷ること、その功神のごとし。是れ則ち周の文王の夢に見給ひたるあら熊の脂をもつて、三國の名醫、華陀が製しはしめしを、羿と

いふ、人の妾、嫦娥が盗んで月の中に走るとき、宋人が川に出でて、布を洗ふに通をうしなひ、彼の人に傳授せしを、吳客がその法を百金に買ひとつて、軍に勝つたる妙藥なり。僕弱かりしとき獨夫なりしが、ある日山中にて異人より、この藥方を授かりしかば、世の助けともなれかしとて、此度人の薦むるにまかし、南都に出でて賣り弘むるものなり。この膏藥一貝を買ひ給ふ人あれば、鳥獸の聲をつかひわけて聞かしまゐらすべし。往昔より鹿笛・鶯笛などとて、笛をもてその音を似するは珍らかならず、凡そ鳥獸は、引く音曲る音、急促る音の三つありて、不正半濁の音なれば、かならずしも人間とおなじからず。彼の笛をもて似する如き、譬へば犬のわんと鳴き、鼠のちうと鳴き、熊のはんと鳴き、鹿のひいと鳴く、又烏のかあ〳〵、家鴨のぎやつ〳〵、總て急促るところに、隱々と響きある、眞の鳥獸に比ぶれば、笛の及ぶべきにあらず。よくその妙を得たるもの、唐山にては、孟嘗君が鷄鳴の客、日本にては、かくいふ平三只一人のみ。もしこの中に、犬の叔母さま、家鴨の姉御なども在さば、僕が申すところ、虛なりや實なりや、よくしりておはすべし。」といふに、立ちこみたる老弱咄と笑ひて、膏藥を買ふもあり買はざるもありて、おのがさま〳〵に別れ去りぬ。赤根半六は、嚮より人の後方に立在みて、竊かに平三に睛を著け、忽地に謀を生して、人の別れ散るを待ち、獵て平三を物陰に招きて聲を低うし、「言卒爾にはあれど、我は領主の家内にて、赤根何がしと呼ばるるものなり、今僕處にて、汝が面貌を見るに、世を遁り給ひしわが兄に、よく似たるのみならず、その聲音さへつゆ違はねば、不覺になき人のなつかしきぞかし。その膏藥は、殘りなく買ふべきに、汝われに伴はれて、一杯を酌まんや。」といひかけて、懷中の紙入より、金一兩をとり出し與へしかば、平三大いに歡びて、「こはは、からざる僥倖なり。乳子の陽虎に似、阿遲志貴の天稚日子に似、壹岐直眞根子が、武内宿禰に似たる故事は、俳優にもすることあれど、みな愛でたき祥にしもあらぬに、おのれかしこくもよき人に似て、立所に膏藥を賣り盡し、剩へ、『酒を賜はらん。』と宣はするを、爭でか推辭み候べき。誘給へ。」と應へしかば、半六歡びて直に布きちらしたる筵を卷きをさめさせ、諸共に酒店に到り、奥まりたる座敷に入りて對ひ居りぬ。且くありて、女の童二人銚子に杯とりそへて、殺よき程にもて來たり。そのとき半六は、女の童に對ひ、「けふは高天神の會日なるに、客も夥なれば、汝等酒も添へあへざるよ。物ほしくば掌を鳴らすべきに、とく行けかし。」といふに、女の童はふかくも推辭まず、「こゝろつきなきは、けふの事なれば恕し給ひね。」といひて、外のかたへ退出ぬ。かくて半六は、平三と酒酌みかはし、やゝ半酣に及べるとき、後方を見かへりつゝ密語きけるは、「嚮に汝をわが兄に似たりといひしは詭りにて、實は見るところありて、一大事を賴み聞えん爲に、こゝへ誘ひ來れるなり。まづこれを受け納め給へ。」とて、再び懷中より五兩の金をとり出し、杯に添へてと

らするを、はしなくもとらず、「一大事と宣はすれば、問はずとも猜したり。僕賤しき活業はすなれども、四十に至るまで惡に與せず人を傷らず。五兩の金は得がたけれど、命に換へて何かはせん、まづ緣由をしらし給へ。倘し行ふべき筋ならば、承引く事もあらんか。」と、いはせもあへず眼を睜り、小膝立てなほして、鞆に手をかけ、「やをれ平三、男子と見ていひかけたるを、『聞きて後に應へん。』とは、武士を武士とも思はぬ一言、弓矢八幡堪忍ならず。かく女々しき汝とはしらず、可惜脣を動かして、心見られしこそ安からね。觀念せよ。」と罵りつゝ、刀を閃かして砍らんとするを、銚子を以て拄ふれば、酒はこぼれて散亂し、わが身に係る一生懸命、かい潛り〳〵、刀尖丁と受け止めて、呵々と冷咲ひ、「命惜しければこそ輒くも與せね。助かるまじき命ならば、後の禍も患ふるに足らず、楚と賴まれ候べし。怒りを刀ともろ共に、をさめ給へ。」と反ね返し、騷がぬ男だましひに、半六やをら刀を引き、「天晴手練、わが眼は違はず、まづその金を納めて後、事審かに相語ふべし。とく〳〵。」といそがせば、平三金をとつて座中に擲ち、「財に絆されて與する者は、事の破るゝに及びて、物の用にたち難し。さる徒と思ひ給ふか。縱ひ金は給はらずと、見もしらぬ人に束道されて、半日の醉ひを塌せしから、その報いをせでは稱ふまじ。何にまれ心くまなく聞え給へ。」と諾ひしかば、半六ますます感激し、みづから金を拾ひ集め、赤銅鮪子に銀もて、柏染に太の字の紋つけたる割掃枝を、鄒の閼より拔き出し、扇を開きて、金と共にその上に載せ、「我全く賄をもて、其詐を誘ふにあらず。この二品は、當座に寸志を表するのみ、まげてこれ納め給へ。事成就せば、別に報いをすべし。」とて、丁寧にすゝむるにぞ、平三しぶ〳〵金と掃枝をとつて懷に挾めしかば、半六やゝこゝろ安堵て、額を合はし耳をとりかはしつゝ、閑談數刻に及び、遂に女の童を呼びて、酒を飾ぎ殽を添へさし、更に四五杯をかたぶけて、酒店を走り出で、やがて東西に別れけり。この日は夥の客、立ちかはり入りかはりせし程に、女の童もいそがしきに紛れて、彼の二人が密談を、聞くことたえてなかりしとぞ。

大柏の權輿

しかるにその次の日は、籥篠が百箇日の逮夜にてありしかば、赤根半六は、法師に經を誦まし、又親しき友どちを招きて、物食はせなどするに、日もくれ客も歸りにければ、半六は、半七とおさんにいふやう、「佐保までは四里にあまる路なるに、汝たちまだ稚ければ、一度も母の墓參をさせざりし。翌は卒哭忌にて、佛事結願の日なるに、皆うち揃ひて、願成寺今地の字へ詣づべし。つとめて起き給へ。」といへば、半七もおさんも、いとほいある氣色にて、その夜は持佛堂に香もりそへて、もろ共に廻向しつゝ、常よりは遲く臥したれど、まだ曉けやらぬころに起き出でて浴し髮を結はせ、用意既に整ひしかば、半六は一挺の轎に二人の童を乘して、奴隸等に舁かし、自ら轎に引きそうて、願成寺

へぞ詣でける。急ぐとすれど、冬の日の短きに、彼處に到りても是彼に時をうつし、かへる比及には日も西山に傾くにぞ、半六は轎夫どもが、杖する隙も待ちわびしとて、途より半七おさんを歩ませ、「右よ。」「左よ。」とて急がせば、二人の童は中々に、歩より歸るが氣もはるけしとて、岩屋谷の東なる、豐田の山本を過るに、天さへ結陰りて、今に暮れもしつべき樣なれば、足の運びも殊さらに進みて、九折なる山路を、あへぎ〳〵たどる折しも、一叢繁き枯尾花の、さら〳〵と戰ぐと見えし、その形犢の大きさしたる荒熊、忽然と跳り出で、矢庭におさんを引き銜へ、路を横ぎり驀直に、雄手の山へ走せてゆく。奴隷等はいふも更なり、半六大いに驚きて刀の鞘に手はかけたれど、左右なくは追ひ留めず、「あれよ〳〵。」といふ間に、熊も人も見えずなりしかば、半七奮然と笠を揉り、續いて山に登らんとするを、半六忙はしく引き留め、「やよ孩兒、氣色を變へて何地へゆくぞ。」と、問はれて父を佶と見返り、「そは宣ふまでもなし。看す〳〵おさんを猛獸に銜み去られ、何の面目ありて、五條へ歸り候べき。叶はぬまでも追つ蒐けて、讎を刺留めんとするの外他事なし。其所放ち給へ。」と回答へもあへず、ふり斷つて追はんとするを、半六は留めたる袖を放さず、「汝稚けれども、流石にわが兒なり。武士の家に生育つ者は、誰もかくこそあるべけれ。然れどもその身の力を量らずして、匹夫の勇に健るものを、世は野猪武者とて笑ふぞかし。よしや心は勇くとも、十一歳の小腕にて、彼の荒熊に蒐け刺はんは、薪を負うて火に逃づき、砲を拠きて淵に臨む、それよりもなほ危し。おさんが軍は惜しめども返らず、汝もろともに命を隕さば、父が哀傷はいかばかりとや思ふ。われさへかくてあるものを、何事も命運の係るところと思ひ諦め、けふはこの儘に立ち歸り、さて獦夫等に卷獵さして、おさんが讎を復すべし。あしかれとて留めんやは。親の諫めを用ゐざるは、大なる不孝なり。とくとく歸り給へ。」といふ。理に迫められて、半七は眼中に涙を含み、山を向上げて嘆息し、ぜひなく思ひ留まりけり。かくて赤根半六は、わが子を將て五條へ立ち歸り、その夜の中に令れしらして、夥の獦夫を催し、次の日より、豐田岩屋谷の山々を卷獵さするに、一元來この處は、高峯にもあらねば、熊などの出であるく事、絶えて聞きも及ばず。」とて、獦夫等は不審しみながら、七日あまり獵りくらしたれど、終に本意遂げずして已みぬ。半七は又おさんが爲に熊を殺して、怨みを雪めざる事を、いと遺憾く思ひて、只管彼が不幸を悼み、その日を亡日と定めて、母の位牌と共に、旦夕香花を手向くるを、身の務めとせしほどに、父の半六大いに諫めて、「稚きものには似げなくも、忌々しき念佛三昧かな。よしやいかに悼むとも、死したるものの歸るにあらず、努思ひたえ給へ。」といふ。半七は父の仰せに悖らん事を怕れて、その後は只しのび〳〵に看經し、樂しからずぞ日をおくりぬ。是れはさておき、おさんはかの日、豐田なる山本にて、荒熊に含み去られ、山に入ること十町餘り、更に活きたる

心持はせねど、今はかうと思ひしかば、なか〳〵に泣きも叫ばず、心の中に神佛を念じつゝ、彼がまにまに引かれゆけば、熊は山ふかく入りて、おさんをやをら扛きおろしたるが、直に啖らはんともせず、忽地人の如く立つて、まづ後方を見かへるにぞ、おさんはいよゝ驚き怪しみながら、逃ぐとも脫さじと思ひて、わろびれもせずうち瞻り居るに、彼の熊人の語るが如く、「いかに小女さぞな怕ろしかりけん。」といひかけて、みづから胸の邊より、その皮を引きめくりて、くる〳〵と卷くを見れば、年の齡四十あまりなる大男が熊の打扮したるなりけり。尋常の女の童なりせば、男々しき擧止は得すまじきに、おさんはこの形勢を見て打ちも驚かず、「さては熊かと思ひつるに、獸にも劣りたる、盜賊にてありつるよ。汝わらはを奪ひ去りしは、花街などへ賣らん爲か、縱ひ元を喪はるゝとも、穢れたる隊に入るべきかは、殺さばはやく殺せ。」といふ。その氣色從容として、死をだもおそれぬ健氣さに、彼の男は舌を卷いて不覺に感嘆し、「世に怜悧しき女子はあれど、未だ御身がごときを見ず。われは偷兒杜騙にもあらず、又人肉經紀にもあらず、人にたのまれて、かくは圖りつるなり。」といふ。おさん聞きて、「こはこゝろも得ぬ、汝わが衣を引剝ぎせず、また花街へ賣らんともせずは、伴ふともそのかひなからん。そも何人に賴まれたる、その名をしらせよ。」といへば、大男うち點頭きつゝ、短刀に著けたる割搦枝をとり出し、「小女搦れを認れりや。」と問ふに、おさんなほ不審しみながら、手にとりて熟視れば赤銅鍍子に銀もて、柁の葉に犬の字の紋あるは、まがふべくもあらぬ、養父半六どのの搦枝なり。「汝いかにしてこれを持てる。さればわらはが猜せしに違はず、盜賊ならでなぞや。」といへば、「否その搦枝のぬし、『密かに御身を殺せ。』とて、我を相語ひ、嚮のごとく計らはしたり。かくのみにてはなほ疑ひ思ふべし、その故は如此々々なり、箇樣々々なり。」とて、奈良にて半六に酒を強ひられ、金と搦枝を得たる事、また、『おさんを家に養育みては、半六親子が仇となるべき情由あれば、密かに殺せ。』とて賴まれしこと、首尾を說きしらし、「わが身は笠松平三と呼ばれて、賤しき活業はすれど、不義の黃金にこゝち惑ひて、人を殺すものならず。しかはあれ、『承引かずば、その座を去らせじ。』と責む。實に思ひ定めたる氣色なれば、已む事を得ず領掌し、一旦しか計るといへども、いかにもしてその小女子を、助けん物をと深念しつ、事こゝに至りしが、いま御身の擧止を見るに、壯士もおよびがたし。よりてます〳〵彼の人の奸惡を推量り、さらに御身のいとほしくて、情なくも棄つるに忍びず。もし一身をうち任せんとならば、直に華洛へ將て上り、ともかくもして養育むべし、御身がこゝろいかにぞや。」といふ。おさんは緣故を聞きて、はじめてよゝと聲を立て、涙あやなき袖の間より、はふり落つるをかき拭ひ、「わが身いかなれば、過世の惡業ふかくして、母には三歲の年に別れ、父は非命に世を去り給ひ、生みの母とも賴みてし、その人も身まかりて、今は一人の養父の、老

いゆき給ふ後までも反哺の孝を盡さんと、思ふかひなく思ひきや、殺さんとまでに憎まるゝ、何過ちのあら熊に、たばかりとらし給はんとは、よしや御身のこゝろもて、命は助けらるゝとも、わが身ありては養父のみか、半七どのの爲ならずと、聞きては五條へ歸り難し。よるべなき身を憐みて、養ひとりて給はらば、千辛萬苦の世を經るとも、親とし仕へて再生の、恩みは仇に思ひ侍らじ。まだ九歳の女の童が、ませたりと聞き給はんが、わが身にも又情愿ありて、齡盛りになるとても、遊女妾はいふも更なり、人の妻とはなり難し。こは深き故ありて、命の惜しきもその爲なれば、詳しうは後に申さめ。この一條だに承引き給はば、賤しき活業に世を渡るとも、推辭み侍らじ。」と囘答へしかば、平三ますゝ嗟嘆して、「われ色をしも好まねば、年は四十に餘れども、妻を娶らず同胞も、なきにつけては折ふしの、病みわづらひに老後の事、思へば心ぼそかりしに、天この小女を賜はる事、はからざる幸福なり。心安かれ、富貴の家より、緣むすばんといはするとも、御身が情愿は破るまじ。日もはや暮るゝに、とく〳〵。」とて、やをらおさんを背負ひつゝ、夜に紛れて山を走せ下り、直に華洛へ上りて、半六が與へたる、五六兩の金を本錢とし、些の活業に年月をおりくぬ。こゝに于て、おさんは、父丹波都が事、母の事、半六簫條がこと、又如此々々の故によつて、いと夙くより半七と妹脊の緣を締びしこと、一番かに物がたれば、平三はその至孝と、貞操の凡ならざるを感激し、且その薄命を憐み、いかにもして彼が母に環會はせんとて、折々その往方を索ねしとぞ。このころ華洛に、笠屋夏といふ舞妓ありけり。もと是れ白拍子の流れにて、世に舞々と稱ふ。はじめ越前の幸稚が子弟、華洛にのぼりて俳優をなせしより、今の夏に至つて專ら行はる。彼の幸稚は桃井直常の子孫なりといふ。舞の詞は、戰場の故事、世々の景迹、戀慕の癡情を述べて、その音曲三十番あり。是をもて管領執事と雖も、酒宴の席には必ず彼の夏を招き給ひしほどに、その家自ら衣食に富みぬ。又平三は、年來旅芝居を掙了たれば、夏が家に疎からず。さるによつて、おさんを彼が弟子として舞々を習はするに、僅か四五年にして、その技を極めたるが、顏色の艶妖なるを猖みては、月も忽地雲に隱れ、容姿の匂やかなるにけおされては、花も羞ぢらふ風情なれば、人皆頻りに稱讃して、その舞さへ、「却つて夏にも勝れり。」といふ。さる程に平三は、おさんが二八の春の頃より、彼を舞々にしたてて、夏が家號を冒らし、世に勝るゝといふ心にて、笠屋三勝と名づけ、洛東祇園の社頭に于て、女樂を興行したりしかば、見物の老弱雲の如く集まり、霧の如く立ちこめて、その繁昌、昔貞和五年の六月に、足利尊氏卿、四條河原に棧敷を構へて、田樂を觀せしも、かくやと覺えて夥し。是をもて、三勝が舞の手に、都鄙の人を招きよして、その名高く聞え、牛打つ童も口順みて、これを見ざらん者は、人も蔑り我も恥かはしく思ひけるとぞ。三勝は世の人に面を見らるゝ事、いと淺ましくはあれど、父丹波

都が臨終に、執拗くも聞えおきし、彼の三味線の因果にて、今舞々となるならば、割符の撥も徒らならで、母にあふべき便ともなりもやせんと、見物の老女には睛を著くれど、それかと思ふ人もなく、加旃大和にて、一たび夫と定めてし、半七がこと懐かしく、華洛へ上り給ふとも、互に年長け稚貌うせ、見忘れやし給はん。もし名告りあふ導にもと、半七が家の紋なる、柏の葉の大の字を、舞の衣裳に縫はせしかば、世の人更に渾名して、大柏と呼びしより、後世舞々の名目となりて、幸稚大柏の二流に分る。大柏の事雍州府志に見ゆ。今大頭と稱ふるは大柏の訛りならんか。この大柏の打扮は、頭に天冠を戴きて、身に狩衣を被、腰には一振の太刀を佩びて大口の袴を穿き、大小の鼓にあはして舞蹈せり。凡そ俳優に、傀儡、田樂、刀玉、雲舞、連飛、輪脫、緒小桶、比丘尼等、種類おほしと雖も、今の歌舞伎は舞々より出でて、歌舞伎の名は却つて古し。文獻通考假婦伎に作。かくてぞ平三は、昔には立ちまさりて、世を安らかに渡る程に、只三勝をわが家の瑤錢樹と鍾愛して、自ら舞の衣裳を脊負ひその履をとつて、主君の如くに管待すを、三勝はわりなく止めて、「こは勿體なくも侍るかな。かかる所爲をして、わが身を笑はし給ひそ。」と、屢諫むれどもなほ聽かず、益他事なく冊きけり。

三七全傳南柯夢卷之二　終

三七全傳南柯夢　卷之三

東都　曲亭馬琴編次

臥房の胡越

光陰矢のごとく、又梭のごとく、秋去り春來つて、蟻松典膳が女兒園花は、既に十五歳にぞなれりける。父の典膳は、豫てより赤根半六が一子半七を、女壻にすべき準備あるをもて、主君續井順昭へ、をり〳〵彼の親子が事を吹擧し、ある日又申すやう、「半六五條の村主を承つてより、多年露ばかりも私なし。加之兒子半七は、文武の才藝人に超えたり。僕日來その擧動を見るに、近習に召使はれて、然るべきものか。夫れ俊德を明らかにして、能を擧げ、不能を矜み給ふは君のこゝろにあり。しかれども長流船横たはつて、渡すものなくば、夜光も又燕石に劣りなん。賢を薦むるは愚臣が微忠なり。用ゐると用ゐ給はざるとは、尊慮にまかさるべうもや。」と、言語を竭して聞えあげしかば、順昭これを諾ひて、すなはち半六に五條の縣守を兼ねさし、新たに半七を召し出して、嫡子吉稚丸の近習にぞ召使はれける。典膳贔屓の沙汰をもつて、彼の親子を汲引すといへども、半七が心ざま

怜悧しくて、忠孝拔羣なる事は違はず。その爲體を見て、老臣もこれが爲に羞ぢ、主君もこれに對して容を改むること多かり。さるによつて半七は、いく程もなく近臣の上にすゝみて、職祿忽地父に超えたり。「續井の家隸多かる中に、文武の道に心を委ね忠信無二なるものは、厚倉二郎太夫友春と赤根半七とのみ、たえて肩を比ぶる人なし。然るに半七は、今玆やうやく二十歳なり。その年紀をもて論ずるときは、厚倉にも勝れり。」とて、心あるもの、これを稱讃ざるはなかりしとぞ。かくてその年の終りに、蟻松赤根の兩臣、その子の婚緣を、主君へ願ひ奉り、明春園花を嫁らして、秦晉の好みを締ばんとて、假に媒妁の男をこしらへ、迭にその用意をなんいたしける。そのとき半六は、わが子を近く招きていふやう。「蟻松氏はわが親子には恩人なり。既にその蔭を蒙ること久し。倘し彼の人の吹擧によらずば、われも御身も山兒にて朽ち果てなん。それさへ忝きに此度最愛の女兒をもて、御身に妻はせんと宣はするなり。今日は殊さらに吉日なれば、雙方の願書を上るにこそ、この由を聞えしらせんとて呼びぬ。歡び給へかし。」といふ。半七聞きてしばし父の顏をうち瞻り、「仰せには候へども、某むかし母の遺言によつて、おさんと婚緣を結びしかど、彼不幸にして猛獸に銜み去らる。しかりといへども、今に活けるや死せりやしらず、萬に一つも彼の女子、恙なくて世にあらば、母の遺言に悖るのみならず、彼に對して不義なり不信なり。男子三十にして室ありといへば、妻を娶る事いまだ遲からず。よく〳〵思ひめぐらして後に回答し奉るべきにこそ。」と、いひも果てざるに、半六たちまち氣色變つてみえたるが、また思ひかへしけん、呵々とうち笑ひ、「御身がいふ所理あるに似たれど、そは甚だ迂遠し。今に于て、おさんがこゝにあるをさしおきて、この婚緣を結ばば不義なり。いかにせん、彼荒熊にとられ、その屍を索ね得ずといへども、はや八九年音耗なし。枯れたる朶に花は開くとも、それが存命へて歸り來ん日は、ありともおぼえず。さるを假初の義理に襁がれ、一女子の爲に子孫の後榮をおもはざるは愚かなり。且上れる世には、人究めて命長し、このゆゑに三十にして娶るとも遲からず。降れる世はしからず、人生五十年、七十は稀なり、はやくより子を生ませざれば、父母衰老して、その子を敎ふるに心ゆかず、御身學問したれば、和漢の故實はしりぬべし。然れどもそは杓子定規なり。わが子あしかれとて、かくいはんや、おさん憎しとて、この婚緣を結ばせんや。自ら思慮して、惑ひをとり給ひそ。」といふに、半七は猶頭を低れ、袴の間に手をさし入れ、默然として居たりしが、且くしていふやう、「御慈しみのふかきことは、わきまへて候へど、信義の係るところ、いかにともすべなし。公事にあらずして、櫂ひある家に入るは、士たるものの恥なり。況して一の宿老の壻となりて、肩を聳やかさんは嗚呼がまし。人の貧富は天なり命なり、よしや生涯薪を樵りて世をわたるとも、心淸くば、朱買臣にも恥づべからず。死灰の人に愛せられんは、愛せら

れざるにしかず、銅臭を羨みて好みを締ぶは、禍の端なり。まけて今しばし待たせ給へ。」といふを半六聞きもあへず、大いに急きて聲をふり立て、「やをれ半七、汝賢しらだちて、しば〳〵わが旨に悖る。母の遺言のみを重んじて、父を否し、さゝやかなる義理に羈がれて、親に愛を失へとは、何れの書に記してかある。われ一旦蟻松氏に約諾して、この婚緣を定めたるに、今忽地にこれを破らば、彼の人豈たゞに止まんや。それこそ大いなる禍の端なれ。所詮彼の人に憎まれては、わが親子は活き難し、是非に及ばず。」といきまきて、面色赧くなり又蒼くなり、猛に刀を引提げつゝ、外面へ走り出でんとするを、半七忙はしく臂を伸ばして、袴の裙を引き留め、「おん憤りの甚しきも、家の爲をおぼすことなれば、あしう聞き奉るにあらず。三たび諫めて聽かざれば、號哭して從へといふ本文あり。此の上は御意の隨にてありなん。固辭み候はじ、固辭み候はじ。」と申すにぞ、半六漸く氣色を和げ、「聞きわきたらば仔細に及ばず、わが家の幸福これにます事なし。汝日來の怜悧しきに似ず、かゝる許りの事に思ひ惑ひしは、年の弱き故にこそ。いよ〳〵婚姻整ひなば、夫婦睦まじく、舅姑に愛せられ、立身の階梯を蹈みな放ちそ。」といふに、半七は畏みて、「仰せ承り候ひぬ。御心安かるべし。」と應へしかば、父は大いに歡んで、やがてこの日願書をもつて、半七が婚緣の事を聞えあげし程に、その年の終りに、雙方故なく主君の許しを稟け、婚姻は正月の中旬と定めて、まづ聘禮をとりかはしぬ。さるからに半六は、屋根を葺き更へさし壁を塗らし、席薦の面を新たにさし、紙窗を貼りかへなどするに、いとゞ短き冬の日を、心いそしく暮しけり。又蟻松が家には、園花が衣服調度の儲けに黄金を費し、すべて美を盡さずといふ事なし。是彼に冬も果てて、新玉の年の始めになりにければ、典膳夫婦は、わが子の爲に黄道吉日を卜して、既に婚姻の日にもなりぬ。園花やゝ大轎に駕らんとするとき、敷浪は女兒にいふやう、「婦は三界に家なし、百年の苦しみも又樂しみも、みな他人に任する身なれば、只柔順かにして妬みなきを、恒のこゝろとせよとは、物の本見てもしり給ひつらん。さればいとけなき時は父母に從ひ、成長りては夫に從ひ、老いては子に從ふなる、この三從はいふも更なり、五つの障りもありといへば、ひとりの女兒と愛やかせし、親の權威を笠に被て、夫に倦かれ給ふなよ。一とたび夫の家を出でては、覆水盆にかへり難し。他し心を愼みて、誠をつくして齊眉き給へ。やよやよ。」と教へ諭せば、園花はしば〳〵應へて、さていふやう、「稚きより汝が夫ぞと、聞えしらし給ひしが、ふりわき髪も肩過ぎて、かくまゐり齊眉くものを、なでふ等閑に侍るべき。よしや身の愚かなるより疎まるゝとも、生きて彼處を出でんとは、思ひ侍らず。」といふに、敷浪はさもこそと、うち點頭きつゝ目送りけり。かくて園花五條に赴き、婚姻障ることもなく整ひつ、洞房花燭の景迹は、くだくだしさに、こゝには省きていはず。園花は稚きより、見もし見られもして、生ごゝろつきしより、

この人ならではと、こゝろに誓ひし婦夫なるに、年紀は二八の春にして、容止いと艶妖に、心態いと怜悧しかりき。又半七は今玆二十一歳にして、顔色の端麗なる事は梨花の雪をも欺くべく、文武に宏才なる事は、竹林の隊にも入るべし。「往古より佳人は才子に因み難く、駿馬は伯樂に遇ひがたし、かかる夫婦は、實に天緣なめり。」とて、或は羨み、或は妒しと思ふものも多かり。赤根が家には、歸寧舅入の吉席に日數經て、夫婦ます〳〵睦ましく見えしかば、典膳も敷浪も、「よき壻を擇み得たり。」とて、歡ぶこと限りなく、敷浪はをり〳〵五條へゆくを、身の樂しみといたしける。世の中の親ごゝろ、なべてかくこそあらめ。しかるに半七は、父の命に悖り難くて、此度婚姻はなしたれど、おさんが生死を聞き定めずは、縱ひ夥の年は經るとも、他し女子には志を移さじと、思ひてし事なれば、園花を娶りてもたえて一夕も、ひとつに睡らず。さればとて又強面き氣色は見せずして、晝は殊さらに他事なく相語ひ、坐するときは、席を隔てず、食するときは折布をならべ、いと睦ましく見ゆる程に、半六はこの形勢におちゐて、潛かによろこび、わが子はじめの言語には似ず、園花と昵み語らふ事、かくのごとくなれば、わが家の幸福このうへあらじとて、いよゝ蟻松に侯媚ひ、わが子の新婦を管待すること、只賓客の如くせり。されば園花が兄曾太郎も、をり〳〵奈良より來りて、半七と交參らふこと、ます〳〵厚かりしかば、藩中の諸士、赤根親子を悔るものなく、却つて阿り諛ふにぞ、半七はいと心うきことに思ひける。さる程に園花は、こゝろに足らざる所あれば、靴を隔てて癢きを搔くがごとく、又啞子の苦きを舐るがごとくに思ひ迫れど、いひもしらさず。夜はいたづらに山鷄の尾上の月と在明けて對なき枕を恨みつゝ、春もやゝ暮れゆきて、四月にもなりにけり。この頃は、日の長き限りなれば、ある日敷浪は、奴婢を將て、步より五條に到りつ、赤根が家に音なはするに、半六は奈良へ出仕して、半七は園花と共に、小座敷に居るよしを、焚婢がまうせしかば、敷浪は從者を出居の方に待たし、案内もさせず、只ひとり、半ば開けはなちたる亮隔を、二隔ばかり越えてゆくに、女兒も壻もこれをばしらで、半七は紙窗の下に、物の本を閲して見かへりもせず。園花はそのほとりに侍りて、何やらんものいひたけなれば、わかき夫婦のさし對ひ居るを、うち驚かさんは、心つたなき所爲なりと思ひて、立ちも入らず。なほ亮隔の陰に立在みて、扇を半ば押しひらき、胸のあたりをうち扇ぎ、をり〳〵彼處を闚窺みたり。園花は半七に、ものいふよすがやなかりけん、たてて出す茶の茶杓にも、水漏らすまじと思へども、心おかるゝ夫に對ひ、「世の人は物に參り、遊山して日を暮す頃なるに、物の本のみ見給はば、御身の爲にあしかりなん。わらはがをさなき手まへなれど、これきこしめされずや、少しは心はるけくもなり給はめ。」といひかけて、さし出す茶椀を、半七はやをら手に稟けて喫みをはり、「けふは終日の休暇なれば心ゆりせられて、不圖見かゝりたる草紙の捨て難くて、

日の闌くるをしらざりし。われよりは御身こそ、うち守り居て倦みもし給ひけめ。」と回答するに、園花は、なほいはんとしていひも出でず、膝のあたりに手習うて、すみつきながらまだしらぬ、閨の留奇南の移香を、とめてほしさのわが袖へ、赧らむ顏を押しあてて、芽出し楓のはづかはしさを、やうやくに思ひ堪へ、「何事の御こゝろに、稱はぬとも得わきまへぬ。身の愚かさに人をうらむかと、おほさんはなほ鈍ましけれど、わが身こゝに參りて春も過ぎ、はや百日になり侍れど、眞の情を見せ給はず。さりとては又一とすぢに強顏くも聞え給はで、活けみ殺しみし給ふは、罵り打たるゝより苦しく侍り。夫婦の緣は出雲にて、神の結ばせ給ふとぞ、心がらにてあふみなる、筑摩の鍋のかず〳〵に、むすびも果てぬ緣はありとも、吉備の中山なか〳〵に、あぢ潟の海の鯛ならで、浮きたる戀はいさしらず、眞女兩夫に見えずと、稚きよりいひ諭され、亦稚きより親と親とが、こゝろに許せし婦夫とは人さへしりて侍るなる。心つきなき事あらば、打ちも懲らしもし給はば、かくまで物は思ひ侍らじ。推辭み難くて娶り給へど、豫てながむるます花の、某に道をかへじとて、出てゆけがしの人めのみ、愛々しけに見せ給ふか、妬しと思へど恨みわぶ、よすがも獨り泣く許り、目睡みもせぬ枕には、涙のかゝらぬ夜間もなし。思ひほそりて他野の、露と消ぬとも一言の、怨みはいはじとたしなみても、女子ごゝろの淺はかにも、深き欺きのやるかたなさを、憐れとは見給はずや。心づよし。」とばかりに、一聲よゝと泣き沉めば、半七聞きて歎息し、「緣故を聞えねば、恨み給ふも理なり。われ婚姻のその夜より、枕席を共にせざるは、御身いとほしと思へばなり。さら〳〵忌み嫌ふにあらず。その事とくにもしらせまほしく思ひしかど、明白に告ぐる時は、親の非を擧ぐるに似たり。とせんかくせんと、躊躇ひて默止したる、心苦しさは御身より、この半七こそ勝るべけれ、今は匿むに匿み難し。思ふ程を聞ゆとも、かならずしも、洩らし給ふな。抑われ稚きときに、結髮の女子あり。母の末期に婦と夫の杯さへさし給ひにき。それより先、わが父の悞ちにて、彼に親を失はしぬ。このとき孤を養育みて、成長るのち半七に娶はし身の罪を贖はんと、誓ひ給ひしこともあり。始めをいへば如此々々なり、終りを語れば箇樣々々」と、その條の事は、すべて審かに說きしらし、扨いふやう、「この故に、われ此度の婚緣を、ふたゝび推辭みしかど、父は又『蟻松氏の庇みに絆され、更に豫ての約束を違へじ。』とて逼り給へば、父の命にも叛き難く、又彼の女子が恩義棄てがたし。件の女子は九歲のとき、荒熊に銜み去られて、存亡定かならずとも、こゝに至つて年來の志を轉さんは不義なり。所詮こゝろよく、御身を娶りて、父の心を安くし、夫婦の名のみにて、枕席をともにせずば、御身かならず父母に告げて奈良へ歸り給ふべし。一旦わが妻となるとも、なほ原の未通女なるときは、御身に損なし。瑕なき珠に疵を著けず、かへさんものと思ふをもて、さて強顏くはありけるなり。浮

世の義理の紲には、終に結びも更へ難き、緣と思ひ諦らめて、我から奈良へ歸りてたべ。一日こゝにあらせては、わが心一日安からず、飽きもあかれもせぬ人を、離別さするが信ぞかし。一生添はうと思はずば、人の妻とはなり給はじ。誑られきと思はれんも、いと面なき所行なれど、聞きわき給へ。」といふ聲も、外へ洩らさじ聞かせじと、近う寄るほど園花は、背向に退きて輾轉び、「緣故をしらし給ふに、いかでかあしう聞き侍らん。宣ふ事はことゞくに、理ならぬよしもなし。わが身ありては御心の安からぬと宣はすれば、秋にもあはで憂き鹿の、奈良へ歸らんと思へども、『死なずば夫の家を出でじ。』と母にいひつる言の葉の、露もまだ乾ぬその間に、我から飽いて歸りしと、いはれうものかいひもせじ。我より先に結髮けし、人の生死をしるまでは、他し妻は娶るとも、一つ枕には睡らじと、誓ひ給ひしその信を、半ばわが身に稟くるならば、妾側室で果つるとも、嘸な喜しく侍りなん。そを羨ましと思ふほど、おき所なきはこの身なり。情ぞかし、慈悲ぞかし。襟の裾、幮の外、せめて後方に夜を明さし、人めばかりは妻と呼び、夫といはせて給はれかし。心はけふより尼法師、そるべきものを梓弓、そるまで宿の案山子ぞと、鬱し給ひね。」と、いひかけて泣く女兒より、泣かじと袖を嚙み締むる、亮隔越しに敷浪が、苦しき義理と恩愛に、壻と女兒が誠心を、聞いて忍ぶに忍ばれず、一聲洩らす咳に、氣色する人ありと見て、半七も園花も、猛に形を改むれど、落つる涙と泣顔を、紛らすすべはなかりけり。

華洛の僑居

浩かるところに、あるじ半六、奈良より退き來て、出居の方なる伊豫簾を揭げ、「こは園花が母君、いつの程にか訪はせ給ひし。半七はなどて、出でも迎へざる。」といふに、敷浪は氣色を見せじと含笑みて、「いな、わが身も只今參りしかば、壻も女兒もいまだしらず。妾が參るは常の事なり。うち捨ておきて休足したまへ。」といふ。是彼の聲を洩れ聞きて、夫婦はいそしく走り來つ、わりなく奥に誘引ふにぞ、みなもろとも一室に入りて、賓主の座をわかち、寒暖を述べ安否を問ふに、焚婢茶をもて來て敷浪にすゝめ、又主に進らせたり。そのとき半六は、わが子に對ひ、「今日猛の仰せ事あり。『汝をも召さるべけれど、頓の事なれば、おのれにいへ。』と宣はせしをもて、走り歸りぬ。豫てしれるごとく、郎君吉稚丸は、質弱多病にましますなれば、はや十八九歲になり給へども、童だちにて、おはするなるべし。しかるに近曾、癆症めきたる氣色にて、旦暮籠りがちに坐すなるに、醫療もいまだ驗を見せず。よりて老臣談合し、『かかる煩ひには、繁花の地に出し進らせて、こゝろの隨に物見遊山さし進らせなば、その功、鍼灸藥餌に勝るべし。』と聞えあげしかば、大殿諾ひ給ひて、『さらば潛びやかに洛へ上せよ。』とて、猛にその用意あり。然れども、『從者夥召俱し給はば、人にしらるゝ事もや。』とて

これらをばいと寐し、近臣只三人と定められ、その徒には、今市全八郎、布施蝶九郎と、今一人は半七なり。『老いたる方には心をおかれんか。』とて、物馴れたる壯佼のみを擇まれたれば、『よろづにこころを用ゐ守り傅き奉れ。』との仰せなるぞ。」と、聞えしらすれば、半七は頭を低げ、唯々として命を稟く。半六又敷浪に對ひて、「聞かせ給ふが如くなれば、早くとも半七は、この秋の末までは洛にあるべし。姑さへなきわが家に、弱き女子をひとり在らせんはいと心ぐるし、母御のこゝに來ませしこそ幸ひなれ。けふよりは園花を奈良へ伴ひて、半七が歸るまで、預りてたびてんや。」といふ。敷浪は今ほのかに聞きたる事もあれば、こは便なしと思へども、女兒をこゝにあらせては、いよゝ心もとなければ、すなはち應へしていふやう、「宣ふところ、わらはがおもふにおなじ。されどけふ將て歸らんは、なほ早し。半七が鹿島立を目送らして、奈良へ伴ふべし。園花、さは思はぬか。」といひかけて見かへれば、女兒はとかうの應へもせず、いよゝ懶き氣色なり。かくて四五日ののち、吉稚華洛へ啓行ち給へば、半七は園花に別れを告げ、父と舅姑に身の暇をまうしつ、同僚布施今市等諸共に、主君の轎に引きそうて、若葉かきわき立ち出でたり。時は四月の中旬にて、星まばらなる黎明に、雲間を過ぐる杜鵑、歸るにしかじと鳴くといへば、園花が身に思ひあはして、名殘をしさと本意なさに、血を吐くばかり歎きせり。さる程に、敷浪は緣由を典膳に告げ、女兒を奈良へ迎へとりしが、いぬる日竊聞きして、半七が義を守る緣故、夫婦が問答を審かにしりて、驚き憂へ、一とたびはその志の移らざるに感激し、又一とたびは、半六がかかる事をばふかく匿みて、年來さまゞにいひこしらへ、これが爲に、わが女兒の一生を悞てりとおもふに、腹だたしさもいやませしが、威勢もて迫るとも、心ゆかぬものは男女の中なるに、愁ひにいひでて、女兒が久後あしかりぬべきかとて、夫にも聞えしらせず、園花にも問はで、同じ歎きにふし柴の、しばゝ嘆息したりける。かかりし程に園花は、あぢきなしともいへばえに、いはでぞいとゞ身を焦す、澤の螢もすがれゆく、六月の頃より、「心持あし。」とて打臥したり。さればとて終日臥すにもあらず。父母はこれが爲に、藥何くれの事、さまゞ心を竭せども、想ひより病み患へば、醫師もせん術なく、後には常の事となりて、一日は起き、一日は臥し、顏の細りも日にそひぬ。是れは扨おき半七は、郎君を守り傅きて、洛に上り、洛東祇園の社頭なる、人の別業を購ひ得て、爰に僑居さし進らせ、續井家の郎君なる事は更なり、近臣の名さへ隱して、何某彼某と稱へしかば、日來大和へ交加ひする商人すら、これをしる者なかりけり。かくて吉稚は三人の近臣を將て、下郎に轎を扛らし、割籠をもたし、洛中洛外の神社佛閣、名所古蹟を遊覽し、心はれやかに日を送る程に、病怠り果て、心持清々しくなりて、生平よりも健かなり、又奈良よりは、日に〳〵飛脚到來して起居を尋問す。そのたび〳〵に園花は、病を推して書翰かい寫

め、果子乾鮎やうのものを、半七に贈り、又敷浪も、女兒が書翰に卷きそへて消息し、衣服何くれの事、爹々にまうさずと、直にこなたへ聞え來し給へ、洛は鄰の國なれど、旅としなれば自在ならざる事おほかるべし。何頃か歸り給はん。女兒は日數のみ倦へつゝ、そなたの空を瞻望め暮し侍るなど、いと丁寧にいはせしかば、半七も西陣の織物、城殿の扇などを贈り遣はして、これが報いとす。是れより先、厚倉二郎太夫と、典膳が兒子蟻松曾太郎と、互代りに洛に入りて、吉稚の安否を問ひ、又所用を承りて歸りしが、吉稚病癒えての後は、よろづを半七にうち任して、詣來ることも稀なるに、半七は七月の中旬に至りて、猛に寒熱し、假初に病み臥したるが、遂に瘧疾となりて、日を經れども起き得ず。いく間もあらぬ僑居に、主君の邊近く病み臥してあらんは、畏しとおもひて、今市布施に相語ひ、吉稚に聞えあげて、別に五條わたりなる小家を借りて、その身は一人の奴隷を倶し、其處に引き移りて保養す。そのとき今市布施等、吉稚に密語きまうすやう、「半七が病み煩ふよしを、奈良へ告げしらせなば、老臣等心もとなしとて、別人をもて、彼に代らするなるべし。その人もし君の御こころに、稱はぬものどもにてあらば、この風景を殺し候はんか。瘧病は、大かた三七日を限りに愈ゆるといへば、且くこの事を、奈良へしらせ給はでも、某等二人かくてあれば、何の障りか候べき。」と、信だちて申すにぞ、吉稚聞きて、しかなりとし、終にその事を奈良へいはせず、半七にもこのよし、こゝろを得さするに、これも又、いく日もあらで愈ゆべきに、告げずして、父にも妻子にも、物を思はせぬにしかじとて、等閑にしていひもやらず。是れぞ全八蝶九郎がさま〳〵の計較して、主君に淫酒をすゝめたる、張本となりにけり。そも彼の今市全八郎、布施蝶九郎の兩人は、續非譜代の郎黨なれども、その心ざま半七には無下に劣りて、實に奈良坂の兒手柏、いと憎むべき佞人なり。彼等は上に父母なく、下に妻子さへなく、只言を巧みにして君を欺き、飽くまで媚びて、傍難を思ふ事なし。夫れ信言は美ならず、美言は信ならず。宜なり佞言は、甘くして蜜の如し。吉稚丸なほ年少軟弱の公子なれば、これを慮らず、彼の兩人を寵しみて、二なきものとせり。因りて此度の從者にも擇み出し、却つて半七をいぶせく思ふ氣色なるに、半七猛に患ひて五條の旅宿に退きしかば、全八蝶九郎はその隙を得て、吉稚に遊興を進め、半ばはおのれらが身の樂しみにいたし、剩へこのころ、洛に名だたる舞々、笠屋夏が女兒の小夏、弟子の三勝なんど夥よび集合へて、晝夜酒宴に侍らするに、わきて三勝は、花の中なる花にして、一とたび笑めば、城を傾くるの美人なり。されば立ち舞ふ形容は、いにしへの祇王佛にも勝るべく、愁へを含みてうたふときは、雨の海棠に、春の鳥の鳴くがごとく、亦是れ故鄕を慕ふ池田の熊野、父を索ねかねたりし、鎌倉の微妙といふとも、これには不及と見えしかば、吉稚潛かに眷戀して、思ひ惑へる氣色なるを、全八蝶九郎はやく猜して、言の敍に、主君

に私語き申し、「おのれら媒つかまつるべし。」とて、軈て三勝に、その由をいひしらし、さまざまに嫌し誘へども、三勝は舞々こそすれ、結髪けたる夫に逢はずば、寡婦にて果てなんと、思ひ定めし事なれば、財多き人にも靡かず、又風流士も見かへりせず、すべて金錢をもて挑み、威勢に乘して逼る人の席へは、ふたゝび來る事なかりし程に、今侯人等が、主君の爲に情を述ぶるを聞きて、うち腹たて、一言の應へにも及ばず、その席の果つるをまたで、「心持煩はし。」とて歸りしが、その後は呼べども絶えて來らず。全八蝶九郎は、おもふに違ひてせん術なけれど、彼にも問はで、主君には、「翌の夜あはし進らすべし。」と、まうしつる言の已みがたくて、二人密やかに談合し、「このうへは夥の金をもて、三勝が身を贖ふより外なし。」とて、猛に典膳が方へ書簡をおくり、用金の事をいひ遣はしぬ。嚮に半七が五條に退きてより、吉稚の遊興に費せし金、少々のことにあらず。或は五十金、或は百金、是彼の事にいひこしらへ、しば〳〵奈良より取りよするに、半七が名を書き加ふるといへども、その人は絶えてこれをしらず。また吉稚は、今僑居して、よろづ寥々しといへども、元來朱門の公子なれば、金錢を手にだにとらず、多くは二人の近臣に、掠められぬるこそ鈍ましけれ。かかりし程に、全八蝶九郎は、「既に奈良へ金の事はいひ遣はしつ。まづ三勝が親を呼びて、緣由をしらせん。」とて、平三が家へ人を遣はしにけれど來らねば、二人は大いに焦燥ち、打連れだちて、二條河原なる笠松が家に到り、全八郎まづ呼門ひて裏に入り、蝶九郎は外面に立花みて、事の容子を張ひ、時宜によつて、共に平三を說き伏せんとす。そのとき全八郎は、あるじに對ひていふやう、「洛は世に憚りある旅なれば、主君の名はしらせがたけれど、三勝を愛でおぼすの餘り、『身を贖ひて、傍妻にせん。』と宣はするをもて、この事を相語はん爲に來れり。身價は乞ふが儘にとらすべし。舞々の身にしては、こよなき僥倖なれば、領承仔細あるべからず。」といふ。平三聞きて冷咲ひ、「某女兒に舞々は致さすれど、汙穢きところを賣りて、身の安樂をおもふにあらず。よしやこの事を三勝にいひしらするとも、彼には結髪の夫ありて、志金石より堅し。かかればいふとも益なし。是れまでいくたびか、媒をもておなじすぢなる事を、いはせし人あれども、女兒も承引かず、われも聽さずして、回答はみな斯くの如し。この外にいふべき事、聞くべき事なし。とく〳〵歸りたまへ。」といひかけて、つと奥に入りしかば、全八郎呆れ果て、立つしほもなく外面に出でて、蝶九郎にしか〴〵のよしを告ぐるに、蝶九郎は頭を搔きつゝもろともに物陰に到り、さていかにせんといふに、全八聲を低うし、「彼の平三とやらんが、憎さげに回答せしは、わが主君を續井の郎君としらざる故に、思ひ侮るなるべし。さればとて主の名を明白にはしらせ難し。所詮わりなく三勝を奪ひとり、さて媒をもて、身價をおくらんに、彼は元來俳優家なり。一とたび錢を見ば、いかでか點頭かざらん。さはあらぬか。」といへば、蝶九郎

つくづくと聞きて、「しかりといへども人のこゝろは量りがたし。彼もし承引かず、又うけ引くといふとも、その望み數千金ならば、毛を吹き疵を求むるにあらずや。」といふを、全八聞きもあへず、「御邊いまだわが肝裏を猜せず、わがしきりに三勝をすゝめしは、郎君に假託けて、本意を遂げんと思へばなり。かくいふは面なき所行なれど、おのれ三勝には、命も惜しとせず。今彼を身贖して、郎君に進らするとも、世の聞えを憚れば大和へは將て行きがたし。その用なき時にまうし賜はり、わが妻とせん事は、今しばしが程なり。御邊又我を助けて、この件の事成就せば、昨日奈良へいひつかはしたる用金は、すべてその懐へ挾め給へ。故いかにとなれば、途中などに埋伏せして、彼の女子を奪ひとらんに、誰かわが們の所爲としらん。しらざれば身價をとらするに及ばず。よしや平三これを曉得つて、女兒をとり復さんと鬩くとも、這奴を誑引き出して、擊ち殺さんはいと易し。」と、信だちて密語くにぞ、蝶九郎大いに歡びて、一議にも及ばず。「かかればわれは黄金を得、御邊は又美人を得ん、何れも劣り勝りなし。この謀究めて妙なり。」といふ。浩かる所に走卒めきたる男、忙はしく走り來て、平三が家に呼門ひ、「おのれは管領晴元朝臣の御使なり。『今夜猛に、賓の來ませるあり、よりて三勝を召せ。』と宣はするとぞ。黄昏過ぐるころ、むかへの轎を來すべければ、その準備して待ち候へ。」といひ果てて、又忙はしく走り去るを、全八は蝶九郎に密語きて、物陰より飛んで出で、矢庭に彼の男が項髮を掻い爬んで引きかへせば、走卒は大いに驚き、「是れは。」と一聲いはせもあへず、吭をいたく締むるに、手足を悶掻き睛をそらざまにし、忽地に息絶えたり。そのとき蝶九郎も走り出でて、彼の男が衣服袴を剝ぎとり、二人とかくして、屍をほとり近き、叢の中に投げ入れてふかく躲し、後を見ずして逃げ去りぬ。このとき平三は、管領家より召さるゝことをいはんとて、三勝が子舍にあり。往來の人さへ迹絶えたる折なれば、かくとしるものなかりしとぞ。

夜轎の驟雨

さても赤根半七は、五條の旅宿にありて、病むこと三十日にあまり、頃日全八蝶九郎が、郎君に遊興をすゝめ奉り、夥の舞子を呼び集合へる由を傳へ聞きて、大いに驚き、これを諫めんとするに、氣力おとろへて、起居も思ふにまかせず、頻りに心のみ焦燥ちつゝ、いたづらに日を過ぐせしが、八月の中旬に至りて、やゝおこたり果てぬ。翌はつとめて髮を梳かし、祇園の御旅館に參りて、事の爲體を見ばやとて、その準備をいたし、久しく大和へ音耗をせざればとて、この旦奴隷を奈良へつかはせしが、いとゞしく言葉敵もなき宿の、ひとり言していふやう、「これはおさんが護身符なるを、むかし母圖柱に懸けたる護身囊を見かへり、ひとり言していふやう、「これはおさんが護身符なるを、むかし母の遺言にて、わが護身囊と、迭代りにしつる事、おもへばこれも夢に似たり。そのとき母の宣ひし、

『汝が成長るの後、洛へ上る事あらば、おさんが母を索ねよ。』と、聞え給ひし言の葉は、なほ耳底に殘れども、わが母御さへ世に在さず。我のみ近屬洛にあれど、問ふ由もなきその人の、是れもこの世にありやなしや、記念こそ今は仇なれ是れなくば、忘るゝ隙もありなんものを、こは誰が上を守り給ふ、護身囊。」と世をはかなみ、かいとつて項に懸くる、折しもあれ外面に、咳きして、來る人ありけり。金の鐶には庭のむら菊もけおされ、野袴の裾には、夕露の玉を轉ばし、諸折戸を押し開きつゝ、笠を脱ぎ捨つるを見れば、これ別人にあらず、厚倉二郎太夫友春なりしかば、半七は端ちかく出で迎へ、「こは厚倉氏、何事のありて訪ひ給ふやらん。まづ此方へ。」とて、上座に請ずれば、厚倉對ひ坐していふやう、「其許の病著は、仄かに聞きしが、思ひしより顔色もよし、今ははや平癒し給ふならん。」といふに、半七答へて、「某いぬる月より、瘧病にて、起居も自在ならず、君の邊ちかく、うち臥してあらんは、無禮なりと思ひて、この所に退き、翌は癒えんあさては怠り果てんかとて、宿老へも聞えあげず父にも告げずして、思ひの外に日を過ぐせしが、何人に聞き給ひたる、いと不審しきことなり。」といふ。そのとき厚倉こゑを低うし、「友春がその事を、しりたるには故あり。近曾吉稚君用金の事、近臣三人の連署を以て、しば〳〵申し來さるゝを、大殿ふかく怪しみ給ひて某を召され、『汝密かに洛に到りて、事の爲體を見て參れ。』と仰せしかば、いぬる月の下旬より、この地に來つて、をり

をり逗留し、全八螺九郎がすゝめによつて、郎君のおん行迹よからず、毎日に夥の舞妓を呼ばし、三勝とやらんが身を贖ひ、これを妾にせんとて、それとはなしに、きのふ又夥の金を進らすべきよし、例の連署大和へ到來せり。匿むとすれどおぼろけならず、われより先に、大殿へ聞えあげたるものやありけん。おん憤りふかくして、昨夜猛に二郎太夫を召され、『頃日汝に、吉稚が事を搜り問はせつるに、等閑なるはこゝろ得がたし。既に彼のものが淫樂放蕩、世にかくれなし。事審かに說きしらするに及ばず。この事もし室町家より制度あらば、家門の滅亡踵をめぐらずべからず。汝いそぎ洛に走せゆきて、吉稚主從を將て參れ。われ手づから首を刎り竝べて、後の禍を禳ふべし。』と宣ひし、御氣色おどろ〳〵しく、思ひかへし給ふべうもあらねば、畏まつて、この曉に奈良をたち出で、目今こゝに來れるなり。さるによつて、御邊が病み臥したるをも、いかでかしらざる事あらんや。」といふ。半七は聞く事毎に、且驚き且憂へ、頭を低れ、手を叉き、しばし沉吟みていふやう、「郎君のおん行跡、よろしからざるよしは傳へ聞きながら、この身病に犯されて、諫め奉ることを得ず、心ぐるしく候ひしが、用金の事においては、某絶えてこれをしらず。さては今市布施の佞人、君に淫酒をすゝめ奉りしのみならず、われをさへ連係して、不忠の隊に入れたるか。かれ憎し口をし。」とて、齒を切つて憤れば、厚倉かさねて、「其許の姓名を載するといへども、件の連署一枚も、御邊の自

筆なりと見えねば、いひとくに據あるべし。只いひときがたきは、郎君のおん悞ちなり。これを救ひまゐらせんには、忠臣その越度にかはつて、苦肉の計をなさでは事ならず。惜しいかな、せん術はありながら、その人を得ず。」といふに、半七聞きもあへず膝をすゝめ、「そはいかなる謀にて候ぞ。某身を殺して代り奉るべし、早く說きしらし給へ。」といそがせば、厚倉莞爾とうち笑みて、「御邊は志父に勝りて、忠心無二なる事は、我よくしるが故に、實はわが胸中の苦計を告げて、その事を行はせん爲に來れり。さはいへ、その身不忠不義の汙名を厭ひては、この謀を行ひ難し。かくてもなほわがいふ所に從ひ給ふべきか。」と問ふに、半七答へて、「いかなる謀かはしらねども、おん悞ちをわが身に負ひて、君を救ひ奉らば、不義ともいへ不忠ともいへ、厭ふは却つて忠ならず。」と、義に勇む日本だましひに、厚倉頻りに嘆賞し、「しからば今宵いかにもして、三勝とやらんを奪ひ去り、いづ地へなりとも立ち退き給へ。われは又夜の中に、郎君のおん供して、奈良へ歸り、さて大殿に申さんには、『是彼緣故を糺明して候へば、吉稚君のしろし召せし事ならず、すべて半七が私情より起りて、三勝といふ舞々に惑溺し、事みな稚君に假託けんと較計みしが、既にその伎倆發覺れて、いひとくに言語なく、猛に件の舞々を將て遂電せり。かく證據分明なれば、一旦のおん憤りを散らされ、御父子和順し給はば、公私の幸ひ甚しからん。』と申さん。しかるときは、巷談街說、忽地その趣を更へて、郎君のおん惡名を雪むべく、郎君是れより行迹を愼み給ひて、君家泰山のやすきに至らんこと、みな御邊の孤忠にあり。今こそあれ年を經て、その便宜を見あはし、御邊の忠義は二郎太夫が命にかへて聞えあげ、めでたく歸參さし申さん。こゝろ得給へ。」と說き示せば、半七深く感激し、「この謀行ひ易し。只うけ難きは、彼の舞々を奪ひ去り、一日なりともひとつに住まば、眞の不義に似て潔からず、是れ丈夫のせざる所か。不便ながら刺し殺し、我又遙かにその地を去つて、自殺せば後の患へもあらず。皆是れ忠義の爲にはあれど、罪なき女子を殺したる、半七が命を捐てなば、彼の女子の親族も、恨むるよすがなかるべし。」と、いひも果てぬに厚倉は、頭を左右にうち掉りて、「赤根氏の言違へり。彼も又人の子なり。なでふむじんに殺すべき。せめてはそれに添臥しさし、不便をくはへて貧しくとも諸共に世を渡り、この事には預りしらぬ、三勝親子を引き放ち、憂きを見する罪障を、贖はんこそ義士の所爲なれ。われ又方便を廻らして、彼が身價を外ながら、平三とやらんにとらすべし。血氣に乘して人を殺し、身を失ひたまふな。」と、理を述べて留むれども、半七是れをうけ引かず、「いはじとは思ひしが、事こゝに至つて已むことを得ず、心ぐるしき昔がたりを、聞きてさこそと察したまへ。某稚かりし時、結號したる女子あり。その名をばおさんと呼びて、わが父には再生の恩あるものなり。不幸にして九歲の冬ゆくへしれずなりしより、今に存亡定かならず。

されば近曾園花を娶りし事、元來わが情愿にあらず。しば〳〵父に逼められて、その命に悖り難く、彼の園花を娶るといへども、いまだ枕席を共にせず。是れおさんが恩義をおもふにあり。しかるに今舞々の三勝とやらんを伴はば、所謂五十歩、百歩のみ。さはこの條の事によつて、多年の志を轉すべきにあらず。只これを一生の物いひをさめとおほされて、老いてはいとゞ便なき、父半六が久後を、よきに賴み奉る。」と、手を膝に置く忠孝を、神も佛も憐みて、端なく奪ひ去らせ給ふ、三勝は結號せし、おさんなりとは思ひもかけず、殺さんといふもあはれなり。厚倉は緣故を聞きては、諫めんやうもなく、たぐひ稀なる壯士に、濡衣を被せ命さへ、隕さするかとばかりに、涕うちかみていふ事なし。秋の晷の短くて、鷄も塒に入相の祇園精舍の鐘の聲、常より耳もあらたまり、「既に時刻になりぬ。」とて、厚倉やをら座を立ちつゝ、半七を見かへりて、「我ははや退るなり、まうすまでにあらねども、捷りて爲損じ給ふな」と、いへば半七莞然として、「心易く思ひ給へ。甲夜より彼所を徘徊し、潛びよつて奪ひ去り、もし家にあらずと聞かば、歸る途中に埋伏せし、何れこの夜をいたづらに、あかしはせじ。」と夕閒暮、八月の天のさだめなく、暫しは曇る雨催ひ、出づべき月の出でやらねど、客と主が影二つ、磨きあげたる武士の、これや鏡といひつべし。此の日今市全八郎布施蝶九郎は、既に謀りごとを定めて、管領家の走卒を縊り仆し、直にその所を走り去りて、日來認りたる於呂世の轎夫、足平脚平といふ惡棍に、金を與へてこれを相語ひ、日の暮るゝをまちて、蝶九郎は剝ぎとりし、衣服袴を被て、件の走卒に打扮ち、二人の惡棍に轎を釣らして、笠松が家に到り、「管領家の迎へなり、とく〳〵參り給へ。」といふ。この時平三は眞葛が原に趣きて、いまだ歸り來らねど、やんごとなきお方より、迎への轎さへ賜はりしを、いつまでか待たすべき。父の歸り給ふに、程もあらじとて、三勝は夕閒暮の心忙はしさに、蝶九郎なりともしらず會釋して、外面に立ち出で、門の戸鎖して、鍵をば鄰れる家にもてゆき、「如此々々にて參るなる、今にもあれ父の歸り給はば、『舞の衣裳は、跡よりもたし給ひね。』と、言告け給ひてよ。」と誂へおき、轎て轎に乘り移るを、程もあらせず足平脚平、もろ肩入れて擡げ出し、足に任して走せ去れば、蝶九郎は鄰より物陰に立ち潛びたる、全八と面をあはし、「僥倖よし。」と私語きあひ、轎に引きそひ走る折しも、半七早く三勝が家へ尋ね當て、と見れば門は鎖したり、鄰れる家に立ちよりて、それがゆきぬる方を問へば、主人、東の河原を指さして、「尋ね給ふ三勝は、目今人に招かれてまゐりしなり。あれ見給へ、彼所へゆく提灯こそ、彼が乘つたる轎なれ。」と、聞きもあへず、半七佶と見かへりつゝ、「それやつては。」といひかけて、飛ぶが如くに追つ蒐けたり。かかりける處に平三は、この日管領の走卒が歸りし後、猛に眞葛が原へゆくべき事出で來て、申下剋より其處に赴き、思ひの外に時を移せし程に、今は早、三勝が管領家へ參る比及ならんと

て、只顧にこゝろ焦燥ち、昏れたる道を喘ぎ〳〵、三條河原を走り歸るに、河原を東へ急がする、轎の内より半ば垂れたる振袖を、提灯の火光に見れば、柏に大の字の摺箔して、紛ふべうもあらぬ三勝なり。あな不審しと心づきては、轎夫共が爲體も、何とやらん怪しきに、引き添ひたる走卒は、晝見し衣服を被たれど、その人にはあらず。今一人、手拭もて面を裹みたる武士は、向に三勝が身を償はんとて、わが家に來りし人に似たれば、矢庭に轎の棒端飜んで、二歩三歩押し戻し、「こはわが女兒を何地へか將てゆくぞ。」と問はれて、四人諸共に驚とせしが、少しも騷がず、「そは問ふまでもなし、管領家へ召さるゝを、無禮せそ。」と叱り退け、走り去らんとするを、平三はなほ立ちふたがりて、一歩も運ませず、「管領へ召さるゝならば、かくては路こそ違うたれ。いで鄕導いたすべし。」といひもあへず、取つたる棒端引きめぐらせば、蝶九郎等大いに怒つて、「こは過言なり狼藉なり。這奴息の根とめよ。」と鬨くにぞ、轎夫どもは轎扛き居ゑ、打つて蒐る息杖を、平三閃りとかい潛り、右と左へ打ちかはし、つとつけ入りて足平が、息杖を奪ひとり、諸脚薙ぎて雄手なる、小溝へ撲地と打ち倒し、這ひ上らんとする處を、疊みかけて打つ杖に、眉間四五寸打ち割かれ、泥に塗みれて死してけり。續いて蒐る脚平は、胸さかいたく突き破られ、「阿呀。」と叫びて仆れ斃す。今市心駭きながら、聲をもかけず拔打に、切らんとする刃の光に、平三早く身を反り、息杖をもて受けとめ、追ひつかへしつ砍り結ぶ。折しも降り來る驟雨に、蹴揚げの泥の飛花落葉、いとも烈しき太刀風なり。蝶九郎は其の隙に、轎の筵戸搔き揚げて、三勝を引き出し、手拭を口にはませて、肩に引きかけ逃げんとするに、半七もまた三勝をこの處に追つ蒐け來りしが、岸の柳の木隱れて、事の容子はよくしりつ、咄嗟と忽地跳り出で、ゆくべき前に立つたりける。蝶九郎は思ひもかけず、半七に遮り留められ、こゝろの中大いに瞻て、逃ぐとも脫さじと思ひしかば、已むことを得ず三勝をうち捨てて、打つてかゝる刃のもとへ、半七が握り固めし拳を丁と衝い出せば、我から膳をいたく打たし、眼瞻みて刀を捨て尻居に撞と倒るゝを、半七は見向きもせず、驚きまどふ三勝を、腋下に楚と扛き抱き、河原に添うて走せ去りけり。平三も全八もこの景迹に勢ひ脫け、迭に呆れて、打ちもあはず、雙方一度に引きわかれ、「かへせ戻せ。」と呼びとむる聲は只いたづらに、蝶九郎が耳に入りけん、身ぶるひして起きあがり、仇も身方も玉鋒の、路さへいとゞ暗ければ、彼此を索ねめぐれども、早その人は見えずなりぬ。

三七全傳南柯夢卷之三　終

三七全傳南柯夢　卷之四

東都　曲亭馬琴編次

眞葛が朝風

今市全八郎、布施蝶九郎は、その夜さり三勝を誑きて奪ひ去り、やゝ三條河原まで來つるとき、笠松平三に撞見ひ、相語ひつる惡棍、脚平足平は、これが爲に打ち殺され、剩へ三勝は、赤根半七が引き攫ひて、往方もしらずなりしかば、犬の追ひ立てし鶉を、鷹に捉られたる心持しつ、平三をうち捨てて、これを追つ蒐け、泥に塗れつ、、索ね廻りしが、終にあはず、眞葛が原のほとりにて、夜はしらしらと明けにけり。甲夜の鬪諍より引續き、暫しも立ち休らはねば、殆と疲勞れて腰うち伸ばし、互に面を見あはして、呆れて立在む折しもあれ、捕手の夥士ばら〳〵と走り來て、直ととり圍き、矢庭に捕へんとて鬪くにぞ、全八蝶九郎は大きに驚き、「こは何故に狼藉す。」と、いはせもあへず、野袴の裾結み揚げ、兩刀を斜にしたる壯佼、徐やかに進み出で、「やをれ佞人ばら、殿の仰せなるぞ。」と呼びかけられ、布施今市はまた〳〵慌て、眼を定めてその人を見をれば、これ別人にあらず、典膳が兒子蟻松曾太郎なり。緣故さへ推量られ、猛き惡棍なれど、胸うちさわぎて、とかうの返答に及ばず、只呆れてぞ立つたりける。そのとき曾太郎は、全八蝶九郎を佶とにらまへていふやう、「覬覦の盜臣、吉稚丸に淫酒をすゝめ進らせ、夥の用金を私し、剩へ舞々三勝を奪ひ去りて、三條河原を鬧がし、管領家の走卒を縊りしこと、既に發覺れたれば、逃ぐとも何地までか脫すべき。とく縛めうけよ。」とて、いきまきかたく罵れば、件の兩人冷嘘ひ、「吾が傍嘗て郎君に淫酒をすゝめ、用金を私にしたる事なし。況いて三勝とやらんを奪ひ去り、管領の走卒を縊りしなんど、そは跡かたもなき事なり。思ひ愧りて、後悔なせそ。」と、いはせもあへず、曾太郎呵々とうち笑ひ、「盜人悍々しとて、いへばいはるゝ物かな。きのふ笠松平三とやらんが門方にて、管領家の走卒を殺し、その衣服を剝ぎとりて、三勝を詭り出せし事、證據分明なり。頭陀平とく來給へ。」と呼びたつれば、「おつ。」と應へて小松の陰より、年の齡四十あまりなる男、赤裸にて走り來つ、「いかに全八、蝶九郎とやらん、われを認れりや。」と問へば、二人は驚として、「汝は昨の走卒なるか。蘇生しては適はじ。」とて、逃げんとするに、夥兵ども立ち塞ぎたれば、逃げ出づる道もなし。「こは忌々し。」と呟けば、曾太郎かさねて、「近曾吉稚丸の御行跡、よろしからざる由、南都に聞え、大殿のおん憤りふかく、密かに厚倉二郎太夫に仰せて、御旅館の爲體を窺はし給ふに、世の風聞に違はず、みな是れ汝等が、君を欺きて、私慾に

恥ること、既に露顯す。さるによつて、二郎太夫、間者をもつて、毎日に汝等が出居に意を著くる程に、きのふこの頭陀平が縊り殺されたるとき、間者ゆきかゝりて訝しみ、そのほとりに遺したる扇を見るに、豫て認れる全八が扇なれば、いよ〳〵怪しみ、軈て仆れたる人を呼び活くるに、幸ひにして甦生れり。且く勦りて名氏を問ふに、『管領家の走卒に、頭陀平と呼ばるゝものなり。只今舞々三勝が家へ、殿の仰せを傳へて立ちかへる折しも、如此々々の男、後より走り來て、わが咽喉をいたく締むると覺えしが、その後をしらず。』といふ。これ疑ふべくもあらぬ、全八が所爲なめりと猜して、直に頭陀平を將て、御旅館へ參る途中、われも又きのふの嚥昏に、奈良より來りて、二郎太夫と示しあはし、汝等を搦め捕らんとせしほどに、はしなく間者に行きあひ、審に一五一十を聞きて、頭陀平を伴ひ、通宵汝等が往方を索ねめぐりて、こゝに至れり。しかるに頭陀平、はやくも蝶九郎が衣服袴を見て、『あれこそわが物なれ。』といふ。かかれば頭陀平を縊りしは全八蝶九郎が所爲なる事、問はずして分明なり。これによつて、思ひあはすれば、汝等頭陀平が衣服を剝ぎとりて著用し、『管領家の迎人なり。』と僞り、三勝を誑引き出せしこと疑ふべからず。もししからずば、三條河原にて、平三とやらんが、なでふこれを阻むべき。且汝等が相語ひつる、足平脚平といふものは、隱れなき惡棍なるよし、昨夜街の風聞にてしりぬ。さるからに、一二郎太夫は夜の中に吉稚丸の御供して、奈良へ歸へり、われをとゞめおきて、汝等を搦め捕らするものなり。かくてもなほ陳ずるや。」と責め問へば、全八等ます〳〵周章き、恨めしけに蝶九郎が衣服袴を見かへるにぞ、蝶九郎はいとゞ猶、裳脫けかねたる秋蟬の、鳶に捉らるゝ心持せり。且くして全八蝶九郎がいふやう、「しかりといへども、吾が儕のみあしきにはあらず、赤根半七、久しく病と稱して、五條の旅宿に引き籠り、吉稚丸の懸想し給ふ三勝を奪ひ去れり。しかるを半七は縛められず、こは遺恨にこそ。」と呟けば、曾太郎冷笑ひて、「人の非を擧げ、おのが罪を脫れんとするは、そのこゝろいよゝ穢し。あれ縛めよ。」といふよりはやく、「うけたまはりぬ。」と夥兵ども、散動きたちて、まづ蝶九郎が衣服袴を剝ぎとり、全八と共に犇々と括りあぐるに、二人の惡棍は、拂ひ退け、搔い遣りて、こゝろのみ悍れども、手をとり足をとりて、いやが上にをり累なりしかば、遂に逃ぐることを得ず、阿容々々と縛められつ。そのとき曾太郎は、頭陀平に衣服を返してこれを被せ、扨いふやう、「布施今市が奸惡憎むに堪へたりといへども、この事管領家へ聞えては、這奴等はとまれかくもあれ、主君順昭の越度とならん。しかるときは夥の人の歎きなり。通宵いひつるごとく、這奴等は大和へ將てゆきて、罪を家則にまかすべし。其許の一命に恙なきうへは、慣りを散らして、世に漏らし給ふな。」とて、丁寧に勸解ぴしかば、頭陀平點頭きて、「そはいはるゝまでもなし。おのれ下郎なりとも、管領家の祿を汙す者なるに、人に縊られ、衣服を剝がれたり

とまうさば、却つていかなる罪をか得ん。二條わたりには、相識れる醫師もあれば、これを賴みてきのふ中途にて、暴に病發り、三勝が家まではえゆかず、醫師何がしが家に立ち寄りて保養し、思ひの外に一夜明せしとまうさん。かかれば、わが身にも恙なく、續井家の越度にもならじ」と、信だちて密語けば、曾太郎大きに歡びて、なほ言語を卑うして、その口を鉗むるに頭陀平いよゝ意を得て、全八蝶九郎に對ひ、「汝等我を誰とか思ふ、もしこの壯佼の面を覩るにあらずば、わが身を捨てても引摺り歸り、立地に怨みを雪むべきに、かくは思ひしりつらん。」と罵りて、さて曾太郎に目禮し、軈て別れ去りにければ、曾太郎は布施今市を引き立てさし、大和を斥していそぎけり。かくて頭陀平は、彼の醫師が家にゆきて、緣由を物がたり、其の所より送られて管領の館に歸り、形のごとくいひこしらへけり。是れより先管領の近臣は、その夕暮に及べども、頭陀平が應へを申さざるを怪しみ、日暮れて別に三勝が家に迎への人を遣はし、且その應へを聞かするに、その人徒らに立ち歸りて、「三勝が門は鎖して、人ありとも見えず。」といふ。「そは不審しき事なり。」とて心苦しく思ひながら、明白に主君に聞えがたければ、「三勝は『いたはる事あり。』とて參らず。」と申し爲へ、その夜をすませしが、詰旦頭陀平やうやくに歸り來つ、「僕きのふ途にて猛に病起り、遂に三勝が家に到ることを得ざりし。」といふ。近臣聞きて、「扨は彼の舞々が他へゆきたるも咎めがたし。」とて、再び問ふ事もなかりけり。

爰に又笠松平三は、その夜さり三條河原にて、三勝が轎にかき乘せられてゆくを怪しみ、これを遮り留めて、四人の癖者と挑み鬪ひしが、また一人の武士樹陰より、跳り出で矢庭に三勝を搔き攫ひ、忽然と走り去りしかば、全八蝶九郎等を打捨てて、これを追ひ留めんとしつれども、宵闇なるに風雨烈しかりければ、終に及ばず。雨歇みて後、又舊の河原へ立ち歸ると、「脚平足平が打ち殺されたり。」とて、彼此人立ちつどひ、市の正の下主來つて、その屍を展檢し、ほとり近くは寄りもつかれず。こゝに至つて平三は、且驚き、且愁へておもへらく、われ一時の怒りに乘つて、二人の轎夫をうち殺したれば、自の罪は脫れがたし、三勝を奪ひ去りたる癖者どもは、わが推量に違はざめれど、これを明白に訴へ出でて穿鑿すべくもあらず。わが命は惜しむに足らねど、三勝が行方もしらず、又この寃みをも雪めずして自ら罪に當らんはいとくちをし。彼の癖者どもは、けふわが家に詣來て、「三勝が身價せん。」といひつる旅客にて、嚮にわが女兒、何がし殿とやらんの旅館に召されしとき、われも假初に面をあはしたる、その人の郎黨に似たり。よしや三勝彼等の毒手に陷ちたりとも、よも阿容々々とは伴はれじ。元來その心ざま貞しく、結髮の夫の爲に節操を守ること、世の人に勝れたれば、思ひかねて死にもやせん。しばし洛を脫れ去りて、しのびくに三勝がゆくへを索ね、彼を救ひ出して後は、ともかうもならめと深念し、家にも歸らず夜の中に、宇治のかたへ奔りて、平等院の片ほとりにふかく

躲れ、潛かに洛の爲體を聞くに、「件の足平脚平は、隱れなき惡棍にて、死後に舊惡露顯せり。こゝを
もて、彼等を殺せし者の往方を、尋ね索むる事等閑なり。」と風聞す。平三はこれを聞きしより、少し
はこゝろおちるたれど、猛に洛を立ち退きしかば、些の貯へもなく、とやせまし、かくやならましと
思ひくしけるが、昔もかく零落れたりしとき、奈良にて膏藥を賣りたるに、彼所は世をわたるに、便
宜の地なれば、今度は南都へ赴くべしとて、やがて宇治の旅宿を立ち出で、直に彼の地に到りしが、
昔相識れる人も、おほくは世を去りて、賴むべき陰もなし。しばしが程は、衣服を賣りなどして旅籠
に宛てたれど、これも竭きていよゝ術なく、ふりたる笠を戴き、さゝやかなる柄杓をもちて、觀音の
靈場を順禮する行者に打扮ち、毎日に南都の街衢を徘徊し、往來の人の袖に附き、あるは商人の店前
に立在みて乞食し、やうやくその日の露命を繫ぎぬ。

百度の願事

厚倉二郎太夫友春は、密かに赤根半七と謀しあはし、彼に三勝を奪ひ去らし、相伴ひつる蟻松曾太
郎は、親に立ちまさりて、忠義の壯佼なれば、これには謀を授けて、「全八蝶九郎を搦め取り、後よ
り來給へ。」と聞えおき、その身は半七が五條の旅宿より、直に祇園の旅館に參り、吉稚丸に、嚴君の
怒り甚しき趣を告げ、今市布施が奸惡、半七が孤忠、總て潛びやかに演說し、「とく〳〵轎に乘さ

れ候へ、南都へおん供つかまつるべし。」と申すに、吉稚丸は、是彼の事を聞きて、ふかく後悔じ、且
父の怒りを畏み、全八蝶九郎が奸佞を憎み、さるにても半七に不忠不義のぬれ衣を被せて、わが悞ち
を繕はんは、罪いよゝ深し、たゞ明白に勸解び奉りて、もし許されすば、潔く自殺せんと回答へ
つゝ、思ひ定めたる氣色なるを、二郎太夫は頻りに感激して涕うちかみ、「遉は續井家の郎君にてまし
ますなり。然はあれど、君は一國一城の世子にて坐するに、いかでか小節にかゝづらひて、身を塵芥
のごとくなし給ふべき。今ごろははや、半七が彼の舞々を奪ひ去りたるにてあらんずらん。もし御悞
ちを明白にまうさし給はば、彼が忠義はいたづらなり。彼を不忠の罪人となし給ふとも、大殿のおん
憤り解けて後は、召しかへし給はんこと、君の御こゝろにあり。しかれば何事もしばしが程なり。
二郎太夫が申すにまかして、とく〳〵歸館あるべし。」と、理を盡して諫めこしらへ、俄頃に南都に
誘引ひまゐらし、さて主君順昭に申すやう、「僕頃日、聞者をもて、吉稚君のおん言行、近臣が
出居を窺はせしに、稚君のおん悞ちは露ばかりもなく、みな是れ近臣等がなせし僻事なり。その故は
箇樣々々なり。」とて、全八蝶九郎が爲體審かにこれを告げ、又申すやう、「赤根半七出頭して、吉稚
丸の傳きを承りながら、『病著あり。』と僞りて、ひとり五條の旅宿に引き籠り、舞々三勝といふ淫婦
と密通し、人口を憚り、後難を怕れて、全八蝶九郎を相語ひ、彼の舞々を吉稚君にすゝめ進らせ、酒

宴に侍らせんと計較みしが、事發覺れて罪脫れ難くや思ひけん、三勝を伴ひて、何地ともなく逐電せり。全八蝶九郎等は、後れて脫れ去らんとせしを、蟻松曾太郎、搦め捕りて引き來れり。かくの如く證跡分明に候へば、日來の御憤りを散らされ、御父子の對面あらまほし。稚君は何事も思ひかけ給はぬに、御怒りの甚しき由を聞召して、うち驚き給ひ、直に洛を發駕ありて、今朝かへり入らせ給へども、ふかく畏まりて、老臣等にもあひ給はず、いと痛ましく見え給ふにこそ。」と、言語を竭して聞えあぐれば、順昭つくづくと聞きて、「近臣等がうちも揃ひて、非法の擧止しつるをしらで、父に愛を失はれんとしつる事、吉稚が越度なれど、彼は年なほ二十にも滿にず、いはば乳臭の孩兒なり。かばかりの過ちは免すべきか。近臣等が亂行はその罪を宥めがたし。就中赤根半七は、物の用にたつべく思ひて、老いたるかたにも立ち勝らし、日來重く用ゐたるに、恩を稟けて恩をしらざる白徒なり。彼が往方は草を刈り拂ひても索ねよ。汝典膳ともろともに、全八蝶九郎を鞫問せば、半七がゆくへも、などかしれざらん。」とて、小膝を敲きて仰すれば、二郎太夫謹んでこれをうけたまはり、又申すやう、「かかるうへは、吉稚君に對面ましくて、老臣等が心をも安からしめ給へかし。」とまうせば順昭、「さらば誘引ひ來れ。」といふ。その時二郎太夫は、吉稚丸の子舍にいゆきて、一五一十を告げ、儐きて舊の所へ參れば、順昭ちかく吉稚を侍らし、「此度の事につきて近臣等が非法の擧止は、主の懈ちなれど、御身いまだ弱冠なれば、ふかくも咎めず、以後を慎み候へ。」と教訓す。吉稚は始終頭を低れ、忝きよしをまうして退出けり。さる程に蟻松典膳は、君命を稟けて、二郎太夫とともに、全八蝶九郎を責め問ふに、彼等は身の罪を輕うせんためにし、半七をあしざまにいひなし、「吾が儕愚かにして、半七に誑かれ、三勝を誘引ひ出すと雖も、三條河原より後の事は、何地へゆきけんともしらず。すべて此度の奸計は、半七が心ひとつより出でたるに、却つて彼のものは脫れ去り、吾が儕のみ、かく辛きめを見ること、是非に及ばず。」とのみ回答へて、嚴しく責め問へども、その外の事をいはず。さるによつて典膳は、いよゝ半七を憎み、「這奴柴賣の孩兒なりしに、わが蔭を蒙りて近臣の上に列なり、剩へ千々の寶にも換へじと思ふ、女兒園花を妻はせしは、その才を愛づればなり。しかるを彼の犬自もの、近曾出頭して、朋輩にも敬はるゝを、おのが才學とや思ふ、忽地にこゝろ驕りて、君を欺き、朋輩を相語ひ、舞々と姦通して、われにさへ面目を失はすること、言語道斷の癖者なり。半七が事は、とかく論ずるに足らず、その罪は父といへども脫れがたし。まづ半六に皺腹を切らせずば、この憤りのやるかたなし。」といきまきて、彼の父子を罵ること、面のあたりに居るがごとし。園花は又、父の怒りの烈しきを、見るにつけ聞くにつけて、妬しと思ふ氣色はなし、只半七が往方おぼつかなく、「いかなる樹の陰、草舍の簷下に立ち明し給ひけん。衣手うすき秋風に、又や病著の發り

はせざるか。久しく病みて坐せしともしらざりければ、音耗も等閑に過ぎたるを、心つきなしと恨み給ひけめ。男子と生まれたるかひには、婢妾もあるものを、況いて旅寢の徒然に、他し女子と假初の、契りを結び給ふとも、命とらるゝ罪にはあらじ。然るを腹のたつまゝに、緣故もしり給はぬ、その爹々さへ殺さんとは、理ともおほえ侍らず。それこそわが身の妬みにて、舅を殺したりなんどといはれんは、生くる日の物思ひ、死して後の迷ひなり。何事も折のあしくて、彼の人の在さねばあしざまにのみいふならん。さるをよく問ひも考へず、むじんなる事し給はば、わが身まづ、自害してうせ侍らめ。人しれぬ歎きして、待つかひもなき夫の、心の底は解けずとも、顏見てくらさば慰むる、よすがもあらんにこれは又、あはでの森となりまさる、けふやこの身の終りか。」と父を諫め母にかこち、聲を惜しまず泣き沉めば、敷浪も半七を、け憎くは思へども、女兒が貞操のよのつねならぬに羞ぢて、漸くに思ひかへし、夫を諫め寬むるにぞ、典膳もかく園花に泣き歎たれて、勇きこゝろもよわりつゝ、終に半六が死刑を放べて、彼是の罪狀をさだめ、二郎太夫と共に、主君に聞えあげて、まづ全八蝶九郎を追ひ放ち、半六はその子の罪によつて、ながく出仕をとゞめらる。かかりしかば、半六は、わが子の爲體を聞きしより、且驚き且怒り、只薄氷を蹈むこゝちして、憂苦の中に日を過ぐせしが、終に出仕を止められ、一直蟄りいたすべきよし、典膳二郎太夫これを傳へ、僅かに命を繫ぐ許りなる、月俸を賜はりければ、いとゞしく遺恨に堪へず、さればこそ半七が、日來博士ぶりて、親の諫めを用るず、この禍を惹き出せり。這奴憎しとは思へども、さすがに恩愛の悲しさは、その往方も心もとなく、あるときは怒り罵り、又あるときは打歎き、天日明らかなりといへども、わが家のみはいと暗く、絕えて訪ふ人あらざれば、憂きを慰むよすがもなし。げに榮枯得喪は、四時の代謝るがごとく、もえ出づる梢の花、後るゝも先だつも、いづれか秋にあはざるべき。彭祖が命長かりしも、子孫には傳へがたく、石崇が富貴なりしも、生涯を過ぐすに足らず。德なうして貴からんと願へば危く、富みて驕るものは亡ぶとかや、禍福吉凶を、龜の卜部に問はんより、尾を泥中に曳くにはしかず。半六はこのときに、米谷の楠を伐りたることを後悔し、篠篠が諫めさへ、思ひ出でられて口をしけれど、今はそのかひなかりけり。さる程に園花はます〳〵半七が事を思ひほそりて、病はじめに彌增しつゝ、再びうち臥してより、絕えて首を擡げず、元來想思病の事なれば、醫師も眉根をよせ、「速かには平愈し難からん。」といふに、典膳は安き心もなく、敷浪は日毎に奈良の大佛に參詣し、百度參といふ事をして、「女兒が病著、頓に本復あらせ給へ。」と禱るの外、更に他事なかりけり。是れは扨おき、笠松平三は、奈良の巷を徘徊して、歌祭文を唱へ、乞食して日を過ぐすに、頃しも九月の二十五日になりぬ。けふは高天神の會日なればとて、彼の社頭に立在み、參詣の老弱に袖乞ひす。浩かる所に、

領主の代參かとおぼしくて、從者五七人を將たる武士、門前の茶店に憩ひ、馬をば店前に繫がし、その身は奥まりたる所に入りて、主從割籠を披くにぞ、平三これを見て、軈てそのほとりにいゆき、從者に對ひて、「飢ゑたる順禮の行者に、ものたべ。」といふ、この聲や漏れ聞えけん、主なりける武士、若黨を呼びて、しばし何事をかいひしらすれば、件の若黨こゝろを得て、平三を呼び入れ、飽くまで飯を食はし、さていふやう。「汝今飽きたればとて、翌まではよも有たじ。こゝに猶わが主の食み殘し給へるあり。『割籠と共にもてゆきて、夕餐にせよ。』と宣はするなり。」とて、やがて索もて眞中をしかと括り、「これ提げてゆけ。」といふに、平三は數回押し戴き、割籠を引提げつゝ、又社頭に至りて、錢を乞ひ、やゝ申の下剋に及びて、いつもの寢所を繕はんとて、大佛堂に赴きしが、又物ほしくなりしかば、高天神にて得たりける、割籠をひらくに、思ひもかけず、飯の中に一包の金ありて、三勝が身價と書いつけたり。こはいかにと驚き怪しみ、つく〳〵と思尋して、緣故を推量るに、三勝を奪ひとらしたるは、こゝの領主などの、世の聞えを憚り、わりなく奪ひ去らして後に、かく計らはしたるにや。また三勝が舊の養父は、五條の村主にて、結髮の夫も、彼所にありと聞けばそれらが所爲か、二つに一つは違ふべからず。遮莫我も許さず、彼も承引かざるものを、心穢く計策りながら、今更この金をもて、わが心を蕩さんとするこそ、いよゝ腹だたしけれ、高天神の茶店にて問はば、彼の武士の名氏もしれやせんとて、俄にその茶店に走り行き。「けふ割籠を披き給ひたる如此々々の殿は、領主の御内にや、何と名告り給ふぞ。常にこゝに憩ひ給はば、しりてぞおはすらん。しらし給へ。」といふに、主人答へて、「彼の人はけふはじめて憩ひ給ひたれば、われもしらず。」といふにすべなくて、つぎの日五條に赴き、赤根半六が事を問ふに、里人等がいふやう、「半六ぬしは、近曾閉ぢ籠められておはするなり。緣故は子息半七といふ壯佼、郎君のおん供して京に赴き、三勝といふ舞々と密通し、逐電したる罪によつてなり。」といふ。平三これを聞きて、はじめて曉得り、さては三條河原にて、三勝を奪ひ去りたる壯佼こそ、結髮の夫、赤根半七なりけれ。おもふに彼のもの、父の志に悖りがたかりしに、主の供して洛にあれば、その便宜を得て、密かに名告りあひ、夫婦もろともに奔りけん。かからばなどて一言は、われにも如此と聞えざる。ともしらずして方人せし徒と挑み鬪ひ、人を殺すの罪を得たり。まことに親のこゝろ子しらずといふ、世の常言ぞ由ありける。もし實の女兒なりせば、かくまでにあるべからず。今は思ひたえたり、この身價も何せんと、うち恨みつゝ又思ふやう、さるにても不審しきはこの金なり、彼等さる爲體にて奔りたらば、この身價を贈らんや。これには深き故こそあらめとて、とにかくこの地おぼつかなければ、彼の割籠を與へたる人に廻りあはまほしくて、領主の藩中を徘徊するに、乞食なれば内へは入られず。ます〳〵餓ゑに臨めども、件の金をば一

枚もうしなはず。元來翌をもしらぬ罪人の身なれば、愁ひに人なみなる、世を渡らんとも思はず。なほ奈良の街衢を徘徊して、しのび〳〵に三勝が在所を索ね、おもひの外に月日を過ぐして、四年あまりを經たりける。

夜半の月魄

さても赤根半七は、その夕三勝を追つ蒐け、三條河原にて、全八蝶九郎等が、平三と挑み戰ふときに追ひ著き、矢庭に蝶九郎を突き仆して、三勝を小腋に扛き抱きつゝ、闇に紛れて走り去り、河原傳ひに北を斥して、吉田の森をうち過ぎ、白河山の麓に至る比及に、雨も歇みて更闌けたり。月は出でながら、天はなほ結陰りて路くらく、往來も既に迹絶えしかば、やをら三勝を扛きおろし、扨いふやう、「緣由を告げずして理なくも將て來つれば、さこそ懼ろしとも思ひけめ。はじめそなたを誑引き出せし者どもも、わが朋輩にはあれど、彼等と諜しあはして、かく計策りたるにはあらず。彼は彼がじもて、私慾の爲にし、我はわがしゞもて、忠義の爲にす。審にいはんがなが〳〵し、まづその概畧を聞えしらすべし。いぬる頃そなたを祇園の旅館に召さし給ひたる郎君は、すなはちわが主君にて、やんごとなき人に在するなり。潛びて洛に遊び給ふから、近臣に至るまで、明白には名を呼ばず、淫酒に耽り給ふ事は、佞人ばらがすゝめによれど、世に聞えなば、すべて郎君の越度となりて、いかなる禍の出で來なんも量りがたし。さるによつて、大殿ふかく憤りおぼし、『速かに召しかへして、愛子を手づから失はん。』と敦圉き給へば、家隸等、みな手に汗を握りて、周章大かたならず。ともしらざれば佞人ばら、ひたものすゝめて、郎君を淫酒に誘ひ、なほふかき伎倆あるにや、そなたを欺きて、奪ひ去らんとせり。しかりといへどもわが身久しく病によつて、旅宿を異にし、且出居も自在ならざれば、これを諫め奉ることを得ざりしに、やゝ病著もおこたり果てなんとす、折しもあれ、けふ同志の忠臣潛びやかに、わが旅宿に詣來て、心中の機密を告げ、『そなたを奪ひ去れ。』といふ。これ他なし、『我とそなたと密通し、その非を掩はん爲に、郎君に假託け、身贖の事を計較み、そのこと發覺れて奔りたりと風聞せば、郎君の御惡名を雪むべく、主家に禍なかるべし。』と、相語はれしより親を捨て、身を捨て妻子を顧みず、みづから不義の濡衣を、被たる雨夜の暗紛れ、西施を投むる范蠡が、志はいたせども、それとは遙かに質かはり、緣も好みもなき人を、虐げて忠よ義よと、ものものしくいふをうたてくも、鈍ましくも思はんが、かくせざればわが主家危く、家隸老黨はさらなり、その妻子に至るまで、悉く離散せば、幾その人の歎きならん。身を殺して夥の人を、助くるなればと思ひ諦らめ、潔く擊たれてたべ。鬼々しとは思へども、忠義に換ふる慈悲はなし。然りとて、そなたひとりを殺すにはあらず。我も又、所をかへて腹かき切り、仇も怨みもなき人を、殺せし罪を贖

ふべし。又そなたの親何がしには、それとしらせず折をもて、この報いをなすべきよし、同志の忠臣に聞えおきたれば、後の事は心易かれ、緣故はかくの如し。不便ながら、盛りの花を、散らす忠義の太刀風を、彌陀の利劍と觀念し、佛果を得よ。」といひもあへず、閃りと引き拔く刃の電、薄がくれに三勝は、「吐嗟。」と許り飛び退くを、「聞譯なし。」と半七が、又突きかくるをかい潛り、裳蹴かへす夜嵐に、山川の音凄まじく、「あれや〳〵。」と呼ぶ聲も、妻戀ふ鹿の友音のみ、應へて助くる人もなし。三勝は稚きより、舞に手馴れて身も輕く、半七は又始めより、こゝろ得さして殺さんと、思へば左右なく打ちもかけず、追ひ廻し逃げ迷ふ。是れや叫喚大叫喚、氷の地獄焦熱の、玉なす汗に身も冷えて、脫れかたなの下にたつ、三勝今はかうと見て、「やよ待ち給へ只管に、身を脫れんとにもあらず、忠義の爲と宣はする、事をわきたる壯士の、逃ぐとて脫し給はんや。命とらるゝ迎へとも、いさしら河の山に來て、紅葉とともに散り果つる、身の秋をいかにせん。みな前世の惡業なりせば、人を恨むるよしなけれど、故ありてこの年來、生死もしらぬ母を慕ひ、浮世の義理に絆されて、思ふのみにてえもあはぬ、人に一言遺したし。なからん後にその人に、傳へてたべ。」といふ聲も、涙にいとゞ曇る夜の、顏は定かに見えねども、思ひかねたる風情なり。半七も喚しばたゝき、「鳥の死なんとする時、その鳴くこと悲しく、人の死なんとするときに、そのいふ事よしといへり。思ふ程は、何にまれ聞かでやは。聞え給へ。」さらばとて三勝は、いはんとするに胸塞がり、しばし涙を押し拭ひ、「恥かはしき事には侍れど、わが父笠松平三は、實骨肉の親ならず。過世あしくて三歳の時、垂乳母には生別れ、父は又わが七歳の秋、斧に擊たれて非命に世を去り、仇ある人に恩を稟け、養はれては恨みを捐て、よし孝行は盡さずとも、不孝をせじと身を省み、出居の障子あけくれに、隔てず仕へし養母さへ、世を早うして後は、いかなる故にか養父に疎まれ、九歳の冬人しれず、殺されんとしたりしが、かたらはれし人の情にて命助かり、その人を父とたのみて、養育まれ、身丈伸びては反哺の孝に、舞々とはなりはべれど、稚き時に結髮けし、夫に一たび環會ひ、母の生死もしらまほしく、恥を捨てたる世渡も、朗詠、催馬樂、早歌に、人の心は慰むれど、わが懶さは慰むる、よすがも絶えて泣顏を、なほす樂屋の十寸鏡、くもらぬ操を狩衣の、露ばかりもわが夫に、しらせまほしとは思へども、烏帽子のかけ緒うちとけて、音耗すればその父親に、捨てられたるを恨むに似たり。しからば夫もいかばかり、心ぐるしくおぼすらん。逢はずにあくがれ死ねばとて、阿翁の隱匿を世にしらし、夫に羞は見せじとて、こゝと彼所にありながら、遠離り居る誠心は、とゞかで今宵見もしらぬ、人に忠義をたてさして、今の親には孝ならず、色情ゆゑ逃げも走りしかと、なき名を人に謳はるゝは、いか許り悲しけれど、身の惡業は歎けども及ばず、護身囊は夫の記念、『内なる撥は母にあぶ、割符にせよ。』とて亡き父の、遺

せしも侍るなり。涙の雨は絶えず降る、笠屋三勝が身の果てを、なからん後に傳へてたべ。その夫の名は。」と許りに咳りあげつゝ、掩ふ袖に、言の終りは口隱りぬ。半七は聞く毎に、思ひ當る事のみなれば、眼上にふりあげたる、刃も耳も側てて、數回嘆賞し、「舞子に稀なる孝心苦節、深く心に羞づることあり。もしそなたの乳名を、おさんとはいはざるや。」と、問へば三勝驚き怪しみ、「そをいかにしてしり給へる。もしその人か。」と、思はずも、よらまくせしが眼のあたり、晃く刀に油斷せず、又走り退く闇の方に、鳴きつゝ渡る鴈が音も、女夫か友かと疑ひの、天より晴るゝ雲の間に、顯はれ出づる月影にて、始めて面をあはしつゝ、と見かう見れば稚顏と、衣服に染めたる大柏の、紋は互におほえあり、「こはわが夫にておはしけり。」「げにおさんにてありつるよ。こは〳〵いかに。」と諸共に、呆れまどふぞ理なる。そのとき半七は、刃ををさめて、三勝を劬り扶け、小草刈り布きもろともについゐて、さていふやう、「われ近曾、吉稚丸のおん供して、洛にありといへども、病著にとぢこめられたれば、絶えて一たびもそなたに逢はず、元來主從、その名をふかく匿みたれば、續井家の郎君なりとは、思ひがけずやありけん。鬻にも雨夜なるに、心いそしき折なれば、聲は聞きつゝわれも又、吾妹子なりとはしらざりき。稚きときに別れしかば、面がはりはしつれども、宵闇ならずばかくまでにはあらじ。もし逸りて刺しも殺しなば、さぞな悔しくあらんずらん。嗚呼危いかな危かりし。さるにても、そなたは豐田の山本にて、荒熊に銜み去られしより、絶えて生死もしれず、大かたは世になき人と歎き思ひたるに、今の物語にてやうやく曉り得ぬ。みな是れわが父の、ふかき望みあるをもて、人しれず失はんとはし給ひけめ。さるを露ばかりも恨むることなく、なほわが父の非をあらはさじとて、家にも歸り給はざる、その孝その貞、感激に堪へず。我は却つていひがひなくも、父の命せ悖りがたくて、近曾蟻松典膳の女兒園花を娶りたれども、前の誓ひは破らじと、終に一たびも、彼と衾をともにせず、この年來朝な夕なに、そなたは死せりや世にありや、しらし給へとて神佛に、祈願せし驗ありて、今日今宵危窮に迫りて、かく環會へること、これも夫婦の惡緣ならん。さて形なや。」と世をはかなみ、園花がことはさらなり、吉稚丸病氣保養の爲、洛に遊び給ひしこと、今市全八郎、布施蝶九郎が奸惡、厚倉が誠忠、曾太郎が質行、すべて京奈良の爲體、一五一十を說きしらし、又いふやう、「父のよしあしをまうさんは、いと畏くも悲しけれど、昔丹波都どのに誓ひ給ひたることも、榮利の爲に忘却し、蟻松氏と緣結ばん下ごゝろにて、そなたを失はんとし給ひしこと、われさへ面目なきに、それとしらずとも、又やそなたを殺さんとせしは、麁忽の擧止に似たれども、もし一夜なりとも伴はば、身を潔くし難しと、思ひ定めし誠心は、誰が爲と思ひ給ふ。もしかからずば名告りあふ、よすがも絶えてあるべからず。寔に不思議の對面なり。」とて、首尾をものがたれば、三勝涙を堰き

かねて、「參々はとまれわが爲に、他し妻をばかさねじと、色にも愛でず情にも、引かれぬ人の忠義ゆゑに、うきたる色情の名にし負ふ、世にも勝れし志を、聞きては何か恨み侍らん。わかれて後はいひしらず、言の葉守の神は在ねど、柏の紋を舞の名に、呼ばるゝまでに思ひわぶ、君はまざ〳〵大和路に、ありとしりつゝ、妹と夫の、山のかひなく隔てられ、心にかゝる朝な〳〵、さくらも雲のたゝずまひ、そなたの空のみ瞻めては、月も日もわが爲に、照らし給はぬかとかこち侍りしが、やゝ名告りあうて年來の志はいたしたり。かくは命も惜しからず、今の養父は平三と呼ばれて、卑しき世渡はすなれど、心ざまは立ちまさりて、財寶の爲に惑はされ、信義を失ふ人にあらず。恩愛もいとふかきに、思ふ程は孝行もえつくさず、又母の生死も問ひ定めずして、儚なくなり侍る事、いと悲しくはあれど、緣故もしり給はぬ、園花どのとやらんに、妬まれんは罪なほ深し。御身の忠義になるならば、殺してたべ。」とかき口說き、芝生に座を占め、掌を合はし、白く妙なる項を伸べ、一花咲ける姫百合の、散らすを遲しとまつ程に、半七ます〳〵嗟嘆して、「われそのはじめ、殺さんと思ひ定めしはい身を潔くせんとてなるに、既に吾妹子なりとしりて、これを殺すは義に違へり。さればとて夫婦もろともに存命へては、事を忠義に假託けて、逃げも躲れもしたりなんど、いはれんは影護く、厚倉ぬしへ面ぶせなり。さればとて和女を殺しては、丹波都どのへ誓ひ給ひし、父母の言語も徒らなり。そなたはとにかく存命へて、程經なば、平三どのに尋ねあひ、孝行を盡し給へ。義を守れば不孝なり、只死すべきわが身ぞ。」と、いひつゝ刀を拔きかくれば、三勝慌てて携り留め、「こは淺ましき事なし給ひそ。忠孝に身を殺し給はば、など、『三勝も諸共に、死ね。』とはいはで生き殘り、物思へとは、情ある言の葉に似て情なし。よしや人は何ともいへ、親と親とが誓ひつゝ、許せし御身の妻ならずや。もろともに世を去りては、影護しとおぼしなば、わが身こそ死すべけれ。いと理なし。」と恨みごち、携り添うたる刀の鞘に、落つる涙はしら鮫の、玉も數ます鮫人の歎きもかくや哀れなり。半七は三勝に諫められ、つく〴〵と思ひかへして刀ををさめ、「げにわれながら愧てり。そなたも殺さじ、われも死なじ。潛かにこの地を立ち退きて、一日なりとも妻と呼び、夫と呼ばれて年來の、節操に報はば亡き母の、庭の訓へも忠も義も、守袋ぞ絆しなる、今もこゝに。」とかき分くる、胸の鏡もあひ見ては、樂昌公主の故事も、漫に思ひ出でられつ、「いざ給へ。」とて身を起せば、「わが身もこゝに。」と三勝が、項より外す掛紐も、是れやふたゝび結ぶの神、迭身代りの形見さへ、全聚るも惡因緣、「よしそれとても郎君の御惡名だに雪めなば、夫婦がうへは數ならず。とはいへ父はわれ故に、罪得給はんよ。」と思ひやる、大和にあらぬ山の挾を、ふりさけ瞻れば月魄も、やゝ傾きて木の間漏る、遠寺の鐘も音づれて、草葉に集く蟲の聲、いとゞ哀れを千寸穗の薄、かきわけて夫婦後になり、先にたちてゆく程に、

白河山をうち踰えて、湖水を見れば漣や、わがしがかくす陰もなく、天はほの〴〵と明けにけり。かくて半七三勝は、させる由緣はなけれども、近江國多賀莊は、佐々木の一族在城して、洛へも遠からず、世わたるに便宜の地なるよし、豫て聞けることもあれば、軈て彼所に赴きて僑居す。然るに此のごろ三味線といふ樂器世に行はれて、これを嗜むもの多かり。これなん三勝が父、丹波都が彈き初めたるものなれば、いとゞ昔を忍ばれて、三勝は洛にありける日、よく做ひ得たりしかば、彼此の女の童に、彼の三味線を敎へ、半七は男の童に、手跡の指南をして、艱難の中に月日を過ぐすに、その年の十月より、三勝有身りて女子出生す。親の手づから守り養育む子は、恩愛も一しほ深ければ、夫婦はたゞ掌の中の玉と慈しみ、その名を阿通と呼びつ、面影は父母に肖て、いと美麗なり。さる程に光陰矢の如く、又梭の如く、お通ははや五歲になりにけるが、母の三勝が、毎日に彼此の女の童に敎ふるを聞きなれて、まはらぬ舌に、梛節唄ふも可愛し。かかりけれど、家は究めて貧しくて、只ひとり子を養ふだに、物足らぬことのみなれば、夫婦をり〳〵談合し、「この所世を忍ぶには、究竟の地なれど、山ふところなれば、絕えて大和の音づれを聞くよすがもなく、洛の景迹をしるによしなし。鎌倉は洛にも劣らぬ都會の地にて、諸國の人の集合ふ所なれば、外ながら、大和なる父の事も、又三勝が養父、平三が事を傳へ聞く、よすがもあらんか。」とて、家財を沽却して路費とし、親子三人多賀の莊を首途して、中先道を下りけるに、時は九月の始めにて、住みつかぬ旅寢も寒し。ゆき〳〵て、水薦刈る信濃なる、沓掛の驛に宿かりし夜、半七俄頃に發熱して、こゝち死ぬべく覺えしが、終に風濕となりて腰たたず、藻鹽草かきあつめて、齎したる路銀も、こゝに至つて使ひ盡し、進退究まりて、いかにともすべなけれど、三勝はいとかひ〴〵しく看病し、しばしが程は、衣服を賣りて、旅籠を貰ひ、藥の價にしたれども、いく程なくそれも盡きたり。しかれどもしらぬ里に來ては、物借るべき友もあらず。かかりせば今しばし、多賀にあれかしと悔い思へど、思ふのみにてそれもかひなし。一夜々々に寒けくなれど、親子が膚はなほ夏のまゝにて、又やお通さへ病みもせんかとて、父母はいとゞ心くるしく、お通は友もなき旅の徒然に堪へず、「この廣き宿よりも舊の狹き家が住みよし、翌は多賀へ歸らし給へ。」とて泣きにけり。彼を見我を思ふにも、半七はいよゝ肥だちかねて、轍魚の泥に吻くに異ならず。されば三勝が心ほそさはいかならん、寔に是れ苦中の苦、この秋は只わが身ひとつの秋かとて、かこつなるべし。

三七全傳南柯夢卷之四　終

三七全傳南柯夢　卷之五

東都　曲亭馬琴編次

羈旅の宿の上

半七が宿かりし沓掛の客店は、驛稍盡處にて、いと大きやかなる家なれど、昔しのぶの生ひ茂る、埋れ井の車と共に、身上久しく廻りかね、綱代天井は中孕みて、雨漏に煤を彩り、壁の腰張悉く剝げて、長押より月をも引くべく、高麗縁の席薦處々切れて、葉を裂とせし故事も思ひ出でられ、竹縁は斜に朽ちて、絃斷れし琴にも似たり。さればこゝに一夜を明すもの、或は廻國の修行者、或は伊勢參宮の男の童、囉齋物まねの乞兒なんど、皆米はそなたより出して炊がし、枕一つを借りて、燈火だに置かず。牛は牛づれの一隊、鼻より脱ける訛聲にて、小曲子囂しく謠ふあれば、欠の跡の念佛を聞き咎めて、物あらがひする題目宗あり。聲の高さは山里の老翁、眼の光るは浦曲の家々にや、朝だちすとて、「草鞋穿きかへられな。」と罵り、菅笠蹈み潰されて、「同行の面汙せり。」とて、いきまくもをかし。衆皆出で去りたる後は、大風の俄頃に凪ぎたるごとく、搔きおとせし蝨の外には、とり遺したるものなし。座敷いく間もあるかひには、三勝は一間を借りて、病みたる夫を臥さし、破襖もて、出居のかたを塞ぎたれば、かかる徒と物いふ事もあらねど、毎夜にかはる彼此人の、うち語らふ聲を聞きて、慰むる日もあり、又わがうへに思ひくらべて、世を觀ずる夕も多かり。かくて半七は、こゝに病み臥してより、思ひの外に日を過ぐし、物みな沽り竭して、いよゝ術なし。常言に座して食らへば山も空しといへり。よしやいかなる恥を忍ぶとも、夫を濟ひ、女兒をも餓ゑはさせじとて、三勝はますゝ志を勵まし、お通がもてあそびの三味線は、彼がいとほしむものなれば、近江を出づる時も、行李の中に包み入れて、もて來つるが、皮も破れたれば是れのみいまだ賣らず。三勝はこれこそ究竟のものなれと思ひて、夜毎に笠を深くし、忍び〳〵に彼の三味線を抱きて、街を徘徊し、人の門に佇立みつゝ、こゝろにあらぬ梛節後投節といふ。故あり畧レ之。を謠ひて、錢を乞ひ米を得て、その日〳〵を過ぐせしが、お通をばよく睡らして出づるほどに、絶えてかくとは知らざりけり。半七は又三勝に、かく淺ましき所行をさすること、みなこれわが身ゆゑなりと思ふにも、いよゝ世の中の形なくおぼえて、顏色もやゝ焦悴れ、ある夜、三勝が出でゆくを目送りつゝ嘆息し、うたてやな、我も一度は、續井家の近從に召され、君父の蔭とはいひながら、人なみ〳〵の世を經しものを、忠義の爲に不忠といはれ、不孝の子となりしより、年豐かなれども、日を算へて食らひ、世は暖かなれども、わが眼には春色

なく、千辛萬苦にあふみ路なる、多賀に住みわびて出でたるが、又や旅寢に病む鴈の、妻子に憂きを見するこそ、わが病著より苦しけれ。さるを三勝が信々しく、晝は終日看病し、夜は恥を忍び門に立ち、親子三人が玉の緒を、三すぢの絲に繫ぎとむる、その三味線の手の内を、受くる扇は名も高き、舞の太夫のなす事か。しげれ松山筑波山、降りて今の籬節も、此邊の人には馬耳東風、かかる時にも藝は身を、助くる程の薄命、大和にありて三勝を、妻としお通を產ましなば、乳母に抱かし傳げて、假初の出居にも、商人等には會はせもせじ。それ悔しとは思はねど、我ゆゑに三勝には、いくその物を思はせて、舞子に劣る乞食を、さしつゝ見つゝ存命へては、たえて世にあるかひもなし。白河にて死すべかりしに、彼が心操を、いたづらにはなしがたさに、よしなや六年生き延びて、いとゞ歎きをまさしたり。貧の病に身の病、片輪車の足腰たたで、いつまで思ひ沉むべき。愁ひにわが身あればこそ、彼等は人に寄りがたけれ。われなくば人も憐み、よろしき方に給事へて、立ちまさることもあらん。親はなくとも子は育つ、歎くは愚癡か子を思ふ、程には親をおもはなくに、父はいかにかなり給ふ。園花も今ごろは、他し緣や締びけん。もししからずば恨むらん。とてもかくても活きがたき、わが身を捐てなば妻や子の、またうかむ瀨もありぬべしと、こゝろひとつに覺期して、さて翌の夜を待ちにけり。ともしらずして三勝は、その夜五六合の米と、二三十の錢を得て、二更の比及に立ちかへり、まづ夫の安否を問ひ、お通が睡轉けたるに枕さし、曉の炊ぎを誡へなどしつ、小夜更くるまで半七が腰を搔い擦り、行末來しかたを語り慰むるに、半七は今宵かぎりの名殘ぞと思ひしかば、こゝろよげにうち晤譚ひつ。且くして三勝は、夫の睡れるを見て、潛やかに手を休めつゝ物を引き被け、お通を搔い抱きて、夫の側に臥し、喘朝とく起きて火を乞ひ、粥を煮さして、夫と女兒に食はし、われは餘れるを啜りて終日看病す。その苦辛艱難は、比へんに物なかるべし。かくて三勝は、この日又宵の閒に街に出でて、物を乞はんとするに、お通は晝寐したればにや、常にかはりていまだ睡らず。半七が顏の色も、きのふよりあしう見ゆるに出でかねて、とかくする程に、初更の比及にも向とす。あまりに思ひかねて、夫にいふやう、「この夜をいたづらに明しては、翌の炊ぎをいかにせん。しかはあれ、今朝よりわきて食もすゝみ給はず、お通さへ睡らぬに、迹を慕はば便なかるべし。今宵は出でずもありなんか。」といふに、半七答へて、「いなわが身食のすゝまざるは、起居自在ならで、内の透かぬ故なれば、患へとするに足らず。お通をばともかくも、嫌し爲へて睡らすべし。夜毎の事なれば、邂逅は出でずもがなと思へども、翌の炊ぎに物缺けては、いよゝ便なし。更けぬ閒にとくゆきて、とく歸りたまへ。」といふ。三勝聞きて、「さらばしかいたすべし。枕方なる火桶に火も活けて、土瓶に湯もぬるましく侍り。廁へ登かんとて、強ひて身を起し給ふな。お通に指燭を秉らし、坐行りつゝゆき

給へよ。彼處の竹緣は、半ば朽ちて侍り。おなじくはわらはが歸るを待ちて物とゝのへ給へ。」とて、丁寧に聞えおき、さて三味線を袖に抱きて出でんとするに、お通ははやくこれを見て、「母御何地へか行き給ふ、など伴はし給はざる。その三味線はわが身のに侍り、返し給へ。」と携り著く。聲高しとは思へども、ことわりなれば、打ちも吐らず。「そなたを將てゆくべうは思へども、西の街には、おどろおどろしき豺出でて、人を嚙むといふを聞かずや。大人しやかに留主致して、參さまの陪從をせば、小麥の團子を買うて得させん。又この三味線は、皮も破れ、海老尾も缺けてあり、皮張り更へて得させんに、暫し母に貸してたべ。」と、賺されてうち點頭き、「然らば皮を張りかへさし、とくもて來て給はれや。」「應、もて來ざらんや、もて來べし。よく留主せよ。」といひかけて、夫のかたへ注目し、尻切草履の名穿いて足早に、暗の方へと走せ去りぬ。折しもあれ、この夜は合宿の旅客もなく、物たべの翁、只一人こゝに歇りて、半七等が次の間にあり。夕餐も既にたうべ果てて、庖厨の方をさし覗き、「この夜の長さに、宵寢せんはいとをし、其邊わたりを一稼ぎすべきこそ。」といひしらすれば、あるじの男見返りて、「扨も慾にはふけぬ間に、歸り給へ。」と應へして、うち笑へばうち笑ひ、外面へ立ち出でけり。かくて三勝は、こゝろは夫子に引かれつゝ、彈かでかなはぬ絲竹の、節さへ音さへたちかぬれど、その身はこゝの門に立ち、彼處の簷下に立在めば、我に等しき物たべの、目鼻のあたり切り拔きし、紙の假面も怪しけに、撥もつ臂を曲物の、檜の胴に竹を棹、三條の絲をかけ聲も、くりかへしくり反し、おなじ唱歌を一口に、「とぞ申しける。」と唄ひつゝ、ひとつ街を徘徊す。（按ずるに、この後も又「とぞ申しける」といふ乞食ありしにや。ちか頃ある人の所藏、おてゝこ雙六といふものを見しに又この圖あり。寶永年間、武江に折しも九月十八日の月出でて、外より寒きやま里は、蟲の音絶えて遠碪の槌いそがしくなりまさる、世のいとなみぞ哀れなる。さる程に半七は、病み臥して旅の宿を、立つことかたき覺の、こし路に鄰る信濃國、沓掛にくづをれて、我から急ぐ冥土の旅、せめて一筆遺さばやと、墨斗に筆は染めながら、手さへふるひてそれも及ばず。とせんかくせんと思ひくしたるが、お通は日來記憶よく、多賀の莊にて女の童に、母が小曲を敎へしとき、よく聞きとりて謳ひしかば、これを敎へてなき後に、いはせんものをとひとり點頭き、「やよお通、久しく御身が謳歌を聞かず、母の歸り來るまでは、いと徒然に覺ゆるに、謳ひて聞かし給ひてよ。」と、いふは今宵の遺言を、いひ習はせん下心、とはしらねども稚ごゝろに、物あらたまりては恥かはしく、「謳ふ事は唄ふべけれど、三味線なくてはいなゝ。」と、頭を掉るを理とも、いひ難ければ父はなほ、胸苦しさを紛らかし、微笑みて、「是れはさて、三味線なくとも唄はるゝ、近ごろ流行る赤きもののしなじな、唄ひ給へ。」といそがされ、「それも久しく唄はぬ間、うち忘れたる所もあらば、敎へ給へ。」と愛愛しく、小膝なほせば半七は、「これでゝ。」と母親が、忘れてゆきし破扇を、遞與せばお通は拍子を

とり、聲はりあげて唄ひける。

赤き物のしな〴〵（左の唱歌は慶安二年の印本尤草紙、上の卷、第二十九帳に見えたり。編者の自註に、是れはひととせじゆらくの城の時分、京童の小歌なりといへり）

「まうそ〳〵、赤い事申そ。むらさきののきもんがくに、妙覺寺の二王門、百萬遍の御影堂、天滿のかねのを、赤つらの明王、天火、いなづま、朱すりばう、稻荷殿の狐火、祇園殿の犬子、山王の鳥居、猿がしりは眞赤いな、早川主馬の褌、すはうか、紅梅か、ひさや、ひじゆす、ひぢりめんに緋緞子、比古どののひつしき、綿鍋殿のきんちやく、たんしやうどののもちやり、小野木殿のかはらばな、あい殿の御門、ゆふけいのこしざし、朱ざや、朱具足、からのかしら、猩々緋、高雄のもみぢにだんの山の岩つゝじ、けしの花にけいとうげ、御所柿に石榴のみ、はりの木のきりかぶ、鹽引のきり口、鱒のさしみ、いりえび、赤がひ、赤がに、赤にしにかざみのあしをかうにもり、佛じやうばうのくちびる、□宗永のほゝさき、朱屋のかゝの口べに、茶屋のかゝのまへだれ、よしやすのづきん、とうきのまくら、べにさら、朱わん、朱をしき、ちやつか、づすか、朱つぼ、朱からかさ、王のはなか、しゆぜんじ、さてはそゝのまん中、えいやまん中。」

と唄ひをはれば、半七は、思はずもうち笑みて、「長きことを忘れもせず、さてよくぞ唄ひぬる。それにましてなほをかしき、書きおきの事といふ謳歌もあり。今父が教へんに、よく記えて母が歸らば、

唄ひて譽められ給へかし。褒美の餅得つべきぞ。」と、嗾されて稚子は、いとゞ興ある風情にて、「褒美に餅賜はらば、何にまれ記え侍らん、教へ給へ。」といそがしく、小膝すゝめつ今宵死ぬ、父の遺言ともしらで餘念なきその貌見ては、唱歌も口に出でばこそ。心の調べ打亂れ、涙見せじとやうやくに、胸拊でおろし聲細く、長く引く節、急むる曲、只漫にくりかへし、繰りかへして教ふれば、お通は早く習ひ得て、「母さま歸り給へかし。三味線彈かして唄ふべきに、などて歸り給はざる。彼の三味線の張出來ぬか。もし豺にや嚙まれ給ふ、いと〳〵遲し。」と待ちわぶる、欠に睡りを催せば、父は女兒を引き寄しつゝ、「よく記えしか忘るなよ。唄はば母がいか許り、譽めもせん歎きもせん。常には暮るゝと、『寢よ。』といふに、今宵は二更に程もあらじ、尿して來よ。」と手をとれど、立つこと難き蹇の、膝を枕に睡顚け、呼び覺しても應へせぬ、わが子の顏をつく〴〵と、見れば思へば壯士の、勇き心も恩愛に、やるかたなきは涙なり。且くして涕うちかみ、「噫われながらいひがひなし。忠義の爲に捨てし命を、妻や子に絆されて、けふまで活きたる悔しさよ　死せりと聞かば大和なる、園花が恨みも散れ、父の怒りも解けぬべし。とは思へども三勝が、夫の爲に乞食して、懶しとせぬ心操は、比稀なる貞女の鑑。家を失ひ今宵又、われにさへ捨てらるゝ、夫婦一世の別れとも、しらで出で、しらで慕ひし、女兒は母より父がこの、面影を見忘れなば、年長け物の哀れをも、しる程悲しくあらんずら

ん。蚘氣もなくて大きうなり、母に孝行盡せかし。五歳の倀子が三つの緒に、あはして唄ふ歌も今、親の末期の役にたつ、是れも過世の業因ならめ。返す〳〵も敎へたる、唱歌をな忘れそ。」と、寐顏を覗く暇乞、驚かせじと膝を引き、親子餓ゑても渴しても、昔忘れぬ兩刀は、父の像見の亂燒、亂れぬ武士の魂と、押し戴きて拔き放ち、襟寬げて中刀を、腹へ突き立てんとする折しも、閒近く聞ゆる足音に、すは三勝が歸りしかと、刃を隱せばそれにはあらで、次の閒の障子さと開けて、「こは暗いかな暗いかなとぞ申しける。」と亡語ち、呵々と笑ふ聲を聞けば、甲夜に歇りし旅客なり。彼にもしらせじ、三勝が歸らぬ隙にと心いそしく、又とりなほす刃の光に、不圖目を覺す稚兒が、泣き出す聲に引かれてや、三勝は喘ぎ〳〵、走り歸りつゝ佶と見て、「吐嗟。」と內に飛んで入り、夫の拳に携り著き、とゞむる袂も翻り、はら〳〵と落つる錢と米、搗ちて雜ぜたる周章なり。半七聲を勵まして、「怪我なせそ、其處放せ。」と、叱り退くれど三勝は、なほ引き留むる一生懸命、「緣故を聞くまでは、放ちはせじ。」と携る手も、涙に洗ふ氷の刃、反ね退けんとすれど半七は、病疲れて思ふにまかせず、こゝろ頻りに焦燥ちて、「緣故を聞かんとならば、お通こそよくしりてあれ、わがなき後に問ひ給へ。留むるは却つて恨みなり。」と敦圉けば、三勝はその意を得ず、「お通が何をかしり侍らん、こは物にや狂ひ給ふ。」と、いふを半七は聞きもあへず、「やよお通、甲夜の唱歌を忘れな。」と、いはれて女兒は目を押し拭ひ、「母さまわらはは爹さまに、書きおきといふ謳歌を習うて、よく記え侍りぬる。三味線を彈いて給はれ。」と、ほこりかなるも鈍ましく、「さては爹々の遺言を、なき後に傳へよとて、女兒に敎へたまへるか。夫の今般に三味線を、彈いてその子に遺言を、聞く母親はよもあらじ。理なき事をいはずとも、爹々に聞きたる事あらば、しらし給へ。」と急がせば、お通は頭を打掉りて、「三味線なくてはをかしからず。『皮張りかへん。』と宣ひたるに、などてこの儘もて來給ひし。聞かまほしくば彈き給へ。わらはも褒美に餅を賜はらんに。」と回答して、死なんとする父、とゞむる母の心もしらぬ哀れさを、洩れ聞きてや次の閒なる、旅客が擽捋らす、これも三すぢのいとけなき、女兒も耳を側つれば、三勝は嫌しかねて、「やよお通、あれを聞かずや、母はこの手を放されず、外ながら彼の撥音に、あはして爹々の遺言を、聞かしたまへ。」といふ顏を、さし覗きつゝうち點頭き、「母さまは泣き給ふか、泣き給ふ程聞かまほしくば、唄ひ侍らん聞き給へ。」と、座を占めて手を膝におき、稚き聲をはりあげて、彼の三味線にあはしつゝ、謠ふを聞けば、正に是れ、

「みすゝかる、しなのの國に旅寢して、木曾の梯わたりかね、世を姨捨の名にしあふ、病みて伏屋の里遠み、何がうらみの山烏、いたくな啼きそ更級の、田毎の月の影ならで、移ればかはる千隈川、濡らさば袖とつまなしの、神も締ばぬ緣とて、契り淺閒が嶽ならば、翌は煙とたちのぼ

る、心をさぞと久米路の橋、諏訪の湖氷るとも、只都井に歸りなば、束間の御湯の束の間も、寐覺の牀の寐覺にも、そのはらなりしをさな子は、はゝき木とこそ慕ふらめ。かかる歎きにあふちの關も、こえて御坂にさかえよと、思ふばかりぞ慾ひに、子をもち月の駒は食む、からき世を去る蓼科の、言の葉露とかきぞ遺せし。」

と、唄ひ果つれは三味線も、乙の撥をぞをさめける。三勝唱歌を聞けば猶、悲しき事限りなく、「病著に身を恨みて、死なんと思ひ定め給ふは、理に似て理ならず。跡に殘れる妻や子の、心も猜し給へかし。かからんとてか親と子に、讐へし三すぢの一の緒が、斷れて心にかゝるから、慌忙き歸りしも、夫の必死を救へとて、神の導き給ひけん。殺しはせじ。」とかき口說き、諫めても諭しても、半七たえて思ひかへさず、「わが心の中を唱歌にて、しりつゝとむるは聞きわきなし。其處退き給へ。」と焦燥ちつ、退かじと爭ふ二親の、異なる氣色を稚子は、何事とも思ひわきまへねど、うら悲しさによよと泣き、彼方此方に攝箭りて、親子三人煩惱の、羈に狂ふ意馬心猿、繫ぎかねたる玉の緒も、今や斷れんと見えたりける。浩かる處に次の間より、蒸襖を押し開き、「やよ待ち給へ壻どの。」と呼びかけつゝ、三味線引提げて立ち出づる。三勝これを見かへるに、甲夜に歇りし旅客は、笠松平三なりしかば、「こは思ひがけず。」とばかりに、恥かはしさと嬉しさに、暫し言語はなかりけり。

羈旅の宿の下

そのとき平三は半七に對ひ、「かく忽卒に呼びかけたるを、不審しくもおほさんが、豫て女兒が物語りにて、聞きも及び給ふらめ、おのれは笠松平三なり。しかるに今宵、こゝの驛路にて、われに等しく絃歌を賣り、彼此の門に立在む女子あり。笠もて面をかくしたれど、その聲を聞くに、わが女兒に似たり。それかと思ひながらはしなくは問はず、こゝに立ちかへりて窺ふに、果してそれなり。飛びたつ如くにありしかど、まづ御身が遺言の趣を聞かんために、名告りもあはず、この三味線めきたるものを、しかつめらしく擽捋らせど、五十に及ぶ老が手にて、稚き孫が謳に合はし、彈かれうものか愛らしき、聲を聞くさへ涙の種、忍びかねたる竊柱に、撥のあてども定まらず、あとへと戻る絲卷に、音締も濕る憂き思ひ、恩愛の桎かけて、御身が自害をひき留むる、調子ちがひの不骨者、かく淺ましき旅をして、東の果てまで呻吟ふも、三勝が往方をしらまほしさ、圖らずも歇りあはして、いかでか壻を殺すべき。」と、いひも果てずつと寄つて、矢庭に刃を奪ひとり、やがて鞘に納めて、三勝に遞與しつゝいふやう、「僂ふれば六年の昔、三條河原にて、御身を人に奪ひ去られしとき、われも脚平足平を殺したる罪、脫れがたくおもひて、その夜洛を逃げ去り、四年餘りを奈良にて過ぐし、高天神の茶店にて、領主の代參かとおぼしき武士に割籠を惠まれ、大佛のほとりに到つてこれを披けば、思

ひもかけず飯の中に、一包の金を埋みて、三勝が身價と寫したり。事の爲體いと怪しければ、緣故をしるよすがもやとて、『豫て三勝に由緣あり。』と聞く、五條にいゆきて、赤根半六主の事を問ふに、里人答へて、『彼の人は、その兒半七といふもの洛にありて、三勝とか呼ばるゝ舞々を誘引ひ逐電したる罪によつて、永く出仕を止められ、直蟄し給ふなり。』といへり。こゝに至つて我おもへらく、三勝を奪ひ去りたるは、結髮の夫半七にてありし。ともしらざれば方人せし徒と挑み爭ひ、人を殺す大罪を、犯せしこそ悔しけれ。かかりせば、などて一言我にはしらさざりけると、恨みながら疑ひはなほ解けず、彼の金を投りしもの、彼か是かと思ひまどひ、その細しきをしらん爲に、南都に乞食して、年月を過ぐせしが、終に御身の往方もしれず。今はとて彼の地を立ちはなれ、それより諸國の靈場を順禮して、此の秋善光寺へ詣で、なほ彼此を吟呻へども、始めより件の金は一枚も喪はず、年にも恥ぢぬ小曲子を唄ひ、路すがら人の門方に立ち、形なき世に存命へたる效ありて、多年の志は致したり。面をあはせし事はなけれど、彼は夫婦が中に儲けたる女兒、これは、『大和にあり。』と聞きし半七殿なりけりとは、襖を隔てて三勝が、『夫よ。』『わが子。』と呼ぶにてしりぬ。見れば又思ひしよりは、夫婦が稚樹の花も移ろひ、我もかくこそ老いにけれ。さるにても彼の身價は、何者か贈りたる。半七殿のなせし事か、六年以來の疑ひを、はらさし給へ。」と信やかに、問へど恨みは露許りも、えいはぬ男だましひに、半七はいよゝ恥ぢてや、さし俯いて回答せず。三勝いたく打泣きて、「養育の恩を仇にして、罪を得さし、物を思はし、淺ましい世を渡らし侍る、不孝は勸解ぶる言語もなけれど、浮きたる情由にて奔れるにはあらず。みな是れ夫が忠義故に、不意に再會しつるなり。はじめをいへば箇樣箇樣、終りをいへば如此々々なり。」とて、園花が事、吉稚丸の事、二郎太夫、曾太郎が事、全八、蝶九郎が奸惡に至るまで、一五一十を物がたり、且白河にての爲體、多賀の莊を住みわびて、近ごろ鎌倉へとて旅立ちたるに、半七が暴に病みて、進退究まり、物みな沽り竭して、すべなき事、此彼審かに聞えしらすれば、平三は聞く毎に嘆賞して已まず。そのとき半七は、やうやくに頭を擧げ、「緣故は目今三勝が申せし如し。おのれ白河にて死すべかりしを、三勝に諫められ、かかる形容にて、舅どのに名告りあふこそいと面なけれ。示さるゝ三勝が身價のことは、和州續井家の老臣、厚倉二郎太夫友春が、しのびやかに贈りしなり。そのはじめ三勝を、結髮の妻おさんなりとは、我もしらず。彼を奪ひ去つて、郎君の御惡名を雪め、直に刺し殺して、われ又自殺し、情慾の爲にせざる、身を潔くせん物をと、只管思ひ定めたれど、恨みもなき人の女兒を虐ぐる、その罪はいと深し。『せめて三勝が身價は、その親に與へ給へ。』『與ふべし。』とて五條なる、旅宿にて厚倉氏と、後の事さへ相語ひおきしが、彼の人、言を食まずして、件の金を投れるなり。然るに御身は義を守りて、その金を喪はず、

艱苦を厭はで三勝が、往方を索ね給ふこと、世にも稀なる大丈夫、半七が及ぶ所にあらず。いと賴もしく候へ。」とて、頻りに稱贊したりしかば、三勝も又嘆賞す。平三聞きて、「いな我、女兒に舞々はさしたれども、彼が粉黛の骸骨を賣りて、自の老樂をはからんとまではせず。これ志氣あるものの常なり。只御身夫婦が孤忠心烈は、日を同じうして語りがたし。この夫にしてこの妻あり、誠に一世の奇耦、天の結べる良緣なり。加之孫女兒が怜悧しげなる、容止も父母に似ていと愛でたし。年は何歳ぞ、名は何と呼ばるゝぞ。」と問はれ、お通は雄手の指を開き、「年は斯う、名はお通と呼ばれ侍り。日來母御が、『汝にも、祖父さまの在す。』と、いひしらし給ひしかば、見まくほしう思ひ侍り。いつまでも爰に坐せよ、爹さま母さま中よくして、譽められ給へ。」と、いはけなき言の葉は又二親の、袖にも露ぞおき餘る。平三は目を押し拭ひ、膝にお通を引き載しつ、「かかる女兒をもちながら、死なんと思ふ親も親、恩愛の絆しには、賢愚剛臆の差別なく、猛將勇士も異らぬものを、鬼々しきも事によれ。」と、恨むも親愍の喞言なり。半七は平三に諫められて、終に志を果し得ず、「こは死ぬるにも死なれず。」とて、しば〳〵歎息したりける。この時夜は既に更たけて、宿の主が臥したる、套房の方へ遠ければ、この件の事をしらず。平三は膝に睡れる、お通を三勝に抱きとらし、胴卷の財布より奈良にて得たる、身價一包をとり出して、夫婦が間におきならべ、「三勝が苦節むなしからずして、今幸ひに、彼が身價百金あり。これをもて、半七どのの醫療、心のまゝにせば、身の病著はいふも更なり、貧の病も又愈えなん。心づよく思ひ給へ。」と、いひ諭しつゝ、これを遞與せば、半七頭を左右に掉り、「舅の好意はさる事なれども、その金は、わが夫婦の爲に用るがたし。故いかにとなれば、前にもいひつるごとく、三勝を半七が結髮せし、女子としらざればこそ、厚倉氏、彼が身價を投りて、その親に酬ゆるなれ。もしはじめより、半七が[illegible]の妻なりとしらば、この金は投りもせじ、御身も又受け給ふべからず。しかるを今これをもて、自を安うせんとはかるときは、はじめの忠義もいたづらならん。只金はこの儘にて、折をもて厚倉に返し遣はし、又御身の一生は、夫婦がともかくもして養ふべし。しかせざれば義に違へり。そは思ひもかけざる事なり。」といふ。平三かさねて、「いはるゝ所實にしかなりといへども、今この金を返せばとて、只一夜の中に、大和へとゞくにあらず。しばしこれを借りて服藥し、病愈えて後、その缺けたるを調達へて、舊へ返すとも遲きにあらず。何事も平三にうちまかし給へ。」といふに、三勝も又さま〳〵に言語を竭して、やうやくに納得さし、さて次の日より、醫師に見せて、價貴き藥品をも厭はず、それがいふまゝに療治せり。さるからに宿のあるじ夫婦は、平三が半七等ともろともに、返留するに至つて、はじめにも似ず、錢あるを見て訝しみながら、等閑ならず款待しけり。かくてまた二十日あまりを經て、半七が病著おこたり果て、手足舊のごとく健かにな

りしかば、三勝はいふもさらなり、平三ふかく歡びて、半七にいふやう、「しらぬ鎌倉に赴かんより、おなじくは浪速へゆきて、活業をし給ふべし。彼處は洛へも遠からず、われ又土地の人氣をしれり、かならず便宜を得つべきなり。」とて勸めしかば、半七これにしたがひて、親子四人、遂に沓掛をたち出で、更に西を斥して走ること、十日あまりにして、浪速に到り、長町といふ所に借家して、皆もろともに膝を容れ、「何をがな活業にせん。」と議するに、平三は原來俳優の事に熟れて、鬘を作るにこゝろを得たり。これより思ひつきて、入髪といふものを作りはじめ、半七は毎日に彼此にもて出でて、これを鬻ぐに、頭髪うすき者、頭髻を太やかにするに、究めてよし。」とて、買ふ人も多かりけり。そののち三勝、又蓑鬘といふ假髪を工み出して、平三とともにこれを作る程に、はじめの入髪は、頭髻のみなれど、蓑鬘は鬢の薄きを掩すなれば、魏宮に蟬鬢を製しはじめ、綠雲擾々として、曉鬘を梳るがごとく、婦女子おほいに珍重し、蓑鬘を作り出したればとて、三勝半七を綽號して、長町の蓑屋となん呼びにける。さればはじめの笠屋をば、こゝらわたりの人はしらず、隱蓑屋と世をしのぶ、半七もこゝろの外に、商人となり下り、「住めば又住吉の、岸の姫松年預御達、假髪めされよ。この外にも、髻結、眉掃、玉櫛笥。」と、二年近く浪速津を、呼びあるけども沓掛にて、數日の療治に三勝が、身價を遣ひ減らし、又こゝに來つて、活業をいたすにも、本錢諸雜費、これ彼一三十金に及べるを、なほ曠ぶに至らず。「いかにもして、件の金を舊の數にあはし、厚倉一郎太夫に返さばや。」とて、親子夫婦これが爲に幾その心を盡し、夫は聊かも活業に懈らず、妻は又節儉を宗として、飲食も薄くすれど、毛より細き瘦世帶にて、二三十兩の金を、忽地に貨殖ぎ出すべうもあらず、これのみならで、半七は、父半六が安否、こゝろもとなければ、しのびく〳〵に奈良と五條の爲體を探り問ふに、「半六は今なほ閉ぢこめられて、いといたう老いくたち、園花は、一たび想思病にうち臥してより、たえて首をもたゞけず、この七年が程、死にもやらず活きもせず。されば典膳夫婦はます〳〵半七を恨み、女兒をさまざまに諫めこしらへて、再びよろしきかたに、緣を結ばせんとすれども、園花はいよゝ志を固うして、承引かず。只旦けても暮れても、半七が事のみに、思ひほそる。」と聞えしかば、半七は、「父もはや、一たびはよろこび、一たびは懼るゝ齡なるに、われゆゑに罪を得て、久しくからきめ見給ふこと、いと口をし。」とうち歎き、園花が心操も、不便には思ひながら、父を救ひ彼の女子を慰むるよしもあらず、三勝もこの事を聞きて、「園花が心の中を思ひやり、夫をおもふは、われも他もかはらぬものを、もしわが夫婦存命へて、浪速にありと聞き給はば、さこそ妒しと思ひ給はめ。一たび緣故を聞えしらして後は、わが身は尼になるべけれ。」と、おもふ程を半七に告げ、「夫が忠義むなしからずば、大和へ歸らし給へ。」とて、あらゆる神佛に祈りけるとぞ。

主なき園の花

さても蟻松典膳が女兒園花は、往年半七が、舞々と奔りしと聞えしころ、妬しと思ふ氣色なく、只身の形なきを歎くのみ。いよゝ望みを失ひて、つくづくと思ふやう、わが夫は人となりその心ざま貞しければ、舞々なんどにこゝろ惑ひ、忠孝兩つながら缺き給ふやうはあらず。もし彼の舞々は、豫て聞えしらし給へる、稚馴染の結髮、おさんどのとやらんにてはあらざるか。然らば彼の人存命へて、洛にありけるに環會ひ、已むことを得ずもろともに迹を闇うしたまふにや。とまれかくまれこの事には、深き故こそあらめとて、遠く慮る程、墓なきものはわが身にて、淚の雨に枕も朽ち、括り目解けし長總の長き病著となりしより、針灸藥餌も驗なし。父母はこれが爲に、いとゞしく胸を苦しめ、さまざまにいひ諭して、半七が事を思ひ絶らせんとすれば、却つて病をますにすべなく、只典膳も敷浪も憤りを忍びて、半七が事をいひも罵らず。園花は、また密かに五條へ消息して、をり〳〵半六が安否を問ひ、これは日來嗜み給ふものなり、彼は堅やかならで、おん齒にあひ給はんかとて、狹もの廣ものの魚肉野菜、調理したるを贈り遣はし、また蟄居たまへば、氣の結ほれ給はんかとて、佳酒を贈るときもあり。春のをはり冬のはじめには、衣服の洗ひ濯ぎにも心を著けて、よろづ乏しからぬやうに賄ひ遣はすに、父母にはふかく匿して、こゝろ利きたる奴婢、只二人にこの條の事を與らしけ

り。半六は、園花がかく信やかなるに感淚を拭ひあへず、いかなれば半七は諒すくなき舞々に思ひかへて、かかる貞女をふり捨てたる。さまで虛けき者にはあらざりしが、舞々といふ老狐に魅れられ、親をも妻をも思はぬよ。九つの世に生は變ふるとも、半七はわが子にあらず。只園花のみ、實の女兒と思ひ進らするとて、心ほそき限り書い寫め、返事する日もありしとぞ。かくて春去り春來つて、既に七年を過ぐせしに、この頃たれいふとはしらず、「半七は彼の舞々を妻として、浪速の片ほとり、長町といふところにあり。今は商人となりて、蓑屋と呼ばれ、假毛といふものを鬻ぎて活業とし、お通といふ女子さへ產まして、既に六歲になりぬ。大和へは十里に足らぬ浪速津に住ひて、世をも人をも憚らぬ、嗚呼の白物なれ。」とて、瀋中もつぱら風聲す。園花は速くこれを傳へ聞きて、一度は半七が恙なきを歡び、又一たびは、父母もし聞きしり給はんには、主君の威勢ひを借りて、いかなる祟りかあらし給ふずらんとて、更に安き心もなし。あるとき又思ふやう、半七ぬしに不慮の事ありては、「みなわが身の妨みにて、父に勸め、辛きめ見する。」なんど、世の人はいふなるべし。よしやわが夫、舞舞を伴ひて、何國の浦に在すとも、よそながらその安否をしるときは、慰むよすがともなれど、わが身の心操は、言告けやらん便もあらず、とくこの風聲をいひ止めかしとて、いと胸くるしく思ふ折しも、果して典膳も、半七が事をよくしりて大いに怒り、密かに敷浪に緣由を物がたり、「彼いかにして

年來の慣りを散らさん。」といきまくを、婢竊聞きして、軈て園花にかくと告けにければ、園花打驚きて、さればこそわが思ふに違はね。今は只この身を殺して父母を諫め、夫を救ひて年來の、誠心をもしらし侍るべし。しかなり〳〵と思ひ定めたれど、氣色にもあらはさず、頃しも年極の上旬、宵の霰も吹き霽れて、深けゆくまゝ氷る夜に、園花竊かに起き出でて、そと行燈を引き寄する、腕も細りて力なく、寢亂したる鬢の毛の、顏に懸るを搔いあぐれば、只あやにくにはふり落つる、涙に墨を摺り流す、嫁入の時の硯箱、夫の紋とわが紋を、蒔繪ちらしも徒らに、夏毛秋毛とふる筆の、命毛も今宵限りなる、ともしり給はぬ父母の、歎きもさこそと推量られ、翌はわが身を啼く鳥の、迹の事さへ細々と、書い寫めては讀みくだち、かかる文にもめでたくは、親は祝ぎ進らする、候もしにて筆を留め、卷き納めんとするに思ひもかけず、いつの程より闕窺みけん、咳きして屏風搔い遣り、内に入るを見れば母親なり。園花阿呀と驚きつゝ、忙はしく遺書を、袂の内に引き返すを、見れども母は見ぬ顏して、ほとり近う居ていふやう、「昨今は寒さも殊さらにおほゆるに、久しく病みて坐しながら、小夜ふけて何をかし給ふ。流るゝ水にこゝろあれども、落る花にこゝろなしとか。鬼々しき半七を、なほいとほしみ給ふから、母が心も安からず、大和にあらゆる神佛には、願事もかけ盡し、顏の細りを見る毎に、わが身の病むよりなほ苦しく、咳き入り給ふ夜半の聲、聞けばとにかく睡られず。しかるに今宵は常にかはりて、人をも呼ばず起き出で給ふは、近曾頻りに風聞ある、半七が事の心にかゝるなるべし。さはあらぬか。」と問ふに、園花は只涙さしぐみて、はか〴〵しくは應へせず、敷浪はつくづくと、女兒の顏をさし覗き、「痛ましや、わかき人の苦勞すとて、いと面痩の見ゆるなり。このごろの風聞を傳へ聞き給ひしかはしらねど、聞かしともなさに默止せしが、半七は舞々の三勝とやらんを伴ひ、商人となりて浪速にあり。女子さへ產ましたりとぞ。參々この事をよくしり給ひて、いたく腹たて搦めとりて、年來の慣りをはらさんと、いきまき給ひつるを、とかくいひ寬めて、けふまでは過ぐしつ。又いひ出づるは今宵はじめなれど、御身が五條へ嫁り給ひし頃、半七は、『誓ひつる由あり。』とて、結髮せし女子の事を、御身に聞えしらし、『離別して奈良へ歸り給へ。』といひつる事、又御身が誠心を告げて、かき口說き給ひし事を、竊聞きしたる事もあれば、此彼思ひあはするに、もし彼の三勝は、半七が結髮せし女子にはあらざるか。然れば彼の人の悞ちのみにあらず、よくも問ひ考へず、緣を締ばし、結びたる、親と親とが過ちなり。さればとて御身が事は、主君に聞えあげて、御許しを受け、婚姻を整はせし半七が正室なるに、縱ひ彼の人結髮の妻あればとて、そは私の緣なり。とまれかくまれ半七は、大和へ歸ることかなはねど、君父に遠ざかりても、婦は夫に從ふが常の道なれば、密かにこの理を述べて、御身を浪速へ送り遣はすべう思ふなり。狹き女子のこゝろもて、か

ならずよからぬ所爲をして、歎きをなまさし給ひそ。御身が操は燒野の雉子、母が心は夜の鶴、夫を思ふも子を慈しむも、いづれか劣り、いづれか勝らん。こゝろ得たりや、こゝろ得給へ。やよ〳〵。」といひ諭すにぞ、園花は目を押し拭ひ、「御慈愛の深きにも、なほ身の不孝はかこたれて、とかく申さんやうはなけれど、半七主の事のみは、親にも身にも寶にも、かへて最惜しく思ひ寐の、強顏き人を夢にのみ、はや七年を過ぐせども、始めより嫌はれし、身を阿容々々と浪速まで、ゆきて恨みをいはるべきか。況いて仇なる舞々の、浮世に色香ます花の、三勝どのと園花を、譬へていはば深山木の、身のなる果てをかくとだに、聞えしらして笑はれなば、恥の辱にて侍りなん。又理に責められて、只假初の捨言葉、かけらるゝとも子さへある、妹夫の中を引き裂きて、妒婦と世に疎まれ、絨目の合はぬ蝶番、閨房の屏風の立つよしも、なくては連れ添ふかひもあらず。世にも人にも捨てられし、冬の扇の骨ばかり、病み髓ひてありながら、我から倦かれに、『彼所まで、ゆけ。』と宣ふは情なし。只願はしきは彼の人に、異なる事もあらずして、いく百年も世に榮え、吉野の花の開く頃は、大和の事も折ふしは、思ひ出して給はらば、なき身の後もいかばかり、喜しく成佛致すべし。親に先だつ不孝の罪、ゆるし給へ。」と合はす掌に、漲り落つる涙の瀑布、岩に堰かるゝ如くにて、われても末に逢はんとは、いはぬ操を母親は、わが身に思ひ比べつゝ、「貞女兩夫に見えずと、口にはいへど始め終り、

樞かならぬは世の中の、人心にてあるものを、親も及ばぬ心操を、言の葉するゐの露ばかりも、いひしらさねば彼の人の、しるよしもなきぞかし。母があしうは計らはじ、何事もうち任し給へ。御身が兄曾太郎は、半七が竹馬の友なれば、これをこそと思ひて、けふ密びやかに御身が年來の物思ひと、母がおもふ程を、審かに聞えしらして相語うたれば、彼、『自ら浪速に赴きて、半七が長町とやらんの隱家をたづね、時宜によらば對面して、緣由を述べ、その應へを聞きて、歸り來べし。』といひき。よしや置き去りに去られても、夫婦の緣はいまだ斷れず。壻が應へを聞きて後、ともかくもなるべきことぞ。あまりに遠慮したまうては、いつ事の果つべうも侍らず。さればとて半七を恥かしめ、爹々や母が憤りを、はらさんとにはあらず。彼の人もあしからず、又御身が操もとゞくやうに、なるとならぬは曾太郎が、歸りて後にしり給へ。雨降りそゝぎて土潤ふといへば、又よき事もなからずやは。」と、さま〴〵に諫めこしらふれば、園花いよゝうち泣きて、「こは勿體なし、わが身故、兄上のはるばると、浪速へ赴き給ふとか。それを推辭ばおん慈しみに、悖る不孝をいかにせん、いかにせん。」とて泣き沉む、六の花とも消えかねて、今や七つの閒なる、十三鐘ともろ共に、枕土圭も落すなり。「いざ睡り給へ。」と母親が、とる手も龜み身も冷ゆる、涙の氷わりなくも、臥簟の内に誘引ひて、やうやく自殺をとゞめけり。さる程に蟻松曾太郎は、母敷浪がしのびやかに、晤譚ひつることあるをもて、俄

頃に浪速へ赴きて、半七が隱家をたづね、その爲體を窺ひて、時宜によらば面のあたり、妹が心操をもしらせばやと思ふに、元來孝心ふかき壯佼なれば、わが身に事の出で來るこゝちしつ、「兩三日出仕せざる。」よしを、同僚の們に賴み聞え、父には、「法隆寺へ詣づる。」といひ爲へて、次の日俄頃に行裝を整ふるに、冬の日の短くて、はや申下刻になりにけれど、心忙はしければ、從者只一人を將て、漫に立ち出でしが、路一里ばかりゆくに、日も暮れなんとす。あまりに急ぎて、燧袋をとり忘れつ、「闇なるにいと便なし。」とて、從者を其所より走り歸らし、尼が辻に到つてこれを待つに、既に初更の比及なれど、そのもの歸り來ざりしかば、餘りに待ちわび、遂に巷轎を傭うて、闇嶺を越えてけり。そのとき二人の轎夫は、麓なる樹の下に轎を扛きおろしつゝ、もろともにいふやう、「いと難儀なる嶺を越えたるに、身重尋常に勝れ給へば、筋骨を痛められ、彼も我も脚氣發りて、今は一足も運動きがたし。定めの建場までは、今暫しが程なり、こゝより暇を賜はるべし。」といふ。曾太郎これを聞きて、頭巾うち戴りたるまゝ、やをら轎より出で、「病とあればせん術なし。さだめの所までは、なほ遙かなれど、足は數のごとくとらするなり。」と、聞えしらしつゝ、腰なる打違の財布を解きて、錢三緡を遞與さんとするに、轎夫は手にもとらで冷笑ひ、「こはいかに思ひたがへ給ふ。かばかりの駄賃を賜はらんとて、こゝまでは乘せず。定めの外なる酒賃はさらなり、かく脚氣さへ發らし給ふに、藥の價をたまはるべし。いと心づきなし。」と咤くにぞ、曾太郎、また一緡の錢を倍してさし出すを、一人の轎夫搔い取り早く、礰と投げかへして、眼を睜り、聲をふり立て、「百二百の半錢にて、人の命を買はるゝものかは。こは我を欺くにこそ。」といきまけば、殘る一人もすゝみ寄り、「とかういはんは迂遠しく、路銀も衣服も脫いで遞與せ、とらしてゆけ。」と罵りもあへず、左右より引つ挾み、いと囂しく競ひ懸れば、曾太郎忽地大いに怒り、「扨は汝等賊なるよ。孤客と思ひ蔑り、可惜首をな喪ひそ。」と、あざみ笑つて立つたる目前へ、閃かす息杖を、左と右へ入り錯はし、直に撲地と打ち落せば、「こは口惜し。」とて諸共に、つかみ著くを拂ひ除け、項髮捉つて雄手雌手へ、撞と投ぐれば岸破と起き、倭僮きながら前後より、組まんとするを寄せも著けず、足を飛ばして丁と蹴倒し、手首背へ捽胡し、轎のほとりへ押し著けつゝ、結び下げたる提灯の火光にて、始めてその面を見れば、此の轎夫は、別人にあらず、往に南都を追ひ放たれたる、今市全八郎、布施蝶九郎なりしかば、曾太郎ますゝ怪しみて、「羞をしらざる愚物ども、蟻松曾太郎を見忘れたりや。」と、いひつゝ頭巾を搔い脫れば、全八、蝶九郎も、やゝその人なるを認つて、大いに驚き、「思ひかけず。」と慌忙き、逃げんとするを起しも立てず、すらりと引き拔く刀の背打、肩腰の嫌ひなく、打ち居ゑて佶と睨まへ、「無賴の兇賊、かかる景迹にてありながら、猶不忠不義の天罰とはしらず、却つて惡心增長して、旅客を引剝せんと致す。

その罪許しがたしといへども、潛びの旅なれば、奈良へ領てゆくことをせず、しばし首を纏がするなり。かくても羞ぢずや、なほ悔しからずや。」といひ懲らし、又數回打つ程に、全八、蝶九郎苦痛に堪へず、只、「許し給へ、許し給へ。」と叫びけり。そのとき曾太郎は、刀ををさめ、腰に著けたる小提灯をとり出して、轎なる提灯の燈をうつし、遂に浪速をさしていそぎ去りしが、ゆくりなく更闌けたれば、その夜は平岡に宿かりて、彼の從者を待つに、次の日從者は深江にて追ひ著きけるとぞ。さる程に、全八、蝶九郎はやうやくに身を起して、まづ自脈を診り、打たれたるところ〴〵に、唾を塗りて拊捺りなどし、直と呆れて、目を見あはしつゝ、蝶九郎がいふやう、「今夜稀なる孤客を乘したれば、よき鳥にこそと思ひつるに、幸なきときには眼も眩み、心まで鈍くなりけん、いかに闇なればとて、尼が辻にて足を定むるとき、汝も吾も、曾太郎なりとは思ひがけず、可惜肩を費し、剩へからきめを見たる、忌々しさ。」と呟けば、全八も面を顰め、「七轉び八起きといへば、よき事もあり、あしき事もなくてやは。」といふ。蝶九郎かさねて、「よき事といへば、けふよきことを聞きつ。汝もわれも恨みある、赤根半七は、彼の三勝を妻として、浪速の長町にありとぞ。この事もし實ならば、密かに這奴を結果け、三勝を奪ひ去り、遠く東の果てなどへ賣り遣はさば、今夜の損は補ふべし。さはあらぬか。」といふを、全八聞きもあへず大いに歡び、「そは又金の蔓を掘り當てたり。しかはあれ半七は曾太郎に

も劣らず、柔術劍法人なみに勝れたれば、俄々しくは計り難し。とせんかくせよ。」と示めあはし、夜の山下は、聞く人もあらねば、なか〳〵に憚る氣色もなく、聲高やかに唔譚ひつゝ、遂に空轎を扛き起し、これも平岡のかたへとてゆきぬ。抑件の全八蝶九郎は、七年以前に、奈良を追ひ放たれてより、攝津河内の間を徘徊し、到るところ惡しき友とのみ交らひ、よからぬ所爲を事とせし程に、里人等に憎まれ、いよゝ便なくなりしかば、一人もろともに旅轎を舁きて、生活にすなれど、恥をしらざれば羞づることなく、動もすれば旅客を劫して、非法の錢を貪りとらんと計較みぬ。固に是れ、憎みてもなほ憎むべき癖者なり。

三七全傳南柯夢卷之五　終

三七全傳南柯夢　卷之六上

東都　曲亭馬琴編次

橋本の歇船

赤根半七は、心にもあらぬ世わたりして、憂きに馴れたる浪速津を、「假毛々々。」と呼び歩けど、利を射て妻子を安らかに、養はんとにはあらず。三勝が身價をもとの數にあはして、厚倉二郎太夫へ返さばやと思へども、細本手なる商ひにては、頓にその金調はず、胸くるしくも是年も暮れて、はや師走六日になりつ。この日もまた常のごとく、假毛の箱を脊負ひて、大和橋のほとりを過るに、客店の二階より、障子を細やかに押し開き、こなたを指さしつゝ、「あれ呼べ。」といふ聲するを、わがことかとて立在めば、旅客の從者めきたる男、慌はしく走り出でて、半七を呼び入れ、「近曾この津に名たたる、假毛蓑鬘とかいふものを覊ぐは、汝なりや。」と問ふに、半七答へて、「おのれすなはちその商人なり。假毛をめさるべうもや。」と、信だちていふ。奴隷點頭きて、「わが主は西國にて人にもしられ給ふ豪家なるが、家務につきて、久しくこの津に逗留し給ひつ、春は松の過ぐる頃及に、歸國し給ふとなり。よりて、『家裏に、假毛を夥買ひもてゆかん。』と宣はするぞ。汝が今齎したるは、いか許りの價物にや、一つ二つ見せよ。」といふ。半七聞きて、やをら擔箱を負ひ卸し、括りたる袱の四隅を打披きて、一疊の假毛をとり出し、「これは入髪と稱へて、男の假毛なり。それは蓑鬘と名づけたる、女の假毛なり。こゝにありあはするものは、凡そ五六貫の價物なるべし。」といふ。奴隷重ねて、「わが主は親族も多く、又毎日に交加ひする友どち、幾人といふ事をしらず。かかれば家裏も、又多分なるに、さばかりの價物にては、事足るべうもあらねど、まづまうして見ん。」といひかけて、件の假毛を携へ、又忙はしく二階に走り登り、しばしありて、一握りの金をもて出でて、半七にいふやう、「この金は三十兩あり。『今これをとらするなれば、數の如く假毛を進らせよ。設し家に結ひたてたる價物なくば、日數三十日を限りてもて來よ。價は目今、殘りなくとらするなり。』と宣ひき。然れば後の證據に手形書い寫めてよ。」といふ。半七はこれを聞きて、大きに呆れ、世に假毛を買ふ人はあれど、三十金の花主は、思ひがけざる僥倖なり。天わが夫婦の誠心を憐み、今はからずして厚倉ぬしへ返すべき金を、得さし給ふなるべしと、心の裏に深く歡び、墨斗より、束みじかき毫を拔き出して、手形をさら〳〵と書きをはり、「宛名は何とつかまつるべうもや。」と問ふを、奴隷さて覗きて、「殿の名は畏し、可介とせよ。わが名にてよかんなん。」と、いふに心得果てて、その手形を可介に遞與し、「宣ふ如く家にも三

十兩の價物はなけれど、この大晦日までには、結ひ立てて進らすべし。價は只今、半ば賜はつてもあるべきに、殘りなく惠まし給ふぞ忝き。」と、應へつゝ、金を取つて押し戴き、算へ果てて懷に挾め、假毛を悉く箱より出して、これをも可介に遞與し、軈て空擔を脊負ひて歸りける。半七が心の中、いかに嬉しかりけん、氣色にさへ見えて哀れなり。然るにこの日、今市全八郎布施蝶九郎は、半七が長町なる家を窺ひ、折よくば彼を打ち殺して、三勝を奪ひ去り、宿恨を消らさんとて、二人うちつれ立ちて、長町へゆく折しも、大和橋なる客店より、半七が夥の金を得て出づるを闕窺み、潛かにその迹を跟けて、人なき處に到らば、打ち仆して金を奪ひとらんと計較みたるが、黄昏なれど年の終りなれば、人の往來も繁くて、その隙を得ず、たゞ徒らに、門方まで跟け來り、生垣の陰に隱ろひて、裏の容子を張ひけり。ともしらずして半七は、暮れ蒐る日の心忙しく、乾菜干つく諸折戸を、明けんとするに、三勝は夫の足音をよくしりて、「參さま歸り給ひぬ。」と、いへばお通は走り出で、入る間遲しと携り著く、恩愛の絆しには、活業の疲勞も厭はず、擔箱を緣頰に扛き下して、わが子の手を取り、「扨もこの冷さよ。霜瘡は痛うないか、些と爰に居て煖めよ。」と、引き寄する地爐より、三勝が汲んで出す、茶さへ妹脊の水入らず、「けふは常より遲かりし。」と、いふ間に平三は、引き散らしたる選毛片よして、貧には瘦せる小火鉢の炭團搔き起して邊ちかうもて出で、「半七殿寒風にては、思ふ程の商ひもなかりけん。家に居てさへ堪へがたきに、さぞな全身も氷りつらめ。やよ三勝、茶粥なりとも溫かに、炊ぎてはやく進らせよ。」といふに、半七小膝をなほし、「いな、物ほしうも候はず、何事もうちおきて、まづ申すべき事あり。三勝も歡び給へ。嚮に大和橋の彼所なる、客店へ呼び入れられ、良しき旅客の家裏に、『價三十金の假毛を買はん。』とて、金をば直に殘りなく遞與し、『三十日を限りて數のごとくもて來よ。』と誂へられたり。かかる花主は世に稀なり。去年より已む事を得ず、是彼に遣ひ減らしたる、彼の身價も三十兩なり。今これをもて、その缺けたるを補ひ、厚倉ぬしへ返しなば、心少しは安かるべし。これ見給へ。」といひかけて、金を懷よりとり出せば、平三はいふも更なり、三勝大きに歡びて、「そははからざる僥倖なり。是れも御身の忠孝を、神佛のあはれみて、かくは惠まし給ひけん。かからん端とて昨の夜延の、燈花も愁しみの眉を開く祥にて侍るめり。まづ神棚へ御燈を掲げて、酬愿をまうさん。」と、いひつゝとり出す燧箱、火ともし比の昏紛れ、潛び入つたる布施今市、緣頰よりさし覗き、點頭きあふともしらずして、平三は腰に著けたる鍵を撈り、押入の戸棚を押し開きて、厚倉が贈りたる、金を殘りなくとり出し、これを半七に遞與していふやう、「貧しき家に不相應なる、預りものと思ふから、夜もうちとけては睡られず。翌は朝まだきに、われその金を奈良へもてゆき、潛かに御身の志を聞えしらして、厚倉ぬしへ返すべし。いよゝ舊の數に合へりや、よ

く見給へ。」といふに、三勝は、今燈をうつす行燈を、夫のかたへさし向くれば、半七はまづ三十兩の金を置きならべ、又平三が遞與せし金を、財布よりとり出して、と見かう見つゝ眉を顰め、「こは不審し。けふ假毛の價にとて得たる金にも、續井家の刻印ありて、はじめの七十金に露違はず。さては大和橋なる旅客は、厚倉二郎太夫にてありけん。彼の人わが們の苦心を知つて、假毛を買ふといひこしらへ、ふたゝびこれを贈れるなるべし。もししからずば、見もしらぬ痩商人に、その價物を後にして、この夥なる金をとらせんや。あなうたてし。」と呆れ惑ひ、搔きよする金は茶靡の、花ものいはねば面のあたり、主や誰とも問ふ由なく、共に呆るゝ三勝は、平三と面をあはし、思ひ惑へる油斷を見て、緣頰を踏み鳴らし、「七年以前三條河原にて、脚平足平を殺したる、笠松平三、市の正の仰せを稟け、搦め捕らん爲に向へり。覺期せよ。」と、罵りもあへず、蝶丸郎つと走り入り、火鉢をとつて投げつくれば、行燈滅えて發と立つ、灰に咽びて翁も壻も、意ならず周章し、驚きおそれて泣くお通を、抱き寄する三勝も、たえてせんすべなかりける。その隙に蝶丸郎は、金を殘りなく搔い摟みて、外面へ逃げ出づるを、半七やうやくに見て大いに怒り、「後姿は認りある惡棍の蝶丸郎、こゝに來つて賊をなす、這奴のがさじ。」といきまきて、中刀搔いとり追つ蒐くれば、平三も後れじと、壁に掛けたる六尺棒を挾み、喘ぎ〳〵追ひゆくにぞ、三勝は聲をふり立てて、「物とり復さば追ひ捨て給へ。夜の

道なるに謀られて、慢ちなし給ひそ。」と、呼べど早くも見えずなる、ゆく先いかにとおぼつかなく、灰はやう〳〵おちつけど、猶落ちつかぬ胸を拊で、お通を嫌しこしらへつゝ、碎けたる炭團の煨を、忙はしく爐の中に掃き入れて、行燈を引き起し、かくして又燈を點す。後方に忽地人ありて、物をもいはず抱き留むるを、呵呀と打驚きて、身を返り、搔い退けんとするに、その人引き留めたる袖を放さず、呵々と笑つていふやう、「別れてより六年あまり、既に七年を經たれば、面忘れやしたりけん。おそるゝものにはあらず、はじめ半七が同僚なりし今市全八なり。曩にそなたを伴ひ出でたるとき、三條河原にて、平三に遮り留められ、剩へ半七によき事を致されて、果ては南都を追ひ放たれ、牛馬にも劣りたる辛き世をわたる事、みな是れ君ゆゑなりとおもへば、聞ゆべき恨みもあれどそれはいはず、否といふとも、應といふとも、直に東の方へ將てゆきなん。誘給へ。」と引き寄するを、三勝はふり拂ひ、搔い遣りて走り退き、腹だたしさに聲ふり勵まし、「扨は夫の物がたりにて細しく知る、惡棍の全八なるよ。汝蝶丸郎と諜し合はし、又や半七殿に寇せんとて、一人は金を奪ひ去り一人は殘り居て、わが身に迫る横道もの、物いふも穢らはし、とく〳〵歸れ、歸らずや。」と、勇くは罵れど身ひとつの、人を呼ばんも鄰は遠し、流石に怖さ口をしさ、早く夫の歸れかしと、思ふ氣色を見て全八は、又呵々と冷咲ひ、「さいへばなほおもしろし。よしや一日、酒は飲ますもあれ、忘るゝ隙もなき君が、

往方を其首か是首かとて、この年來心を竭し、索ねあてたる寶の山、手を空しく歸らんや。かくても半七が事を、思ひ棄てずばいかにせん。この女の童なりとも將てゆきて、伽やらうに賣つて遣り、酒貲にせねば持にならず、誘來よ。」といひも果てず、項髪無手と引き飇み、あれや〳〵と叫ぶお通に、手拭銜して小腋に抱き、走り出でんとすれば三勝は、遣らじと留むるを突き倒し、臥しつゝ携るを丁と蹴かへし、「欲しくば彼首の橋詰まで、些許出てたべ。」と戯れて、闇のかたへと走り去る。三勝はやや身を起して齒を切り、憎しと思へど人質をとられていとゞせん術なく、わが身擒となるよりも、猶心苦しくて、聲を限りに、「やよ。」と呼び、子に引かれ行く夜の鶴、見失はじと追つ蒐けたり。かくてその夜も初更の太鼓、うち出で見れば夕月夜、六日の影のほの暗き、往來迹絶えし相合橋に、霜おきはえて風寒み、千鳥鳴くなる枯蘆の、穂がくれて橋梁に、釣船一艘歇りける。さる程に三勝は、ふり亂す黑髪の長町より喘ぎ〳〵、裳踏み反して追つ蒐くれば、全八はお通を引き抱へて、橋の眞中に立ち留まり、欄干に身を倚せかけ、且くこれを待つ程に、三勝軈て走り來つ、諸手をかけて稚兒を、とらんとするを全八は、背向になりて寄せも著けず、臀の癰瘡を、ばり〳〵と搔きながら、見かへりていふやう、「やをれ三勝、などてかく、物の憐れをばしらざる、『諸共に。』といへば承引かず、『しからばこの童なりとも。』とて將て來れば、いづ所までもとて貪緣るはいかにぞや。半七が事を弗と思ひ

絶えて、全八に從はば、こゝが妹脊の相合橋、又從はじとならば、童が爲には二逆の川、半七を思ひ棄つるとも、この童を殺すとも、二つに一つは絶體絶命、心を定めて應へせよ。いかにやいかに。」と逼められて、三勝は柳眉を逆だて、疾み見る睛に涙を含み、「穢きかな全八郎、稚き者を苦しめて挑むとも、わらはが心は石より重し、いかで轉ばす事を得ん。よしなき事をいはんより、お通を返せ。」といきまきつゝ、又携りつくを、撞と踏倒して、眼を瞪らし、「面に似けなくしふねき衒妻、ぜひなく殺生せねばならず。是れ見よかし。」と欄干の、上にさし出す稚兒より、母は目も曛れ神消え、「やよ待ち給へ、いふ事あり。」「しか止むるは從ふ意か。」「いな、いかでこの身を汙さるべき。」「しからば只今手を放つぞ。」「そは餘りに情なし。」「情なしとは君が事、泣きたうても猿轡、さすが命の惜しければこそ、この兒は甚う戰慄へるなれ。かくても節操は破られずや。」と、活けみ死しみ理なき呵責に、何と回答へん言の葉も、只泣き沉む折しもあれ、丁々はつしと打ちあふ太刀音、「奸賊布施蝶九郎、逃ぐとて何所まで脫すべき、蓬し返せ。」と呼び留むる、半七が勇き太刀風に、靡きたつ蝶九郎は、且戰ひ且走り、相合橋の欄干へ手をかけて、跳り入らんとする所を、半七刃を閃かして、背を一太刀丁と砍れば、「呵呀。」と叫びて彼此遠き、闇はあやなし危きそなたに、泥挙に佛とあふこゝちし、三勝はこれを見て、「やよわが夫、お通を救うて給はれ。」と、叫ぶ折しも誰とはしらず、後方よりつと來りて、

お通を抱きて走り行く。全八は目方力を戮はして、蝶九郎を助けんとせしが、餘りに事急にして、終に及ばず。半七が撃つて蒐る太刀の下をかい潜り、拄へ縁はる三勝を丁と蹴倒し、朴刀引き抜きて、逆へ戰はんとするに、半七奮然として、獅子の怒りをなし、「わが子の仇人、其所な退きそ。」と聲ふり立て、踏みこみて撃つ程に、全八忽地辟易して、鵲より乳の下まで、ばらりずんど砍り下げられ、さと濆る鮮血と共に、撞と倒るゝを乗り懸りて、數回胸前を刺しとほし、刀の血を押し拭うて、鞘に楚と納むれど、納まりかねたる今宵の殃危、身にもかへじと慈愛しめる、わが子と金を失ひて、夫婦迭に慰めかね、橋より下をさし覗けば、歇りし船も艚ぎかへり、跡なくなりし蝶九郎は、水に溺れてや死したりけん、又浪を潜ぎてや脱れけん、「お通が往方いとほし。」とて、夜は黒みし河水を、つくづくと見て茫然たるその時、三勝は、全八がお通を搔い飼みて走るを追ひ留めんとて、爰に來れる一五一十を、半七に聞えしらし、猶かき口説きていへりけるは、「お通が危窮の時に臨みて、御身も蝶九郎を追つ蒐けて、こゝに來給ふかひもなく、とりも留めぬわが子の魂の緒、六歳の年極の初めの六日に、命終るも前世の、業因にや侍りけん。あな胸痛や。」と許りに、轉輒びてよゝと泣けば、半七聲を勵まして、「お通が事は歎くとも及ばず、今蝶九郎を撃ち漏らして、既に金を失ひぬれば、厚倉二郎太夫に對して、わが志を述べ難し。とてもかくても半七が、忠義は今宵この川の水の泡となりたるなり。さればとていたづらに歸るべきにあらず。まづ河原にそうて蝶九郎が生死を見定め、お通が往方を索ねばやと思へば、御身はこゝより長町に立ちかへりて、平三どのに緣由を告げ給へ、とく〳〵。」と急がしたつれば三勝は、もろ共にともいひかねて、目を拭ひつゝ夫にむかひ、「宣ふごとく、二人に一人は立ち歸り、爹々に告げずは便なかるべし。よしや蝶九郎が生死しれずして、金をとり復すよしなくとも、翌は早天立ちかへり、爹々にも談合し給はば、又よき事もなからずやは。かならずしも思ひ逼りて、悲しき事をな聞かし給ひそ。」と、丁寧にいひ諭せば、半七聞きてうち點頭き、「われもさこそ思ふなれ。深けぬ間に。」といそがされ、妻のこゝろは跡へのみ、殘る影なく入る月の、暗きに迷ふ愛惜の、やるかたなきは理なれど、歎くは愚癡と諫められ、「妾は泣かねど御身こそ。」「いなそなたが。」と面をあはし、再び絞る相合の、橋の袂も子故の闇、立ち別れんとする折しも、後方に張ふ夜行翁、「すは人殺し。」と呼ばはりて、打ち鳴らさんとする太鼓の撥を、斜にすつぱと半七が、刀尖餘りて切り落す、提灯滅えて野干玉の、夜の浪音水鳥の、對に離れて三勝は、長町を斥して歸りけるとぞ。

長町の五味（上）

笠松平三は、その夜さり蝶九郎を追つ蒐けたるに、老の足なれば終におくれて、半七にさへ得あはず。初更の比及に徒らに立ちかへりて見れば、半七はさらなり、三勝おつうも何地ゆきけん、燈火細

くして、裏には人ひとり居ず。さては半七がいまだかへらざるを心もとなく思ひて、女兒は孫を伴ひて、出でたるよ。月も入るべきに、居つゝ待てかしと呟きて、暫しこそありけれ、やゝ更けゆけど、壻も女兒も歸り來ざれば、落ちもつき難くて、提灯に火をうつし、引提げて出でながら、門の戸を鎖さんとする折しも、三勝は髪をふり亂し、洗足にて只一人歸り來つ、「そは爹々に坐さずや。」と、いふ聲も常に異りて、喉さへ泣き腫らしたり。平三見かへりて、「いかに半七には逢はざりしか、お通はなどて伴はざるやらん。」と、問ふに三勝忽ちよゝと泣きて轉輾ぶにぞ、平三はます〳〵訝しみて、慌しく扶け起し、引いて諸共に裏に入りて、猶しば〳〵問ふほどに、三勝ははふり落つる涙の間に、相合橋にての爲體、全八が事、蝶九郎が事、「お通を水中に投められたらん。」とて物がたれば、平三は聞きもあへず大いに驚き、「噫悲しきかな、孫は惡棍に殺されたるよ。されど半七が、當の敵全八を擊ち留めたるのみ、少しは心やりなりかし。然らば我も半七に力を戮はし、蝶九郎が生死を見定めて、彼の金をとり復し、お通が事も聞き定めて來べし。よしや翌まで歸らずとも、おちゐて家にまち給へ。かかる時にはわきて心を放しがたし。よく鎖して睡り給へ。」と聞えおきて、再び提灯に火をうつし、又六尺棒を突きたてて、裳を引折り走せ去りけり。かくてその夜も明け放れ、冬の晷は短きに、長き別れの悲しくて、三勝は只ひとり、わが子の爲に裝る香も、煙となりし夢の跡、家廟の障子引き開けて、しばし念じて、又舊の地炕のほとりに座を占めて、形なき世に消え殘る、身は埋火とさし對ひ、胸の鏡もうち曇り、とぎなき宿の物思ひ、この廣き浪速津に今をはるべとこの花も、昨夜のまゝに歸り來ぬ、夫と父はいかにぞと、いと長町に待ちわびて、心おちゐぬ冬籠り、いさゝむら竹吹く風も、夕ぐれ近くなりにけり。浩かる處に武士の、妻とし見えて襠の、前かいとりて括帶、練の帽子の白雪を、頭には戴けど、齡はいまだ四十あまり、盛り過ぎにき山茶花の、花田の油簞挾箱、薦包の行轎を、奴隷に扛らして門方なる、栁染の暖簾を打瞻め、「みの屋とあれば爰ならん、案内よ。」といふに心を得て、一人の從者が暖簾を、つとかき揚げてさし覗き、「假毛とやらん、蓑蠹とやらんを鬻ぐ、蓑屋とはこゝなりや。物申さん。」と呼門ふを、三勝聞けども出でも迎へず、「蓑屋はすなはちこゝなれど、幸なき事の侍るによつて、父も夫も家にあらず。もし假毛を見給はんとならば、翌又來ませ。」と許りに、「憂きに迫れば生業も、誰が爲にせん。」と亡語つ。門なる女房は、これを聞きて、轎をかきおろさし、從者等を其處に待たしおき、「ゆるし給へ。」といひかけて、つと裏に入りしかば、三勝は、思ひがけねば顔うち瞻り、「まづこ此方へ。」と請ずるを、固辭もせで上座に、居替るも訝しく、「何處より何事の、おばしまして訪はせ給ふやらん。門聞きたがへ給はずや。」と、いへば莞然とうち笑みて、「さおもはるゝも理なり。半七は家に居給はずとか。そなたは豫て聞き及ぶ、舊は洛の大柏、笠屋

三勝どのなりや。」と、問はるゝも恥かはしく、「宣ふごとく、舞々の三勝は妾に侍り。」と答ふれば、膝を進め、「聞きしに勝る縹致よし。物いひ樣にて怜悧しさも、思ひやられ侍るかし、と許りにては、なほ不審しく思ひ給はん。わが身は彼の、そなた故に不忠不孝の人と呼ばるゝ、赤根半七が舅、大和國續井家の一の老臣、蟻松典膳が妻に侍り。」と聞きもあへず三勝は、顏赧やかに何となく、轟く胸を押し下げて、「さては夫の物がたりにて聞き及ぶ、園花さまの母御にてましますか。浪花の蘆も枯れ果つる、年の終りにはる〳〵と、訪はしたまふは故こそあらめ。」と、半ばいはさず、「喃三勝どの、大家の老臣を岌に被て、不義淫奔を責め罵り、恥かせんとて來もせしかと、推量り給ふかもしらねど、絶えてさる筋にはあらず。色情は思案の外とやらん、引手夥のその中にて、誠を見する密び寐も、度重なりてはたつ名も厭はず、かく對ひとげて居たまふと、大和へも仄聞え、打腹たつかと思ひの外、なほこりずまに園花が、夫の無事を歡びて、近屬は顏の色も、些は見直す母が嬉しさ、わが子を譽むるにはあらねど、妒みごゝろは露ばかりも、なければこそこの七年、置去りに去られながら、親の諫めも聽き納れず、長き病著を幸ひにして、ふたゝび嫁らぬその節操を、せめて半七に聞えしらし、『しのびしのびに折節の、音耗もさしたさに、事の爲體を見定めてよ。』とて、園花が兄なる曾太郎を、一昨この地へ來したれど、とかく女子は女子どち、半七はとまれかくまれ、三勝殿の思ふ程を、聞かずばことも果てじと深念し、夫典膳へは、園花が病苦平癒の立願に、天滿の天神へ詣づるといひ爲へ、今朝旦まだきに奈良を出でて、うちつけに訪ひはべり。聞けば女兒さへ擧け給ひぬるとやらん。なに事も世過ぎ身過ぎ、縱ひ商人になり下りても、半七は恙なく、御身も無事におはするを、見れば恨みもなには潟、あしかれとては訪はぬものを。」と、思ふにも似ず親しみの、信々しさに三勝は、罵らるゝより胸くるしく、さし俯いて居たりしが、やうやくに頭を擡げ、「緣故をしり給はねば、いかばかり恨み給ふとも、理ならずとは聞き侍らず。しかるを却つて信やかに、宣はすればいとゞなほ、御心の中推量られ、影護くも面なさの、身のいひわけに似たれども、わらはは故ありて稚きより、半七ぬしと結髮けし。緣故をいふ時は、阿翁のよしあしを、あげつらふ悲しさに、いはずとすれば事ゆかず。元來血氣の惑ひにて、色に愛で、愛でられし、妹脊ならねばわが夫の、洛にて迹を暗うせしも、ふかき忠義の爲なれど、是れも又あらはにはいひがたし。とてもかくても世の中に、賴む陰なき三勝が、たえて恨みもなき人に、恨みられなん罪障は、重きがうへの小夜衣、淫婦といはるゝとも、ふたゝび夫が世に出でば、尼とも奈良へ歸參の事、神や佛へ合はす掌も、只これのみに侍りし。」と、いひ果ててよゝと泣き沉めば、敷浪聞きて涕うちかみ、「さてはそなたは半七と、結髮せしその人なるか。緣由を審にはせねど、五條にて半七が園花に物がたるを、不圖聞きて初めてしりぬ。しかりとも、理

もていふときは、わが女兒は主君の御許しを受けて、結びたる緣なり。又そなたは稚きときに、親と親とが結號けたりとも、私の緣なれば、いひとくに後ぐらし。さればとて、子まである人を、むじんに去らして、心持よしとする、鬼々しきわが女兒にはべらず。よりてそなたを舊のごとく、半七に齊眉けて、これをば側室とし、又園花は、奈良と浪花と隔つとも、契りはかはらじと、半七が只一筆、消息して給はらば、耆婆遍鵲の藥劑にも、まして女兒は本復せん。これは是れ母がこゝろなり。又夫典膳が志はさにあらず、『半六に欺かれ、可惜女兒を、虛氣き半七に妻あはして、面目を失ふのみならず、多くもあらぬ愛子をば、見殺しにする事よ。既に半七が在處しれたれば、搦め捕つて年來の、憤りを散らさでやは。』といきまきつ。こは親の心にては、いと理なれど、それも又園花が、病著をます一つなり。思ふ事かなはねばこそ憂世なれ。いひ難き事なれど、夫の爲と思ひ諦らめ、われから飽かれて半七と、離別して給はらば、夫典膳が憤りも忽地に散れ、半六どのの孥居も免り、差によりては半七が、歸參の願ひも稱ひなん、半七を罪なはし、半六どのに日の光も見せぬも、又見するも、そなたのこゝろにあるべきなり。痛ましや半六どのは、老のくり言世をはかなみ、『舞々の老狐に妖れられたる愚者よ。わが子憎し。』と罵るは人前ばかり、この七年が程閉ぢ籠められて、いとゞしく老い髏ひ、慾に惑ひし自の愧ちを、泣き暮し給ふとぞ。思ひ死する園花や、子故に惑ふ半六どのを、助くる上に半七も、發跡でて忠孝の、道にしも立ち返らば、孰かそなたを譽めざるべき。遐れぬ契りを思ひたえて、別るゝ苦節は今の世に、稀なる女子といはれ給はば、三方四方の身の修まり、そなた親子が朝夕は、わらはと女兒が身に飾る、四時の衣服を薄くしても、よきに調ぎて進らすべし。

私ならぬ私は、女兒が可愛きのみには侍らず、聞きわき給へ、うけ引きて、給はれかし。」とかき口說けば、三勝は堰きかねて、涙の泉むすび果てぬ、妹脊の中も胸の中も、裂くほど苦しき浮世の義理に、何とゆうべの相合橋も、あはれぬわが子と夫にさへ、別れの櫛も膝に落ち、せめて彼處を死にどころと、われとわが身に暇乞、亂るゝ髮を搔きあげて、「事をわきてかくまでに、聞え給ふこそ嬉しけれ。わが身ひとつを退き侍りて、半七ぬしを世に出し、阿翁の直籠りも、許され給ふよすがともなるならば、これにます僥倖は侍らず。」といふ顏を、つく〴〵とうち瞻め、「そなたなり、園花なり、揃ひも揃ひし心操、容止のみかこゝろまで、美し過ぎて痛ましさも一入、日來怜悧しき女子にても、かかる時には愚にかへり、理も非も聽かぬ習俗なるに、かくてこそはる〴〵と、浪速へ來つるかひはあれ。よしや半七と緣は離るゝとも、けふよりは女兒とも思ひ侍り。向にもいひつるごとく、とまれかくまれ朝夕の、煙は細くもたてさし侍らん。さていふ事のみいひならべて、なほ問ひ殘せし事こそあれ。半七が洛にて、跡を暗うせしは、忠義の爲と聞え給ふこそこゝろを得ね。もし歸參のよすがとも

なるべき筋には侍らずや。明白にいひがたき事なりとも、いとほしと思ふ壻が上を、爭でか人に漏らすべき、しらし給へ。」と詰り問ふにぞ、三勝終に推辭むことを得ず、七年以前に半七が、二郎太夫と諜し合はし、吉稚丸淫樂の惡名を雪めん爲に、結髮せし女子なりとはしらずして、三勝を奪ひ去り、直に殺さんとしつるはじめより、白河山にての爲體、多賀の僑居、信濃路の艱難はさらなり、平三が義に勇む、鋭き志に至るまで、涙とともに物がたれば、敷浪驚きてます〳〵嗟嘆し、「思ひきや半七は、比稀なる忠臣にて、其方は又薄命の貞婦ならんとは。その忠臣も不忠といはれ、操貞しきも淫婦と罵られ給ふから、腹だたしくもあるべけれど、前世の惡業にて、善人も發跡でず、才あるも用るられず、一生思ひ屈まりて、墓なくなるも多かめれ。世は形なきものに侍り、とはしりつゝも妹と夫の、中をむじんに引き離くるは、いぶせくも腹くろき、老女とのみな思ひ給ひそ。子をもつものは又人の子の、親の心もしらでやは。半七が女兒も、今玆ははや六歳になるとか。彼の人大和にあるならば、園花も今ごろは、子ども二人も產むべきに、わらはに血筋はあらずとも、壻が冢子なりせば見まくほし。なぞやかく腹きたなく、匿して逢はし給はざる。その子が何をしるものぞ。」と怨ずれば、三勝は思ひ忘れぬわが子のこと、「そのお通は。」といひかけて、幾度か目を押し拭ひ、「隔てて逢はし進らせずと、恨みたまふも理なれど、お通は儚なくなり侍り。」と聞きもあへずうち驚き、「そは何の頃より病み侍りし、俄頃に蚍のとりつめしか。」と、問はるゝ程なほ胸苦しく、「病みて且く介抱し、膝の上にて死すならば、同じ歎きもかくまでに、悔しくは思ほえじ。故ありて身にもかへがたき金と共に、疇昔惡棍の全八、蝶九郎に奪ひ去られ、相合橋の夜の霜と消えはべり。さるによつて、父平三も半七も、出でてよりいまだ歸らず。子に後れ夫に別るゝ、便なさを察し給へ。」と、回答へつゝ又も袂を絞りける。

三七全傳南柯夢卷之六上　終